



実物のない複製の複製、
起源のない引用の引用



PART II

星野廉



目次

本物のない複製の複製、起源のない引用の引用 *	3
空っぽ *	39
似ている、そっくり、同じ、同一 *	57
映る、写る、移る *	73
人は存在しないもので動く *	87
こんなの私ではない *	117
引用の織物 *	125
えんえんと迂回しつづけるしかない *	149
偽物っぽくない偽物 *	157
作家、音楽家、芸術家は、作品を残すと言うよりも、むしろ名前と作品名を残す。 *	167
「移す」の代わりに「写す」と「映す」で済ます *	175
固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。 *	181
書いても書いても書いてはいない。	

*	187
うつるはうつる	
*	191
映っている私、写っている私、移っている私	
*	199
とっかかり	
*	215
過剰で過激な想像力	
*	225
うつるとうつすで影を編む	
*	239
言葉と向きあう	
*	251
「そっくり」という、まぼろし	
*	261
樹影、言影、幻影	
*	269
世界にシンクロする	
*	281
意味が立ちあらわれるとき	
*	293
私たちは同じではなく似ている	
*	301
世界の意味、意味の世界	
*	313
「たったひとつ」感、「たったひとり」感	
*	329
学習の成果	
*	341

本物のない複製の複製、起源のない引用の引用

＊

本物のない複製の複製、起源のない引用の引用（更新：2022/11/08）

星野廉

2022年11月4日 12:53

目次

要約

料理は複製

複製度

複製の複数性、無数性

名前の力は強大

にせもの、別物

ずれ、ずれる

似ている、同じ、同一

人間もどき、知能もどき、体感もどき、自然もどき

料理は引用の産物

複製、再現、再演

パフォーマンス

複製の複製、引用の引用、最強で最小最短最軽の引用および複製

何の複製なのか、何かからの引用なのかが不明

巨象は虚像であり、象は像でしかない

写しを写す

複製と引用のながれ

知識・情報、権威・権力、普遍・真理

真偽や善悪や正誤の彼岸へ

二項対立、建前、武力

普遍、真理、ローカル

問答無用に「バン！」とか「ドカーン！」

知、痴、稚、血、恥

大量生産、製品

リアル、代わり、写し

いまここにあるふるえ

究極の複製は文字
翻訳、アイドル、崇拜
大風呂敷を広げる
お知らせ
追記

要約

現在は、真偽、本物と偽物、正誤、善悪の境が曖昧になっている気がしてなりません。複製には複製の本物があり、引用には引用の起源があるというモデルが曖昧になっているからでしょう。そもそも真対偽、本物対偽物、実物対複製、起源対引用、正対誤、善対悪なんて図式はウソという感じです。本物や起源の権威が失われてきているだけでなく、本物や起源という概念を成立させている西歐的な知の枠組み自体が危うくなってきているとも言えるでしょう。

本物や起源の権威が失われていくのと、真偽、本物と偽物、正誤、善悪の境が曖昧になっていくのが、シンクロし軌を一にしているのではないか、という意味です。新たな真理も、さらなる本当の本物も、次の正解も、絶対的な善も、もはや現れないという意味です。

料理は複製

リアルであることに必ずしも実体は要らないのです。

実物や本物も起源（原型・元祖・出典）も要りません。複製や複製の複製や引用が身のまわりにうようよしているじゃないですか。大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画.....。

どれも、あなたにとってはリアルな「物」ではありませんか？ 複製と引用とはそれ自体で完結した「リアル」なのです。人が「似ている」と「そっくり」の世界、つまり印象の世界に住んでいるからです。

(拙文「空っぽ」より)

料理は複製である。そう感じていたのですが、必ずしもそうではない気がしてきました。自分の書いた記事にツッコミを入れてみます。

(なお、ここで言う「料理が複製である」とは、現在食材の多くが、複製である化学肥料をつかって大量栽培されたものであるとか、工場で大量に製造されている飼料や薬剤を与えられて大量飼育された家畜を使用しているとか、複製である化学調味料をつかって

いるとか、材料の多くが工場で大量生産されているという話では必ずしもありません。)

複製には再製という言葉とイメージがつきまとい、再製といえば再生を連想します。再現や再演も頭に浮かんで来て、さらには引用、模倣、反復、変奏というふう言葉とイメージがつぎつぎと出てきます。

私は連想が好きです。AといえばB、BといえばC、CといえばD……。こんなふうに進んでいくのが連想でしょう。A、B、C、D……と少しずつずれたり、ときには大胆に飛躍するのが連想だとするなら、連想も一種の複製なのかもしれません。連想が起きるたびに、ずれが生じるのです。

ずれを考えると、料理は複製とは言えないのではないかという思いに傾きます。レシピやお手本があっても、それを再現するたびにずれが生じるからです。素材や、その時の気温や湿度や天気、火の加減、手順やタイミング、さらには気分によってもずれが起きるにちがひありません。

ずれは度合いであり程度です。家庭料理とプロによるお店の料理では、再現度に差があるとも考えられます。食べ物屋でも、チェーン店とそうではない食堂では、再現の度合いが異なるでしょう。

複製度

そもそも忠実に再現された複製はありえないのではないのでしょうか。そんなものはない、つまり抽象だという意味です。ずれを程度の問題として受け入れれば、ずれが大きい複製とずれが小さい複製があると考えればいいことになります。

複製には程度というか度合いがある——これでスッキリしました。

A⇒B⇒C⇒D

A⇒B

C

D

A、B、C、Dの間にずれが起こります。

$A \Rightarrow B \Rightarrow B \Rightarrow B$

$A \Rightarrow B$

B

B

AとBの間にずれが起こりません。

複製間のずれには、似ている、よく似ている、酷似や激似、そっくり、ほぼ同じ、同じ、同一という具合に度合いがあって、最後には同一に行き着くという感じです。うまい、へた、正確、不正確、精度が高い、精度が低いという尺度ではかることもできるでしょう。

料理を複製としてとらえてみると、本物とか元祖があって、それ以外はぜんぶ複製ということになりそうですが、あなたが毎日食べているものが複製だなんて言われたら、むかつきますよね。「それは違うでしょ」と反論したくなります。

後に触れますが、ここまで述べてきた文章の「複製」を「引用」と置き換えてみても話に大差はないと思います。

複製の複数性、無数性

複製度、つまり複製の度合いを体感するには、複製の複数性をイメージするといいかもかもしれません。現在では、美術や音楽や文学の鑑賞のが複製の鑑賞である場合が多いことは注目してもいい事実だと思われれます。

美術においては、作品が有名なものであるほど、実物よりも複製を鑑賞していることは分かりやすいですが、音楽であれば生の演奏よりも放送やDVDやCDというかたちでの複製を鑑賞していることを意識することはあまりない気がします。文学の場合には生原稿を読む人は稀でしょうから、印刷物あるいは電子書籍やネット上でという意味での複製を読んでいるのがほとんどだと言えます。とくにパソコンのワープロソフトでの執筆が主流になっている現在ではどれが生原稿なのかがきわめて曖昧になります。

絵を例に取ってみます。世界で最も有名な絵画はモナ・リザだと言われますが、あなたはモナ・リザという絵を見たことがありますか？

モナ・リザの現物を見たことがある人よりも、その複製を見たことのある人のほうが圧倒的に多いでしょう。「実物対複製」と単純に考えがちですが、実物はたったひとつであるのに対し、複製は複数あるいは無数にあります。作者および作品が有名であればあるほどです。有名は無数、無名は有数か、たったひとつなのです。しかも、複製は一様ではなく、さまざまなずれをともなって存在しています。あなたの見たモナ・リザと私の見たモナ・リザはきっと別物でしょう。別の複製ということです。不思議な気がします。

絵画は有名であるほどたくさん複製され、その複製を見る人が多くなるから当然でしょう。一方で、有名ではないほど展示会などで実物を見る人がいて、その数は少ないでしょうから、あなたの見た〇〇という絵と、私の見た〇〇という絵が同じであり実物であるということになりそうです。複製のありようと、実物や本物のありようは、理屈では分かるのですが、現象としてよく分かりません。不思議でならないのです。

(楽曲の複製であるレコードやDVDやCDやその放送やネット上での配信でも、複製は多様をきわめています。それぞれが人によって微妙にあるいは大きく異なって感じられるという意味です。文学作品でも、多種多様なかたち（雑誌での掲載、単行本、文庫本、電子書籍、翻訳）での複製での読書がおこなわれています。私の場合には、小説の読書で活字やフォントやレイアウトが変わると別の作品に感じられることがあります。翻訳書とその原著も私にとっては「似ている」別物です。鑑賞イコール複数の複製の鑑賞だと実感します。)

モナ・リザの複製はたくさんの画集や美術書に収録されていますが、それを虫眼鏡で見くらべるとずいぶん差があるのに気づきます。図書館で試してみるといいでしょう。撮影や印刷によってかなりずれがあるのです。私が見た美術書にはモナ・リザを写したモノクロの写真がありました。

インターネット上でもモナ・リザを鑑賞できますが、印刷物として見るのとはやはり違って感じられます。「これはモナ・リザなんだ」と言葉で自分に言い聞かせて決めつけて、頭というか観念で見ると「同じ」でしょうが、「似ている」あるいは「そっくり」なだけです。でも、ふつうは「似ている」とか「そっくり」というふうに見ません。興ざめ

するからです。

自力では「同じ」「同一」なのか「そっくり」なのかを確認も検証もできない自分を人はふつう認めたくありません。人間（ホモ・サピエンス）としてのプライドが許さないからです。

ところで、「同じ」というか「同一」と言ってもいい、モナ・リザの鑑賞法があります。名前で鑑賞するのです。名前という言葉を見るのです。「モナ・リザ」という作品名のことです。固有名詞、なかでも書かれた文字としての名前は最強の複製であり、「似ている」どころかまったく「同じ」なのです。

名前と名詞の力は強いです。人は名前と名詞にころりと参ります。「モナ・リザね、レオナルド・ダ・ビンチ作ですよ、名画ですよ、美しいとか素晴らしいとか感動したって言わないと笑われますよね」という感じです。

楽々複製ができます。いとも簡単に引用もできます。モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ.....。

冗談はさておき、「固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用である」ことは注目していい事実だと思います。ただし、モナ・リザ、Mona Lisa、La Gioconda、La Joconde、蒙娜丽莎、蒙娜丽莎、.....というバリエーションもあることを忘れてはならないでしょう。

(※この章を書くにあたっては、ウィキペディアさんのお世話になりました。作品名の複製と引用、つまりコピーペーストをさせていただきました。)

名前の力は強大

なお、名前と名詞の力が強大なのは絵画に限りません。音楽、スポーツ、料理、製品、映画、放送、お芝居、小説、文書、画像、動画.....。小説で考えてみましょう。小説は名前とキャッチフレーズで読むもので、作品で読むものではありません。

「〇〇作のXXですね、文豪（△△賞作家）ですね、〇X△%&（本の帯や解説や評判で読んだフレーズが入ります）ですね、とりあえず感動したって言うておきましょか、いや難解でしたがいいかも、読んでいない（さっぱり分からなかった・つまらなかった）ことがばれないように気をつけよう」という感じです。名前と文言を引用するだけで事足りません。

「固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。」

おふざけと憎まれ口はここまでにして、まとめます。

有名とは名前が無数に複製され引用されることであり、有名無実という言い回しがありますが、名をあげることが必ずしも実とは関係がないままに権威や権力につながることはよく見受けられます。いずれにせよ、有名とは無数、無名とは有数またはたった一つの実物であるということですね。

たった一つの実物って潔くて格好よくないですか？

ひっそりと たったひとつの ほんまもん

にせもの、別物

複製には偽物というイメージがともないます。これはネガティブなイメージでしょう。

本物とか実物とか現物とか元祖があって、それに似たものや似せたものがある。似ているものは、似せものであり、要するに偽物（贋物）だ。そんな一連の連想が働きそうです。

偽物も似ている物も別物であることは確かです。偽物とは、似ている物の別称であり、蔑称であると言えそうです。引用やオマージュや翻訳や翻案の別称および蔑称が、盗作とか剽窃（ひょうせつ）であるのに似ています。

このように人は印象に左右されます。印象の世界に住んでいるからにちがいません。

したがって、偽物や剽窃と呼ばれているものが複製だということが、おおいにありそうです。

ずれ、ずれる

さきほど上で述べたように、同じレシピや作り方にしたがっても、料理は毎回微妙に異なっているのが普通でしょう。そんなわけで、ずれが生じるのを避けることができない料理もまた複製だと言えるのではないのでしょうか。

味、匂い、見た目、舌触り、手触りだけでなく、食器や食べている場所や時間帯、さらにはその時の気分や体調によっても、料理は微妙に、あるいは大きく異なったものとして人に感じられそうです。だいいち、受けとる側（料理であれば食べる側）の心身の状態によっても、ずれが生じることを無視するわけにはまいりません。

複製という言葉で説明されることの多い、絵や映像を思いうかべると、忠実な複製というものが抽象、つまりありえないものを感じられます。単純に考えて、現実の事物を模した絵は、その事物そのものではないし、現実にある事物や風景を写した写真や動画は、写された対象そのものではないからです。

複製どころか別物なのですが、絵や写真や動画が複製という言葉で説明されることがよくあります。それは、事物あるいは現実を写した複製であるというよりも、事物や現実を写した複製が、複製されてたくさんある、つまりそっくりなものがたくさんあるという意味で言われているのかもしれない。

$A \Rightarrow B \Rightarrow B \Rightarrow B$

$A \Rightarrow B$

B

B

Aの複製（人は似ているとかそっくりとか同じと感じますが、じつは別物です）がBというよりも（このことはあまり意識されませんが）、たがいにそっくりな複製であるBた

ち（よく「似ている」にもかかわらず、後に触れるように「同じ」だとは限りません）がたくさん存在するというイメージです。

似ている、同じ、同一

絵や写真や動画において、ある事物とそれを模したものを混同しないかぎり、「同じ」という言葉やイメージは出てこない気がします。言葉は物ではない、写真は現実ではないと言え、当たり前聞こえますが、人はしばしばその当り前を忘れます。つい同じだと思ってしまうのです。

これが混同であり錯覚です。別物を同じだと見なしているのですから、事実誤認とも言えますが、人間なら誰もがやっていることであってぜんぜん気にならない、気にするほうがおかしいと言う人が多い気がします。私もふだんはそう思っています。

複製という言葉とイメージの根っこには「似ている」があります。「似ている」は印象ですから、検証できません。頭の中を覗きこむことができないからです。ある物同士を似ていると感じる人もいれば、似ていないと感じる人もいるでしょう。人それぞれ、人生いろいろ、「似ている」もいろいろです。

一方、「同じ」は数値化するというかたちで検証できそうです。ただし、人は「似ている」を基本とする印象の世界に生きているので、「同じ」を検証するためには器具や器機や機械をつかう必要があります。人はこういう補助具や装置を発明し洗練させてきました。

その甲斐があって、仲間を月面に降り立たせたり、地球の気温を上昇させることができたのです。この星で他の生き物たちと無理心中する準備も整えました。

私には子も孫もいませんが、この先のことがとても不安でなりません。

人間もどき、知能もどき、体感もどき、自然もどき

器具も器機も機械も人がつくったものですが、それらは「似ている」なんていう曖昧

なものではなく、「同じ」や「同一」という「杓子定規」を基本にしています。杓子定規というのは、プログラミングをイメージすると分かりやすいでしょう。融通がきかないのです。

機械は、人が指示を間違えると正しく作動しませんし、人の思いや感情を察したり付度もしてくれません。人のほうが機械に合わせる必要があります。機械が人に合わせるようにプログラムすることも可能なようですが、あくまでもある程度しかできないのが現状みたいです。

なお、人は自分のつくった器具や器械や機械を用いて、「同じ」と「同一」と「杓子定規」を原理に、人間もどき、知能もどき、体感もどき、自然もどきをつくろうと、あるいは再現しようとしています。結果としてつくっているのは——機械の中身としてのハード面ではなく人間と広義の機械との接点という意味でのインターフェースをイメージしてください——あくまでも「もどき」つまり「似ている」であって「同じ」でも「同一」でも「杓子定規」でもないことは注目していいと思います。

たとえば、スマホをつかうさいに、指先（人にとって最も繊細な部分のひとつです）で画面に軽く触れたり叩いたり撫でたりして文字を入力したり指示を与えたりやり取りをするさまを思い出してみてください。ほとんど感覚というか勘に頼っていませんか？

頭で考えているのではないのです。指で入力していたパスワードや暗証番号を頭が覚えていなくて慌てるという話をよく聞きますが、まさにそれです。あの指の感覚——正確には指でいじっているという意識のない指の感覚と言うべきでしょう——こそが、本物なき複製の複製、起源なき引用の引用の世界におけるリアルでしょう。仮想現実はいま述べた指と意識が直結した一体感というべき、リアリティをこれでもかこれでもかと押しすすめて極めた全身的なものだという気がします。

あるいは、パソコンやテレビの画面や映画館で映像を見る、スピーカーで再生された音楽や音声を聞く行為もそうです。そのものではなく（「同じ」や「同一」ではなく）、「似ている」や「そっくり」を楽しんでいるのです。ささやかながら、小規模ながら、これも仮想現実だと思います。仮想現実はそれほど新しいものではないのです。規模と程度の問題でしょう。

まとめます。

「もどき」による「似ている」と「そっくり」の再現の総決算が人工知能や仮想現実やメタバースなのです。

人が生きているのはあくまでも「似ている」を基本とする印象の世界——アバウトで感覚的でちゃらんぼらんできまぐれ——であって、「同じ」や「同一」や「杓子定規」の世界——厳格で厳密でデジタルで感覚や感情といった曖昧さを許容しない——ではないのです。「楽ちん」と「気持ちいい」と「あれよあれよ」を原則とします。

料理は引用の産物

話を料理にもどします。

料理を複製と見なすのに無理があるのは、上で述べたように「複製」には「偽物」に似たネガティブなニュアンスがあるほかに、料理が引用の産物だからではないでしょうか。

料理はさまざまなものや方法を組み合わせた結果という意味で、引用という行為の産物だと言えそうです。「引用」に似たものとして「剽窃（ひょうせつ）」や「盗用」がありますが、「複製」と「偽物」ほどの強い連想は私には感じられません。

料理は、調味料を含む複数の素材を複数の方法を組み合わせてつくるものであり、レシピは素材と方法からなっています。方法とは手順や動作です。たとえば、切る、ちぎる、混ぜる、たたく、熱するといった動作を、あるタイミングや時間の長さや程度でおこないます。素材の種類や状態や分量といった要素も大切です。

料理が引用の産物（口に入れるものですから「引用の織物」だとぴんと来ません）だというのは、料理が組み合わせであると考えれば分かりやすいかもしれません。組み合わせられる要素が異なると全体が異なったものとして出来上がりますが、その差異は程度の問題だと考えられます。

程度を厳格に考えれば、どれとして同じ料理はないと言えそうです。とはいえ、料理は味覚という、さまざまな要因（時や場所、雰囲気、天候、体調、食べ合わせ、つくった人への配慮や付度など）に左右される曖昧なものです。味だけで味わうのではないのです。

現実にある個々の料理は何かの複製であるというより、あり合わせの材料の組みあわせという意味での引用ではないでしょうか。冷蔵庫の中身を組みあわせて料理をつくることがあります、そのイメージです。

複製、再現、再演

引用の産物としての料理は、複製や再製や再生や再現というよりも、再演なのです。楽曲やお芝居を思いうかべてみてください。演奏や演技には、毎回ずれがともないます。

A⇒B⇒C⇒D.....

AがあってBが生じ、AとBがあってCが生じ、AとBとCがあってDが起きるので、これが各回の演奏と演技であり、その繰り返しの連鎖が再演なのです。再演は複製というより更新に近い気がします。再演は、それ以前の積み上げのプロセスなのであり、絶え間ない動きの中で起きている（うつりずれる）のです。

うつりずれる⇒うつりずれる⇒うつりずれる.....。

毎回毎回の演奏と演技は引用であり、さまざまな要素の組み合わせだからです。ふつう複製という言葉で連想される再製された製品も、引用と組み合わせの産物ですが、演奏と演技は人が演じるパフォーマンス（行為・芸）であるという点が異なります。これは大きな違いでしょう。

なお、演奏や演技には、引用の産物よりも引用の織物という言い方のほうがふさわしいかもしれません。綺麗なイメージですね。

パフォーマンス

最近、スポーツの世界でもパフォーマンスという言葉がよくつかわれます。たとえば、フィギュアスケートや体操競技ではパフォーマンスと言われても違和感を覚えませんが、いつだったか、陸上競技の実況中継をテレビで見ている、やたらパフォーマンスという

言葉が出てくるのに気づいた時には、はっとしました。

パフォーマンス（行為・技・芸）はどのように評価されるのでしょうか。

採点が多いです。数値とはいえ点数ですから、審判の主観と印象に左右されそうです。陸上競技となると、長さ（距離・高さ）、時間、速度、重さというふうに数値で評価されます。好きな言葉ではないのですが、「客観的な」評価と言えるでしょう。

サッカーやバスケットボールのように得点を競うスポーツでも、パフォーマンスという言葉が使われますが、そのさいには個々の技（業）をいわば芸のように見なしている感じがします。「これは見事なパフォーマンスですねえ。神業としか思えません」という具合にです。

パフォーマンスとは、体をつかったある特定の動きを指しているわけですが、それは何度も繰り返されて存在している型（形）だと言えます。その意味では複製なのです。

型は引用・模倣・反復されるうちに必ずずれが生じますから、変奏というのが正確な言い方かもしれません。つぎつぎとずれが起きるうちに、引用元である、元祖・原型・本物・起源が曖昧になります。ある技が模倣され反復されていく過程で、そのモデルが変容するのです。

たとえば、Aさんが創始したXという技を、Bさんが真似て（引用して）Yという形が生まれ、それがCさんによって反復されてZという形に変容した——というぐあいにです。

複製の複製、引用の引用、最強で最小最短最軽の引用および複製

上の例においては、X、Y、Zという技がXという名称の技としてそのまま存続する場合もあれば、YとZという新たな名称で呼ばれることもあるでしょう。そのさいには、ZがXの引用であるとは認識されないかもしれません。

上で述べたように名前の力は強大ですから（人は名前にきわめて弱いので）、名前（名称）を変える（奪う、売買する、なりすます、すり替わる、なりかわる）行為は、出典や起源を消すための有効な手段と言えそうです。じっさい、そんなことが起きていませんか？ 争いが起こっていませんか？

襲名、のれん分け、跡目争い、盗作、元祖、本家・分家、先発・後発、プロ・アマ、流派、派閥、本流・支流、上流・下流、主流派・掃き溜め、名称、呼称、ジャンル、「これが本当（本来）の〇〇よ」対「これが本当（本来）の〇〇だい」、新〇〇、正統・異端、保守・革新、主従、師対弟子、弟子対弟子、化石対新人、重鎮対軽鎮、肅正・下克上.....。

こうしたものの多くが、名前（名称）の争奪戦というかたちを取ります。人は、最強で最小最短最軽の引用および複製である固有名詞の威力をよく知っているのです。

真名・真字、仮名・仮字。な（名、字）は、み（身、実、神、霊）なのです。

いずれにせよ、複製、再製、再生、再現、再演、引用——何と呼ぼうと、そこにずれがあるかぎり、繰り返えされるたびに変容があり、変容の程度やさまざまな事情や状況によって、起源と本物が曖昧になっていくのは当然だと思われま

す。起源と本物のほとんどは、タイムマシンが発明され（そうなれば起源がたどれます）、人間の機械化が実現して（本物かどうかを見きわめるために「同じ」と「同一」が計器や機械なしに感知できます）はじめて検証できるという意味で、人にとっては抽象なのです。

誇張と半分冗談と屁理屈（屁理屈は理屈の別称であり蔑称でもあり、要するに名称の問題なのです←これこそ屁理屈と言われそうですけど）はさておき、いま述べていることを簡単に言うと、複製の複製であり、引用の引用です。正確に言うなら、本物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用です。

リアルであることに必ずしも実体は要らないのです。

実物や本物も起源（原型・元祖・出典）も要りません。複製や複製の複製や引用が身のまわりにうようよしているじゃないですか。大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画.....。

どれも、あなたにとってはリアルな「物」ではありませんか？ 複製と引用とはそれ

自分で完結した「リアル」なのです。人が「似ている」と「そっくり」の世界、つまり印象の世界に住んでいるからです。

(拙文「空っぽ」より)

何の複製なのか、何からの引用なのかが不明

不明であるにせよ、そもそもないにせよ、単に決めたものであるにせよ、本物や現物や実物や起源（原型・元祖・出典）が人によって意識されない（感知されない）複製の複製と引用の引用で、世界は満ちている気がしてなりません。

ここで大切なのは「意識されない（感知されない）」です。本物や現物や実物や起源（原型・元祖・出典）は、「同じ」や「同一」という尺度ではからなければなりません。学んだ知識（抽象）としてではなく、常に自力で（自然に）、です。そうであれば、人は「似ている」を基本とする印象の世界に住んでいるために、その検証はきわめて困難であるにちがひありません。困難どころか、不可能に近いでしょう。

複製の複製とは、何の複製なのかが人に「意識されない（感知されない）」であり、引用の引用とは、何からの引用なのかが人に「意識されない（感知されない）」である、つまり不明であって分からないし、分かる必要性も人は感じていない、そんな「ものありよう」であると言えそうです。「意識されない（感知されない）」とは、何かの有無が保留されている状態だとも考えられます。判断ができないので棚上げされているわけです。

その意味で、本物や現物や実物や起源（原型・元祖・出典）あつての複製とは抽象なのかもしれません。抽象とは見えないし触れることができないものですから、体感も体験もできないのです。

簡単な例を挙げます。写真を複製の複製だと考えてみます。写真の被写体というか実物とされている事物や風景は、ヒトという生き物の知覚機能と認知機能によって写し取られた一面、つまり「写し」であって「そのもの」ではありません。

部分であつて全体はないとも言えるでしょうが、それ以前にヒトの知覚および認知機能に限界があるのです。全体とはヒトがとらえられないという意味で抽象であり観念なのです。

巨象は虚像であり、象は像でしかない

人は全体をとらえることができなくて、全体は抽象であって観念でしかない。さらに言うなら、人にとっては部分だけがかろうじて体感できるリアルなのであり、全体とは抽象つまり学習した知識である。こんなふうには言えそうです

(その根っこにはローカルをトータルのひな型にしたい(見なす)というオブセッションと化した願望があるようですが、雛型とは大きなものを小さくした複製である模型(大きな物の属性をすべて備えている)と言えそうです。雛人形やひよこのイメージです。俯瞰や展望やその逆の拡大とも重なります。大きなものや長いものや重いものの代わりに小さなものや短いものや軽いもので済まし澄ましているわけです。地図、地球儀、天体図、天体模型、年表、百科事典、顕微鏡を思いうかべてみてください。遠くの代わりに近くで済みます、望遠鏡、電信・電報、電話、テレビもそうです。広義の錯覚や錯視を逆手に取っているわけですが、それで事足りるからでしょう。抽象の恐ろしさと素晴らしさを感じないではられません。話が大きくなりすぎたので小さくもどします。)

目隠しした複数の人たちが、それぞれ象のあちこちを触って「○○みたいなもの」と言う例の話をお聞きください。目隠しをした人たちに、それは「巨大な象」だと教えてあげても、それは学んだ知識でしかないわけです。巨象は虚像、つまり虚構でしかなく、たとえ目隠しを外して象を見せたとしても、象は像でしかないのです。

さらに言うなら、実像は虚像、実は実は虚、色即是空、実即是虚。

※以上は、Twitterでのデレラさんとのやり取りから生まれた文章です。ここでデレラさんにお礼を申し上げます。ありがとうございます。

写しを写す

ある事物の全体ではなく、そのある一面を目という「カメラ」が写しているもの(ヒトが知覚し認知できる側面のうちの一面であり、これ自体が写しなのです)をとらえて、それをさらにカメラで写したものが写真であり、その写真は複製できますし、じっさいに複製されていますね。

写しを写してさらに写すわけです。大ざっぱに図式化すると以下のようなものとしてイメージしています。

$$A \Rightarrow B \Rightarrow B \Rightarrow B$$
$$A \Rightarrow B$$
$$B$$
$$B$$

AはBの起源であり、Bの本物や実物と考えられていますが、そのAはヒトの知覚および認識の形式という枠の中で写し取られた写しなのです。きわめてローカル（局所的）なものとも言えるでしょう。

Aを意識する（感知する）ことは可能ですが、その「意識する（感知する）」は努力目標でしかありえません。「意識する（感知する）」という言葉つまり言い回しがあるということと、「意識する（感知する）」とは別物だと言えます。私はこの状態を「意識されない（感知されない）」と言っています。言っているだけです。

Aの写しであるBがつぎつぎと写された結果としての写しが、ふつう複製と呼ばれています。手描きの写しや、手書きの筆写や写本の時代が長く続き、つぎに印刷や撮影（写真）やコピーというかたちでの複製が発明され普及し現在にいたります。

ネット上では、投稿と複製と拡散と保存がほぼ同時におこなわれていますが、デジタルの複製ですから、ノイズやエラーによって起こるずれは飛躍的に小さくなっているようです。

あっさりと言いましたが、あくまでもBを複数あるいは大量に写す、つまり複製するというレベルの話であり、AからBへの写し、つまり実物から別物への置き換えという途方もないずれと、その前の段階で実物をヒトが知覚し認知するというさらに途方もない根本的なずれは解消されていません。

ヒトは写しの世界に生きているのではないかと、言い換えると、ヒトは世界ではなく「別」世界に生きているのではないかという問題は解消されていないのです。というか、意識されないのです。意識していいことはひとつもないからかもしれません。

それよりも、世界もどき（人間もどき、知能もどき、体感もどき、自然もどき）をつくることに、人は血道を上げているようです。そのほうが手っ取り早いし楽しいからかもしれません。

人は自分が「似ている」を基本とする印象の世界に生きていることをよく知っているとしか思えません。ふだんはあまり感知されないし意識しないにもかかわらず、よく知っているにちがひありません。もどきで不満はないようです。諦めているのかもしれませんが。

複製と引用のながれ

余談です。

人は印象の世界にいる。似ているの世界に生きている。まだらでまばらな世界の住人。かわりとうつしの世界に生きている。同一も本物も現物も源泉も、人の思いのなかにしかない。

(拙文「虫眼鏡で写真を見る」より)

- 1) 料理、パフォーマンス（演奏・演技）：ずれを肯定し、楽しめます。

$A \Rightarrow B \Rightarrow C \Rightarrow D$

- 2) 製品、写真、印刷物、デジタルコピー：ずれをないものとして済ませます。

$A \Rightarrow B$

B

B

B

- 3) 2) の一種です。

$A \Rightarrow B \Rightarrow C$

C

C

$B \Rightarrow D$

D

D

大切なのはA自体が複製（写し）だということです。人の知覚と認知はうつつ、うつらうつらであり、うつつ（現）、夢うつつ、夢、いめの境はさだかではないのです。

人という、うすい膜にうつった（知覚）うつし（認知）をうつす（伝達）——という感じでしょうか。すべての段階と過程が「うつし」（複製、複製の複製）であり「うつす・写す・映す・移す」（転写・反映・変移）というイメージ。

本物や起源は、観念であり抽象であって、人にはたどりつけない「何か」なのでしょう。たどろうとしても、あるのは「うつし」であり「かわり」なのですが、それが何の写しか、何の代わりかは人の知覚、認知、認識をこえたもののようです。

うつる・かわる、うつる・かわる……。何？ 何か、何？ 何か……。

知識・情報、権威・権力、普遍・真理

引用と模倣の産物であり、ずれをともなう反復による変奏と再演の結果でもある、料理や絵や楽曲やパフォーマンス（技・芸）においては、「複製の複製」や「引用の引用」が起きていると私には考えられます。

物語（広義の引用である口承や写本によって伝承されたもの）や小説（個人が広い意味での引用と曖昧な意味での独創によって書きつづったもの）においても、複製の複製が起きているのではないのでしょうか。この点については、拙作「私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？」でも触れてあります。

ただし、学術的な研究や調査によって検証可能なという意味での、明らかに引用や模倣や剽窃や盗作されたものを除いての話です。そうです、話です。ここで述べていることは、お話であり、研究者でも探求者でもない私が勝手にでっちあげたフィクションにほかなりません（居直りですね）。

ここで短絡し飛躍します。

そもそも言葉によって記述され、拡散され、複製され、保存され、継承される知識や情報は、複製の複製ではないでしょうか。学問であれ、芸術であれ、公文書であれ、話し言葉と書き言葉であるかぎりにおいては、複製の複製として存在している気がします。

そもそも言葉が複製の複製なのです。なお、私は言葉を広く取っていて、話し言葉（音声）と書き言葉（文字や記号）だけでなく、視覚言語と呼ばれる表情や身振りも言葉だと受けとめて生活しています。中途の重度難聴者だからかもしれませんが、私にとっては表情と身振りは大切な言葉です。

現在は、真偽、本物と偽物、正誤、善悪の境が曖昧になっている気がしてなりません。こうしたものは、「ある」のではなく「決める」もの、つまり「決まり」ですから、境が薄れたり消えるのは当然だと思われまます。決めた結果としての「決まり」の権威がどんどん薄れてきているわけですが、それは権威や権力が本物や起源と親和性があり、権威や権力が本物や起源を支えとしているからかもしれません。

author という言葉に、著者、作者、作家、創始者、創造者、造物主という意味があり、authority に、権威、権力、権限、先例、権威者、大家、当局という意味があることに注目していいと思います。

私の中では、権威や権力と、知識や情報が深く結びついています。

実物はたったひとつであるのに対し、複製は複数あるいは無数にあります。作者および作品が有名であればあるほどです。有名は無数、無名は有数か、たったひとつなのです。（この記事の見出し「複製の複数性、無数性」より）

「固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。」

権威や権力とは名前、とりわけ固有名詞のうちの人名の力を度台にしています。有名こそが権威や権力の支えであり、有名かどうかは権威と権力の大きさを示す尺度なのです。有名であれば無数の名前を複製として持っています（悪名高きや悪評もそうですけど）。名が広く知られていることで複製がさらに増える、つまりさらにその名が引用されます。複製が複製を生み、引用が引用を生む、複製が複製され、引用が引用されるという意味です。名前は知識と情報として無限に拡散するのです。それが有名（著名）であり悪名高き（悪評）のありようと言えます。

そんなわけで、知識や情報においても、本物のない複製の複製と起源のない引用の引用が起こっているように感じられます。もっとも、広く知識や情報とされるものが人名ばかりではありません。集団名、国名、民族名、地名、作品名、組織名、商標、商品名というぐあいに、さまざまな固有名詞が、複製や引用の対象になり拡散されます。〇〇主義、〇〇法、〇〇制、〇〇方式、〇〇法則といった専門用語やビッグワードもそうです。

真偽や善悪や正誤の彼岸へ

上で述べたような状況はいま始まった話ではなく、人が言葉を持ってしまった時から始まっていたのではないかという思いが私には強くあります。話を簡単にするために、人名で考えてみましょう。神話や説話や昔話に出てくる人物や歴史上の人物や偉人を思いうかべてください、多くがその名前を知っているだけではありませんか？　それが権威であり権力（power より authority、場合によっては power）です。こうした現象が現在では助長され加速化してきている気がするのです。

話をもどします。

現在は、真偽、本物と偽物、正誤、善悪の境が曖昧になっている気がしてなりません。

どんどん複製され引用されている固有名詞（これ自体が複製であり引用です）の力が失われていくという現象が起きているのです。

平たく言うと、複製には複製の本物があり、引用には引用の起源があるというモデルが曖昧になっている、つまり疑問視され、「そんなものはでたらめだ」とか「そんなものはない」とか「そんなものは嘘っぱちだ」という風潮が広まっているからではないでしょうか。

そもそも真偽、本物と偽物、正誤、善悪なんて図式はウソという感じです。もともと土台無理だった度台が壊れてきたのです。

もったいぶって言うと、本物や起源の権威が失われてきているだけでなく、本物や起源という概念を成立させている枠組み自体が危うくなってきているようなのです。

本物や起源の権威が失われていくのと、真偽、本物と偽物、正誤、善悪の境が曖昧になっていくのが、シンクロしているのではないか、軌を一にしているのではないか、という意味です。

二項対立、建前、武力

現在の世界情勢を見聞きしていると、かつては普遍とか真理と見なされていたものの権威がどんどん失墜してきています。これからもますますその傾向が進む気がしてなりません。

たとえば、権威の象徴であった、たった一つの実物が標的にされる事件が頻繁に起きていますね。芸術作品のことです。複雑な背景があるにしても、これまでなかったことであり（いや、こういう偶像破壊的行為はけっこうあったようです、しかも大規模にやってきたのはむしろ西側であり北側だったのです）、その衝撃度は強いです。権威を認めているからこそ、標的にするのかもしれない。

こうした直接的な破壊行為よりも、著作権を無視した複製や海賊版や違法サイトのほうが、権威の無力化にはるかに貢献している気がします。複製と引用は本物と起源の権威を強めると同時に弱めもしながら、本物の複製と起源の引用という制度そのものをしてだいに無効にし無力化していくのではないのでしょうか。

大げさに言うと、これまで支配的だった思考の根本にある二項対立——真偽、本物と偽物、正誤、善悪——を成立させていた枠組みそのものが無力化（nullify）されつつあるのです。とはいうものの、二項対立はあくまでも建前であり方便であって、歴史的に見て実際におこなわれてきたのは腕力と武力の行使だった点は注目していい事実だと思われれます。実力行使によって奪われ破壊され失われた物や事（言語、制度、宗教、文化、人命、住居、建造物、自然……）、がいかに多かったことか。

普遍、真理、ローカル

現在、西欧的な価値観、倫理観、世界観、歴史観——たとえば民主主義や代議制や著

作権や科学や哲学（philosophy）や論理や進化や進歩というモデルです——に公然と異議を唱える、あるいはそうした観念を蔑ろにし、なし崩しにしようとする勢力が台頭しています。

「私たちはあなたたちとは違うのです」、「私たち独自の〇〇主義（〇〇制）」（※〇〇には普遍で不変だと言われたものが入ります）、「あなたたちに教えてもらわなくてもいい」、「私たちがやっているのは、これまであなたたちがしてきたことですけど、何か？」

普遍とか真理と見なされていたものの権威が失墜するといよりも、普遍とか真理と見なす（想定する）度台、つまり知の枠組みそのものが疑われているのです。そうしたものはあくまでも西と北のものです。普遍や真理と呼ばれているものがローカルなものだという意味です。

人にはローカルをトータルにしたいとか見なしたい欲望があるようです。

問答無用に「バン！」とか「ドカーン！」

真対偽、善対悪、正対誤という図式を成立させている思考が揺れてきているのですから、トゥルース対フェイクどころか、問答無用に「バン！」（銃声）とか「ドカーン！」（爆発音）となるわけです。いまこそ、「フェイク！」なんて言っていますが、本音はもはや言葉ではなく腕力と武力な行使なのです。

ポスト・トゥルース（post-truth）どころではない時代と世界が現れつつあります。もうその兆しは見えますよね。

この状況が進むと、新たな普遍とか真理が出てくるのではなく、武力と腕力だけが支配する世界になります。authority ではなく power だけが幅をきかせる時代の到来です。権力や権力という、ある意味紳士的な観念的で抽象的な美辞麗句ではなく、即物的でむき出しの力が支配する世界と時代という感じです。

大切なことは権力だけが武力を正当に行使できる権利を持っている（担っている、任されている）という事実です。権力は法にのっとって人を拘束したり殺める権利が与えられているのです。誰が与えたのでしょうか？ 国民です。形式上、つまり言葉の上では

そうになっています。辻褄は合っているのです。

権力が、知識の学習と情報の拡散に異常なほど警戒することに敏感でありたいと思います。できることなら、国民一般あるいは下流国民は無知であってほしいかのようです。たとえば宗教の教義を理由に女性の教育に過剰なほど干渉し抑制しようとする体制がありますね。一部の人間だけが知識と情報を独占したいとしか考えられません。

知、痴、稚、血、恥

きな臭くなってきたので、話を変えて転調します。

知識や情報の学習と習得が、模倣と反復と変奏という行為としておこなわれるのは興味深いです。くりかえしくりかえし、なぞる、まねる、まなぶ、かわる、かえる、というふうにはです。たくさんの時間と労力を費やして習得しなければならないほど、（逆に言うと）知識や情報は人為的で恣意的で脆いものなのかもしれません。自然でも必然でも当然でもないという意味です。

考えの整理がつかないため短絡した言い方になり恐縮ですが、本物や起源、そして普遍や真理という概念——これらが知識と情報の学習と拡散に深くかかわっている気がしてなりません——がフィクションであることが露呈してきているのではないのでしょうか。これが露わになるのがパンデミックや大災害や戦争の起きた時であるのは悲しく残酷な皮肉と言うべきでしょう。

こうした悲劇的状况は、知識と情報の学習と伝達と伝承に支えられてきた広義の知（後に触れますが、究極の複製である文字の果たす役割は大きいです）を、人類が根拠のない（自覚もなければ意識もしていません、「何となく」という意味です）欲望を満たすための方便として利用してきたからではないのでしょうか。

知がずれていったのです。知、痴、稚、血、恥という感じ。さらに言うなら、地（領土、テリトリー、縄張り、領域、分野、範囲）——場所という意味での土地以外に、場というかヒトがつくって決めた抽象的な領域も含んでの話です——をもちょう広げようという欲望を人類がかかえていることでしょう。この欲望は他の生き物にも見られますが、ヒトの場合には生を逸脱しエスカレートし大規模になりすぎている点——地、道（路）、馳、笞、置、治——が特徴的だと思われれます。しかも、自覚も意識もしないのです（して

もすぐに忘れます)。「何となく」とんてもないことをしでかしていると言えるでしょう。

以上、大風呂敷を広げながら、未整理な考えを垂れ流すだけにとどめて、申し訳ありません。この辺のことについては、今後さらに考えてみます。

話を変えます。

大量生産、製品

大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画……。
(拙文「空っぽ」より)

複製といえば、絵などの芸術作品の複製や印刷物のほかに、大量生産された製品を思いうかべる人が多いと思われます。写真や映画を連想する人も多いでしょう。さらにはインターネット上で投稿と複製と拡散と保存がほぼ同時にかつ並行して起こっている文書や静止画や動画こそが、現在では最も重要な意味を持つ複製であると考えている人も多いかもしれません。

いま挙げたもののうち、製品に注目してみましょう。

現在では情報やデータも製品になりうるし、じっさい製品として売買され流通していますが、そうした抽象的なものではなく、たとえば衣食住にかかわる服や食品や家具や電気製品といった、目で見ることができて手で触れることができる具体的な物である製品の例として、靴を思いうかべてみてください。

みなさんのお持ちになっている愛用の靴は、おそらく大量生産されたものでしょう。つまり複製ということになりますが、その複製である靴を複製として考えることができるでしょうか。そっくりなものがたくさんあるうちのひとつだと考えることがありますか。

あなたの愛用の靴の話です。

リアル、代わり、写し

愛用している製品であれば、どんなものであれ、それは世界に「たったひとつの」「大切な物」なのです。これが、自分にとって親しくない人の持ち物であれば、同じメーカーの同じ製品番号の製品でも、それは「複製」になります。

この場合の「複製」とは、「それとそっくりなものがほかにもたくさんある」、「そのうちのひとつ」だという意味です。

あなたは大切な人の写真が踏めますか。大切な人の名前が書いてある紙切れを踏めますか。

踏めなかったり、踏むのにためらいがあれば、それがリアルなのです。リアルとは、いまここにある、たったひとつ（たったひとり）のものです。複製（その他たくさんの中のひとつ）であっても複製として意識されない（感知されない）ものがリアルなのです。

写真も名前を書いた文字も複製（写し）ですが、それによって引きおこされる「大切」や「愛おしい」という感覚や感情にとらえられ、行動を左右されてしまうのが人なのです。

駄目押しに言いますが、「そっくりなものがたくさんある」はずの複製を前にして、あるいは手にして起きる、この「たったひとつ（たったひとり）のもの」（愛着）という感覚や感情は想像の産物であるとも言えます。

そうした心境にあって、複製を前にしたり手にした時の人は、ほかにもたくさんあるはずのそっくりなものたちに思いを寄せることはありません。当然のことながら、その複製の起源や本物（実物）を意識することはありません。

リアルであることに必ずしも実体は要らないのです。
(拙文「空っぽ」より)

リアルである、つまり、いまここにあるたったひとつのものであることには、実体も、その他のそっくりなものも要らないのです。リアルという感覚が起これば、それでいいのです。

実体のないリアルとは、「動き」であって、動いている「もの」が意識されない「状態」とも言えます。

リアルとは、言葉（声・文字・表情・身振り）であったり、映像であったり、音であったりすると考えてください。そうしたものは、代わりであり、写しなのですが、何の代わりであるか、何の写しであるかは感知されないし意識されないのです。そもそも「何」はたどることができないものだからです。

いまここにあるふるえ

人の中で「いまここにある」という感覚を引きおこす、いわば「ふるえ」や「動き」が作動している状態なのです。その状態（ふるえている）は複製（代わりと写し）によって引きおこされます。というか、きょくたんな言い方をすれば、人にとって世界は複製（引用）であり、複製（引用）しかないのです。

人にとって、世界や森羅万象は「うつうつ」「うつらうつら」しながらとらえている「うつし」でしかありえないからです。たどりつけない「何か」の「代わり」でしかないからです。

人は自分が考えているほど、正気でもなく覚めてもいないもようです。さもないならば、自分のつくった「写し」に振りまわされたり、たったひとり、あるいはごく一握りの「代わり」にすべてお任せするような世の中の仕組みをつくって自分の首を絞めたりしてないはずで

たとえば、写しであり代わりである言葉をたったひとりのリーダーが発し、それが音声や文字として一瞬のうちに投稿・複製・拡散・複製・保存される。リーダーはいったん放った言葉の辻褃合わせのために、さらに言葉を放ち、既成事実を積みあげていく。ブレは許されません。体裁が悪いからです。面子にかかわるからです。リーダーが体裁と面子にこだわることは、みなさんがご存じのとおりです。

そのせいで、多くの人命と財産が失われているのもまた、みなさんがご存じのとおりです。人びとは、自分たちの代わり（代理人）の発した言葉（代わりであり写し）にひ

れ伏していると言えます。代理人（自分は「国民から権力を委託されている」と言います、言っているだけです）の辻褃合わせに付き合わされているのです。この点については、拙文「黒いカラスは白いサギ」で触れています。

いつのまにか、うつろうつろ、うかつ、うっかりがまかり通っているのです。なんとなく、とんでもないことを、みんなですでかしているという意味です。この星に住む人以外の生き物たちもそれに付き合わされています。

うつろうつろ、うかつ、うっかり——。らりっているのかもしれませんが。これは、私のことです。さまざまなお薬（ほとんどが工場で製造された複製です）を服用してぼーとした状態でこの記事を書いています。ところで病気も複製であったり引用なのでしょう。このところ、心身ともに自分が複製であり引用の産物だという気がしてなりません。

究極の複製は文字

上でも述べましたが、私は言葉を広く取っていて、話し言葉（音声）と書き言葉（文字や記号）だけでなく、視覚言語と呼ばれる表情や身振りも言葉だと受けとめて日々の生活をいとなんでいます。言葉もまた複製であり引用であることは忘れられがちです。さきほど、モナ・リザを例に取って、おふざけをしたとおりです。

話し言葉はおもに聴覚に、書き言葉と表情と身振りはおもに視覚に依存します。どの言葉も発せられると、それを聞いたり見ている相手に記憶されるというかたちで残りますが（もちろん無視もされますけど）、音声と表情と身振りは発せられたとたんに消えていきます。

受けとった相手はそれを片っ端から、自分の中でなぞり（うつるのです）、記憶（保存）し、真似るというかたちで繰り返すこともあるし、そうしないこともあります。文字だけが消さないかぎり、残ります。

このようにしつこく残る複製は文字だけではないでしょうか。しかも、文字は写すことができます。写せば増えるのです。「発する・発せられる」（post = 投稿）、「残る・残す」（保存）と「写る・写す」（複製）と「増える・増やす」（拡散）が同時に起きるなんて文字しかなさそうです。

それだけではなく、「写る・写す」に付きもののずれが起きにくいのです。印刷やコピーという手段を用いれば、ずれはほぼなしになり、デジタルなデータとして複製すれば、ずれは理論的には皆無になります。

話し言葉は真似て反復されるたびに個人差が発生します。これが集団によって繰り返されていく過程で、訛りや方言になるようです。表情や身振りも、個人や集団や文化によってそのかたちや意味は変わりやすいと考えられます。

文字だけが、ずれのない複製として存在できるし、ずれのない複製として読まれるのが可能です。なお、書体やフォントや書き文字としての差異や、インクや紙質や画素の濃度による差や、レイアウトによる違いは、ここでは扱いません。というか、これまでに記事にしたことがあります、話がややこしくなりすぎて私には扱えないのです。

文字は究極の複製ではないでしょうか。そんな究極の複製を用いるさいにずれが起きるとすれば、それは人の中で（人の側で）起きるのです。文字は不変で不動、人がうつろう。

いずれにせよ、文字からなる文章（文書）が、本物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用である点は、ほかの複製や引用と変わらない気がします。

（ひとつ気になるのは、書き言葉である文字が、話し言葉（音声）や表情や身振りという言葉とは異なり、その習得に多大な時間と労力を要するという点です。さきほど「知識・情報、権威・権力、普遍・真理」という見出しの文章で述べた、知識や情報の習得と似ているというより、両者がぴったり重なっている点も、気になります。文字は人にとって自然でも必然でも当然でもないのではないのでしょうか。この星に他の生き物といっしょに棲んでいる人類というかホモ・サピエンスの歩んでいる道は、これでいいのでしょうか。人類のつくり残しているもの（なかなか元に戻らない、しつこく残っているのがきわだった特徴です、短時間で消し去る準備が整っているのにです、後に放射性物質がしつこく残りますけど）は、この星にとって「正しい」ものなのではないでしょうか。）

翻訳、アイドル、崇拜

文字の複製というと、写本や写経と翻訳が頭に浮かびます。そうです。宗教と関係してきます。単に知識とか情報の拡散と伝承の問題ではないのです。

世界一のベストセラーは、バイブル＝聖書だと聞いたことがあります。実際、あれほど多数の言語に翻訳された書物はないのではないのでしょうか。しかも、何語で書かれて(訳されて)いても聖典だということらしいのです。一方で聖典としての翻訳を絶対に認めないクルアーン(コーラン)があり、翻訳は解説だと考えられているという話を見聞きした覚えがあります。

私はお勉強や調べ物が苦手なので、深入りはしません。したくもありません。空想のほうが身の程に合っているようです。そんなわけで、翻訳については見聞きして知っていることだけを書きますが、忘れてることが多いので、拙文「引用の織物」と「定型について」と「言葉の夢、夢の言葉」を見ながら思いだして書きます。

聖書といえば、ルター聖書が成立する苦労話を思い出します。英語訳の聖書もたくさんありますね。日本語訳も複数あります。うちの書棚にもありますが、英語でも日本語でもそれぞれ微妙に異なるというか違った印象をいただきます。頭の中で浮かぶイメージ(心象・印象)や絵が違ってくるのです。恥ずかしい話ですが、仏教の経典であるお経についても無知です。お経を口にした記憶もありません。

経典や聖典とされる文書の特徴には隠喩や寓意があるようです。つまり多義的多層的なのです。ただ一義的なメッセージや意味を伝えるだけの目的で書かれていないということでしょう。しかも隠喩や寓意だけでなく、さまざまなレトリックが駆使されているようですから、これを翻訳するのは至難の業と言えそうです。

多様な解釈が可能で、喧喧諤諤、百家争鳴の議論が起こって現在に至ると聞きます。こうなると原文を横目で見ながら解説と注解を読んだほうがいいのかもかもしれません。文学作品を連想します。とくに詩です。たとえば、韻のある場合には、まず韻を他言語にうつすことを断念しなければならないでしょう。韻だけではありません。

簡単には「うつせないもの」や「うつしてはならないもの」もあるのです(おそらく「うつせるもの」よりずっと大切なものだという気がします)。(拙文「伝わるもの、伝わらないもの」より)

私的な感想ですが、小説でもたとえば英語で読んでいるのと日本語で読んでいるのでは別物に感じます。日本語の原文から英語へ、英語の原文から日本語へのどちらの場合にでも。翻訳は私にとっては別物なのですが、絵画の複製を見て感じる「似ている別物」とか「そっくりの別物」とはこれまた異なる印象を覚えるのです。

同じではないことは確かで、異なる、違う、別物なのだけど、似ているとは異なる気がする。こうとしか言いようがないのです。よく分かりません。

話は飛びますが、イコノクラスム (iconoclasm、聖像破壊運動) とか、それとは別の話らしい偶像破壊とか、その逆みたいな感じの偶像崇拜 (idolatry、idolism) という言葉を連想しました。「らしい」とか「みたいな感じ」だなんて不勉強丸だしの言い方で申し訳ありません。

idolatry と idolism には idol (アイドル) という言葉が見えます。アイドルは写真や動画や音声で複製されるほど、アイドル度が高まるようです。アイドルは、崇拜の対象になるくらいの熱い存在ですから、宗教に近いと言えるかもしれません。アイドルは崇拜され、複製にされてなんぼという感じでしょうか。模倣されるという意味で、引用されてなんぼとも言えそうです。

そもそもアイドルは偶像であって、実物ではなく像なのです。複製なのです。現代のアイドルもそう簡単に人前に入るべきではないと思います。握手をするなんて、とんでもない邪道だとは言いませんけど。

それにしても、よく分かりません。不思議です。何がって、翻訳とアイドルのことで。そしておそらく文学と経典や聖典のことです。

いずれにせよ、翻訳とアイドルについて考えるさいには、本物のない複製の複製と、起原のない引用の引用という言葉とイメージが参考になる気がします。本物とか複製とか起源とか引用を超越した現象であり話なのかもしれません。

大風呂敷を広げる

本物のない複製の複製と、起源のない引用の引用の世界に、本物と起源がないのは、人が「似ている」を基本とする印象の世界に住んでいるからでしょう。人にとって「同じ」と「同一」は扱えないし、扱えないから意識されないのです。人にとっての「ない」とは「意識されない（感知されない）」とも言えそうです。

人はいまや、「似ている」ではなく「そっくり」をつくるようになり、それをきわめようとしているかのように私には思えます。そっくりはどんなにその度合いを高めても「そっくり」であって「同じ」ではありません。

ロボットや機械のしなやかな動きは、生き物のしなやかな動きとはそっくりであっても同じではないのですが、人はそれを感知できないのです（知識や情報として学ぶことはできても）。人は自分が感知できない「同じ」を知識や情報として学ぶ必要があり、「同じ」は「知識」や「情報」と同様に人にとっては抽象だという意味です。

ヒトの棲息する「似ている」の世界、つまり印象の世界は、人類が出現してからずっと本物なき複製の複製と起源なき引用の引用の世界であるような気がします。いま始まった話ではないのです。ひょっとすると、他の生き物たちもそうなのかもしれませんが、これ以上大風呂敷を広げるのはやめておきます。

私にとって、こういう空想（大風呂敷を広げること）だけが楽しいのです。ああでもないこうでもない、ああだこうだ、と。

お知らせ

現在、note での投稿をお休みしております。

本日、最近書きためたことを記事にしましたが、心身ともに調子が悪いので、引きつづきお休みします。どうか、みなさんもお自愛ください。

ぜんぜん論理的ではなく、思いつきを連ねただけの、冗漫で重複と脱線と矛盾に満ちた駄文にお付き合いいただき、ありがとうございました。

寒い日です。今夜はあり合わせの食材をつかっておでんにしようと思っています。亡くなった母から習ったレシピと味付けでの料理です。

追記

当初の記事に、大幅な加筆をおこないました。2022/11/08 更新

#小説 #複製 #引用 #本物 #偽物 #製品 #料理# パフォーマンス #写真 #印刷
#文字 #言葉 #名前 #固有名詞

空っぽ

＊

空っぽ

星野廉

2022年10月4日 09:02

いずれにせよ、立方体だと大切なものが入っているようで緊張感が漂います。長方形や直方体は手や腕でかかえるのには持ち運びやすいですが、正方形や立方体は個人的にはやや持ちにくい気がします。この形の荷物を運ぶ人は大変でしょう。形は整ってきれいですが、人の体にはなじまない形状なのかもしれません。

(拙文「【小説】正方形と長方形で悩む夜」より)

目次

空っぽの立方体

各面が画面になっている箱

愛という箱、真実という箱

振りまわされる

置き換える

代わりに済まして澄ましている

関係性

なぞる

空っぽ

空っぽの立方体

言葉は空っぽの立方体のように思えます。両手で持てるくらいの箱です。持ち運びに便利な大きさだけど、立方体であることかきこまってしまう。運ぶときに、ぎこちなくなる自分がある。そんな感じの箱です。

中に何も入っていないことがいちばん大切です。なにしろ、言葉の話をしているので。言葉が空っぽの箱だという話です。

言葉には何かが入っていますか？

＊

猫、ねこ、ネコ、neko。

この言葉には何も入っていません。入っている、何か詰まっていると感じるのは人だけです。猫にはそう感じられないでしょう。猫に尋ねたことがないので想像するだけです。

ネコという音声でも、ネコという文字でも事情は変わりません。空です。殻なのです。

ネコという言葉を作ってネコだと決めたのかもしれませんが。その場に立ちあつたことがないので想像するだけです。

こんなふうに言葉には不思議なことがたくさんあります。空っぽなのに謎だらけなんて、ギャグに思えてなりません。

＊

言葉はヒトにしか通じないギャグのようです。

たとえば、猫にも通じない猫という言葉でギャグ独走状態なのです。オカメインコ（オカメですよ）でもコビトカバ（なんというネーミングなのでしょう）でも事情は同じです。

孤独なギャグです。独走、独奏、独創、毒草。しかも空っぽなのだから、不思議です。私に激似じゃないですか。空っぽが言うのですから、間違いありません。

＊

言葉に罪はありません。私は言葉が大好きです。愛しています。そんなわけで、言葉

のあり方に疑問と懸念をいただいているのです。

つまりは、言葉に対する人のあり方に、です。

念のために申し添えます。

各面が画面になっている箱

猫を思いうかべてください。視覚的なイメージが浮かぶかもしれません。刻々と変わ
りませんか？ 猫をネットで画像検索してみると、いろいろな種類の猫がいろいろな格
好をしています。

生まれたての子猫もいるし、高齢らしき猫もいます。眠っている猫もいるし、障子を
破っている猫もいます。ミックスを加えれば、種類も豊富です。

それぜんぶが猫です。それと同じく、猫という言葉で各人が思いえがく猫のイメージ
は数えきれないものであり、刻々と移り変わっていると考えられます。

つまり、猫という言葉は、音声と文字としては確認できても（広い意味での複製だか
らです）、各人のいなく、猫のイメージは確認できないこととなります（まぼろしだから
です）。想像するしかないのです。想像を想像するという騒々しい話になります。

*

猫という言葉が空っぽの立方体にたとえるなら、その各面には猫の画像がつぎつぎと
映しだされている感じでしょうか。各面がモニター画面なのです。でも、箱の中身は空
です。画面に映った映像も、空っぽです。

斜めから見ても後ろから見ても駄目です。映像だからです。投影された影みたいなも
ので、実体はないという意味です。

でも、猫なのです。その箱は猫だと決めたのです。cat でも事態は変わりません。決め

た以上、その箱の各面に映しだされた映像が人にとってのリアルになります。

リアルであることに必ずしも実体は要らないのです。

実物や本物も起源（原型・元祖・出典）も要りません。複製や複製の複製や引用が身のまわりにうようよしているじゃないですか。大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画.....。

どれも、あなたにとってはリアルな「物」ではありませんか？ 複製と引用とはそれ自体で完結した「リアル」なのです。人が「似ている」と「そっくり」の世界、つまり印象の世界に住んでいるからです。

あなたは大切な人の写真を踏めますか？ 大切な人の名前が書いてある紙を踏めますか？ その人じゃないですよ。像であり文字です。

そこに映っているのが、またはその名が書いてあるのが、人でなくてもかまいません。キャラクターでも、小説や映画の登場人物でもかまいません。あなたが見たことも会ったことのない歴史上や伝説上の存在でも神でもかまいません。

でも、その写真や名前が踏めないとすれば、踏むのにためらいがあるとすれば、それがリアルであるということです。人としての想像力の問題なのです。

この想像力があってこそ、人は人なのかもしれません。

愛という箱、真実という箱

猫を見たことはありますか？ 触ったことは？ 山を見たことはありますか？ 薔薇の匂いを嗅いだ経験はあるでしょうか？

愛はどうですか？ 真実や論理に触ったことはありますか？ 詩の匂いを嗅いだことはありますか？ 哲学や思想を舌で味わった経験はどうでしょう？

＊

文学っぽさ、論理っぽい、真実らしさ、愛のような、哲学的、詩みみたいな、知っている振り。

ぼさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り。こうしたものが、言葉の空っぽらしさ、空っぽぼさを表している気がします。

○○ぼさ、○○ぼい、○○らしさ、○○らしい、○○ような、○○的、○○みたい、○
○振り——○○を欠いた、人にだけ分かるギャグなのかもしれません。

印象の世界に住んでいて、○○という体感できないもの（「抽象」のことです）にたどり着けないため、人は「ぼさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り」（「抽象的」のことです）に反応して振りまわされます。

＊

なにしろ、人はまず「○△X」という言葉を作って、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物だから、こうなるのです。

上に引用したのは、何度もいろいろな記事で私が書いてきたフレーズですが、「ぼさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り」と同様に、これも言葉の空っぽさを表している気がします。

たとえば「○△X」という言葉をめぐって、「○△Xとは何か？」とああでもないこうでもない、ああだこうだが続いているのは、「○△X」という言葉が空であり殻でしかないからではないでしょうか。

中身がないから、「何か？」の答えが出るわけがないのです。これまでも出なかったし、いまも出ていないし、これからも出ないでしょう。

ただし、「○△Xっぽさ、○△Xっぽい、○△Xらしさ、○△Xらしい、○△Xのような、○△X的、○△Xみたい、○△Xの振り」はあるでしょう。

実体はなく、イメージやまぼろしとして立ちあらわれている感じです。

「○△Xとは何か？」の答えが出ないのは、「○△X」ではなく、「ぼさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り」をめぐって、ああでもないこうでもない、ああだこうだと言っているからだという意味です。

人は印象の世界に住んでいて「○△X」を体感できないからです。人は自分が思っているほど抽象（抽象的ではあっても）ではないとも言えそうです。

＊

愛、真実、論理、詩、小説、哲学、文学、平和、思想、普遍性、客観性。こうしたものを、ネットで検索するとその使い方が分かります。その言葉が使われている文や文章の中で、その言葉は生きています。

「○△Xとは？」ではなく、その○△Xの用法を見て、積極的に「○△Xっぼさ、○△Xっぼい、○△Xらしさ、○△Xらしい、○△Xのような、○△X的、○△Xみたい、○△Xの振り」とたわむれることが大切だと私は思います。

たとえば、愛という空っぽの箱、真実という空っぽの箱の各面に、ネットで検索した文や文章が映るようなものです。その映像をながめる。その画面の後ろには何もないのだと割りきることで、気持ちが楽になればいいですね。

何かを想定して振りまわされ躍起になるよりは、心やすらぐのではないかと私は思います。

とはいえ、ないものに振りまわされるのが好きでたまらない人もいます。人それぞれです。

振りまわされる

言葉ではなく、どうやら自分たちが言葉に勝手にいただいているイメージやまぼろしに、人は振りまわされているというのが正確な言い方かもしれません。

「○△Xっぽさ、○△Xっぽい、○△Xらしさ、○△Xらしい、○△Xのような、○△X的、○△Xみたい、○△Xの振り」をめぐっててんてこ舞いしているようです。

上の「○△X」に、あなたのいちばん気になるもの、いちばん愛しているもの、いちばん嫌いなものを当てはめてみると、体感できるのではないのでしょうか。

「振りまわされる」には、愛も憎しみも怒りも悲しみも諦めも含まれます。

そして、喜びや快感もです。人は振りまわされることに嗜癖しているのかもしれませんが。「いやだ、もー」とか「やれやれ」とか「むきーっ」と口にしながら、嬉々としているのではないかという意味です。

置き換える

言葉の根っこには、置き換えるがあるようです。



上の●と・をご覧ください。●が手前に、・が後ろに見えるかもしれません。人それぞれですけど、そう見えるという前提で話を進めます。

平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えているわけです。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景というふうに連想を呼びさます気がします。

向こうから追いかけて来る、トンネル、望遠鏡、顕微鏡、研、エコー、太陽と惑星、進化、だんだん大きくなっていく、だんだん小さくなっていく、遠くなっていく、近くなっていく、「おーい!」「何だーい?」、「待ってくれ」、「さようなら」ー。子を見送る親、

「元気でね」、いつまでも遠くで見ている。

ストーリーを感じませんか？ 声が聞こえてきませんか？

イメージが膨らむとも言えるでしょう。話がだんだんズレていくとか、話が大きくなるとか、そんな言い方も可能でしょう。要するに、連続して置き換わっていくわけです。動きやドラマが生まれてくるとも言えます。

もう一度見てみましょう。



私なんか、遠くで見守っている存在と見守られている存在の関係を勝手に想像して涙ぐみそうになりますが、遠くからじっと監視されているイメージを呼び覚まされて身震いする人がいても不思議ではありません。

*

Aの代わりにAではないものを用いる。つまり代用する。

Aの代わりにBを用いる。つまり代用する。

「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いる。

これも、十三年ほど前から、何度も使ってきたフレーズです。言葉の仕組みについて述べたものです。

代用するというのは、置き換えることに他なりません。

猫の代わりに猫という言葉を用いる。このように言えば分かりやすいと思います。

話し言葉である音声、書き言葉である文字だけでなく、表情や身振りといった視覚言語も、事物の代わりに用いられます。置き換えているわけです。

代わりで済まして澄ましている

Aの代わりにAではないもので済まして澄ましている。

これが、「Aの代わりにAではないものを用いる。つまり代用する」の代わりに用いているフレーズです。最近気に入ってよくつかっています。

Aの代わりにAではないもので我慢している。

これが、その前のバージョンなのですが、「我慢する」⇒「済ませる」⇒「済まして澄ましている」とバージョンアップしました。

大きいものの代わりに小さいもので済まして澄ましている。

長いものの代わりに短いもので済まして澄ましている。

重いものの代わりに軽いもので済まして澄ましている。

厚いものの代わりに薄いもので済まして澄ましている。

遠くにあるものの代わりに近くにあるもので済まして澄ましている。

手に届かないものの代わりに手に届くもので済まして澄ましている。

すごいですよね。すごくコンパクトですっきりとして、さくさくな状況になっています。要するに横着なのです。

*

具体例を挙げます。

「大きいものの代わりに小さいもので済まして澄ましている。」：地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、パソコンの画面。

「長いものの代わりに短いもので済まして澄ましている。」：世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

「重いものの代わりに軽いもので済まして澄ましている。」：地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

「厚いものの代わりに薄いもので済まして澄ましている。」：本（書物）、文書、地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

「遠くにあるものの代わりに近くにあるもので済まして澄ましている。」：望遠鏡、顕微鏡、電信・電報、電話、テレビ、本（書物）、文書、地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

「手に届かないものの代わりに手に届くもので済まして澄ましている。」：望遠鏡、顕微鏡、電信・電報、電話、テレビ、本（書物）、文書、地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

なんだか、やっつけ仕事というか、いい加減な作業になってきて、ごめんなさい。人の横着ぶりとそのすごさが、おわかりになれたでしょうか。

無媒介的に世界に触れることのできない人類は、実世界ではなく、別世界と異世界に住んでいるようです。

人は実世界の代わりに別世界と異世界に住んで済ましている。

自分を基準にして、人類を語ってごめんなさい。こういうややこしいことについて観察できる人類が自分しかいないのです。

関係性

壁の模様でも、天井の染みでも、空の雲でもかまいません。人は何かになんかを見ます。見えるというほうが適切かもしれません。見えてしまうのです。現れるのです。

● ●

上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。

● .

今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるかもしれません。大きい、小さい、です。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなとこども。人と犬。人とペット。この国とあの国。遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

こうした連想も、置きかえでしょう。置き換えは関係性とも言えます。関係性には実体はありません。抽象的な概念です。その実体のないものを、人はたとえば、二つの大きさの異なる点に見てしまうのです。

＊

人それぞれですが、二点を見ている限りは何か置き換えています。そのものを見るというのはきわめて難しいようです。かならず、何か自分の知っているものやことに置き換えるのです。

いま私は二点とか、大きさの異なる二つの黒い点という言い方をしました。これは一つの見方です。人によって、

● .

をどんな言葉に置き換えるかは異なります。たまたま似たような言葉になるのは大いに考えられますが、つねに同じではないでしょう。

いずれにせよ、関係性に置き換えて見てしまいます。無意味というのも、関係性です。

関係性を、意味、筋書き、物語、背景、隠れた意味、隠喩などに置き換えることもできるでしょう。因果関係という物語にまで発展させる人がいても驚きません。

目が二つとか、顔に見えるどころの話ではないのです。もっと症状は重いのです。自分を観察した結果、重症の私が言うのですから、間違いないでしょう。

なぞる

*

.

●

*

●

●

*

●

.

*

背後には何もないはずなのに、何かを見てしまう。これは何かをなぞっているとも言えそうです。形だけでなく、関係性や物語さえなぞってしまうのは、それらが人の中にあるからかもしれません。自分の中にあるものを見てしまう、なぞってしまう、こじつけてしまう。

人は無意味なものを恐れます。不安に駆られるのです。そこで、何か見たいもの、これまでに見たものに置き換えます。

言葉の場合だと、名づけるのです。名づけて手なづけ、飼いならそうと試みます。何か知っているもの、お馴染みのもの、要するに自分が安心するものに置き換えることで、心の平静を保つとか、気持ちの上で優位に立とうとするわけです。

＊

それはそれでいいのです。そうしてこそ、人です。それができないと人として生きるのに困難を覚えるでしょう。生きづらくなります。

一方で、別の生きづらさも引き受けなければなりません。それが意味です。意味には、イメージ、筋書き、物語も含まれます。こうしたものは、人を振りまわします。その結果として、生きづらくなります。

意味禍は意味佳でもあるのです。

＊

意味、イメージ、筋書き、物語には、人を振りまわすと同時に、人の気を逸らす働きもあります。

お馴染みのもので、無意味という不安な気持ちを逸らすのです。

イメージや物語には動きがありますから、よけいに気持ちが紛れます。表情や身振りの根っこには動きがあります。動いているものを見ていると、自分も動きます。「うつる」のです。

気持ち、心、魂だけでなく、体も動きます。というか、いま挙げたものは連動しているのです。

「うつる」のです。映る（投影・投射・感応）、写る（複製・模倣・再製）、移る（伝達・翻訳・遺伝・継承）、です。

＊

なぞるという動きを利用したものが、言葉でしょう。音声であれば、波ですから、もろに動かされます。

文字であれば、繰り返しなぞって真似て学んで習得しますから、それが学習の成果として自動的に動きを誘います。

これはすごい工夫です。

私は文字というものが不思議でなりません。よくもまあ、こんなややこしい、込みいった仕組みのものがあるものだ、とたえず感心しています。

人は視覚が異常に発達していると言いますが、目で見える身振りや表情のようにすぐに消えなくて、しつこく居残る文字に、人がこれだけ取り憑かれるのはうなずける気がします。

＊

文字は習得しないと意味を持ちません（その文字を知らない人には無意味です、ヒト以外の生き物にも意味を成しません、これだけでも不思議だしすごいです）。習得すると、人を動かします。人は文字で動いていると言っても言いすぎではないでしょう。

音声や表情や身振りや映像よりも、人は文字に信頼を置いています。学習の成果は恐ろしいものです。

文字の基本は信じることです。文字を読むことは文字を信じることに他なりません。いったん信じるのです。信じるのを撤回するのは至難の技です。面倒でもあります。

つぎつぎと文字が目の前に現れるのですから、処理しきれないのです。そのため、人は文字を受け入れ、圧倒され、結果として信じてしまう場合が多くなります。

批判、否定、反発は、信じた結果として生じる後付けです。信じたことには変わりありません。信じないと否定もできないとも言えます。

空っぽ

二つの点をいろいろに置き換えられるのは、二点が空っぽであるからに他なりません。空っぽだから、各人が勝手に何かを見てしまうのです。何を見てしまうのかは、そのときの気分や体調や天気にもよるでしょう。

一定していないのです。移り変わるし揺らぐのです。それが人です。正解が一つだけあるわけではないし、天才とか神のような人と呼ばれる人だけがある正しい答えを独占しているわけでもないでしょう。

そう思ったがるのが人情なだけだと思います。

*

「空っぽ」を「中身がない」とか「無意味」とか「無」とか「意味の萌芽」とか「有意味」とか「有」とか「存在」とか、いろいろに置き換えられること自体が「空っぽ」だからでしょう。

ここでお断りしますが、依然として言葉の話をしています。音声、文字、表情、身振りのことです。

*

「空っぽ」です。空（くう）とか、無（む）とか、気取ったり格好を付けると語弊や言葉の垢が付いて、空っぽが「有」になってしまいます。「っぽい」が付いてしまうのです。

言葉は空っぽなんです。だから、そこに何かを詰めこんでしまうのです。それが人情です。

なにしろ、空っぽを直視したら、人はたぶん人ではなくなります。人の外に出て、外そのものに化してしまうかもしれません。もちろん、いまのは比喻です。置き換えです。

置き換えている限り、大丈夫です。済まして澄ましている限り、大丈夫です。

置き換えないことには、直視してしまいますから。雲をつかむ「ような」話で申し訳ありませんでした。

※この記事は、「意味、言葉、レトリック、体感」および「抽象、具象、体感、印象」というマガジンに収めます。この二つのマガジンは、私にとってこれまでの集大成です。ご覧いただければ嬉しいです。

意味、言葉、レトリック、体感 | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、意味、言葉、レトリック、体感です。

note.com

抽象、具象、体感、印象 | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、抽象、具象、体感、印象（「似ている」「そっくり」）、レトリックです。

note.com

#小説 # 抽象 # 具体 # 文字 # 言葉 # 意味 # 物語 # 筋書き # イメージ # 体感 # 印象
想像

似ている、そっくり、同じ、同一

＊

似ている、そっくり、同じ、同一

星野廉

2022年9月3日 14:39

目次

再現ではなく再演

顔が見えない

そっくり

そっくりという抽象とまぼろし

そっくりに囲まれて、そっくりに生きる

同じ、同一

同じ、同一という抽象とまぼろし

抽象、まぼろし

再現ではなく再演

夢の中でストーリーを思い出すことがありますか。

夢のストーリーではなくて、夢の中に小説とか映画とかテレビドラマとかそうした作品が出てきて、そのストーリーが思い出せるだろうか、という意味です。

ストーリーといえば、ある程度の長さを持ったものとイメージしています。自分の見た夢を例に取るしかないのですが、夢の中でこれまでに見聞きした作品の断片が出てくることはあります。登場人物であったり、演じた俳優であったり、アニメの主人公やキャラクターであったりします。

夢の中で映画やテレビを見るという展開もありそうですが、そんな夢を見た記憶はありません。夢の中で誰かの話を聞くという場合の話も、筋があるとすれば一種のストーリーではないでしょうか。

夢の中で、昔話や童話の登場人物やある特定の場面が出てきたことはあるような気がします。でも、こうやって夢を思いだして、後付けで言葉にしているのですから、こじつけっぽくて怪しいものです。

私にとって夢とは、見ている最中には断片的で薄っぺらいものを感じられます。それにこうやって意味づけするのは、夢を思い出しているときの覚めた意識なのではないかという気がしてなりません。

夢のさなかには意味づけなどする余裕はなく、あれよあれよと展開していきます。こう考えると、夢は再現できないという意見に傾きますが、そうすると現実と同じではないと思ひあたりました。

夢も現実も再現できない。過去も再現できない。そもそもヒトに再現などできるはずがない。人の意識の根本には、「何か」を「その「何か」とは異なるもの」で置き換える、つまりすり替えるという仕組みがあるのだから——。そう考えると、再現できないのは当然だと納得しないではられません。

ただ、再演ならできるというか、再演しているのではないかという気はします。再演ですから、毎回、ずれているという意味です。再演の演とはプレイ (play) をイメージしています。演技であり演奏であり競技であり遊戯なのです。

顔が見えない

人の顔を見分けるのにどちらかという苦労する私ですが、鏡で見る自分の顔ほど分からないものはありません。見ているのに見えないという気がします。刻々と更新しつつある「いま」であるとか、刻々と更新しつつあるズレであるとかいう、苦しまぎれのレトリックをつかったことがあるほどです。

つまり目の前にある鏡を覗きこんだときに見ているのは形 (自分の姿) ではなく「とき」 (自分のイメージ=心象) であるという意味なのですが、もしそうであるなら、自分はかなり動揺し困惑しているにちがひありません。他のものを見るのとは異なる次元に

いると言いたいくらいのお話なのです。

ひょっとすると、鏡の前では見ているのではなく、おののいているとしか考えられません。それくらい鏡を覗くと緊張するのです。たとえば、鏡に映っているとされる自分を見つめながら、いきなり目をつむるとしますね。そのときに瞼の裏か頭の中か知りませんが、自分の顔が浮かんでほしいのに浮かばないのです。

浮かべ浮かべと念じて、浮かぶのはいつか見た写真に映った自分の顔であり、ほんの数秒前に鏡に映ったはずの自分の顔ではないのが不思議でなりません。つまり私の頭の中にある自分の顔は、ぜんぶ写真で見た顔だということになります。

とにかく見えないのです。ひとさまのことは知りません。問いただすような親しい相手がないからなのですが、たとえ親しい人がいたとしても、恥ずかしくて尋ねる気にはならないでしょう。親しい人とはこのたぐいの話はしたくはないのです。

いつだったか、出てくる人がことごとく同じ顔をしているという夢を見たことがあります。見たのは一度だけなのですが、何度も何度も繰り返して思い出したので、いま覚えているその夢はそうとうズレているにちがいません。

そういえば、どの登場人物も同じ顔をしている映画があったら面白いだろうと考えたこともあります。そんなことを想像したらぞくぞくしてきました。軽い息切れさえしてきました。この手の話が私は好きみたいです。この手の話というのは、顔とか表情とか仕草とか、似ているとかそっくりとか、そういうたぐいの話です。

考えていると時間が経つのを忘れるほどです。

そっくり

掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものを見始であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉缶だ。その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。

上に引用したのは有名な一節ですから、ご存じの方も多いでしょう。そうです。夏目

漱石の『我輩は猫である』の冒頭のほうにある文章です。あの長い小説で私がいちばん好きな箇所です。

人の顔を猫の目から見ているという設定ですが、もちろん、これはある人間が想像、いや空想した猫の視点であって、それ以上でもそれ以下でもありません。そもそも、小説とは人による人のためのものですし、漱石先生はそれくらいのことは意識してお書きになったにちがひありません。

いずれにせよ、人間以外の生き物になった自分を空想するのはわくわくして楽しいし、いい頭の体操になります。

あなたは猫の顔が見分けられますか？ 猫や犬は人間にとって最も身近な生き物ですし、ペットとしている人も多いですから、見分けられる人は珍しくないと思います。ニワトリ、牛、馬、ヤギなどの家畜として飼われている生き物についても、その業者さんたちの中には見分けられる方が多いと聞いたことがあります。

要するに興味や愛着があれば、見分けられるのではないのでしょうか。逆にいうと、興味や愛着のない人には、どれも似たり寄ったりに見えるような気がします。

つまり猫やニワトリやイワシから見れば、ヒトはどれもそっくりというお話です。もちろん、猫やニワトリやイワシに聞いたことはありませんから、ここでしているのは戯言にほかなりません。

＊

スーパーの様子を思い浮かべてください。イワシ、サンマ、キュウリ、トマト、パック入りの牛乳、ヨーグルト、マヨネーズ、蚊取り線香、乾電池.....。

こうしたものたちは、そっくりなものが集めて売られていますね。そっくりという基準では動物、植物、製品とか、生き物か無生物か、などという区別は意味がありません。そっくりは印象だからです。いちいちその出自に注目はしません。

見た目至上主義みたいところが、そっくりにはあります。似ているとそっくりの区別もきわめて曖昧でいい加減です。そもそもそんな区別や分析とは遠いところにあるのが、そっくりなのです。

ちょっと分析すると、スーパーやホームセンターや家電の量販店で並んで売られている、そっくりなものたちには、製品であれば大量生産され、動植物であれば大量に飼育や栽培された、あるいは捕獲されたり採取されたという共通点があります。

そっくりであるほど、十把一絡げ的に、まとめて扱えるからでしょうね。一つ一つが違くと値段もつけにくいし運びにくいにちがいありません。なにしろ、早くさばくのが商品の販売の鉄則みたいです。個性と最も遠い世界にあるのが量販店で売られる商品なのでしょう。

*

そうした大きなお店では、売る人も制服を着て、そっくりに見える場合が多いです。上で述べたようにあくまでも印象の話です。そうしたお店で働いていらっしゃる方には失礼な言い方になっていることをお詫び申し上げます。

場所もそうです。特に同じチェーンのお店だと、店舗のつくりも、商品の陳列の仕方も、流れる音楽も、店内の匂いも、雰囲気も、トイレの様子も、レジでの人の流れも、そっくりに見えてなりません。こういうことに割と敏感なせいか、私は軽い目まいを覚えることがよくあります。

特にコンビニがそうです。フライヤーというのですか、あの油の匂いを嗅いで頭がふらふらしているところに、既視感の洪水というか、反復の反復というか、目の前のコピー感と記憶にあるコピー感がシンクロして、倒れそうになることも珍しくありません。

どこに行っても、同じなのです。そっくりなのです。視覚だけでなく、嗅覚、聴覚、たずまい、そうしたものを総動員したうえで、そっくり同じように感じられます。やはり、似ているどころか、そっくりと言いたいところです。

そっくりがそっくりをそっくりな場所でそっくりなやり方で売る、そしてそっくりな

お客さんたちがそっくりなやり方で買う。そして、自分もまたそっくり化していることにふと気づき、嘔然となる。

おそらくこれが資本主義なのでしょう。というか、資本主義の顔であり表情であり身振りなのでしょう。

そっくりという抽象とまぼろし

自分もまたそっくりである。そっくりの一つである。こうした状況は、無関心と関係があります。つまり、自分に興味がなく愛情も感じない人にとっては、自分はそっくりでしかない、その他おおぜいの一人でしかないと考えると分かりやすいでしょう。

立場を逆にして、世界のどこかにいる誰かは、あなたにとってそっくりなもの「一つ」であり、「一人」と数えるにも値しないほどのものだと考えられます。言い換えると人間としてではなく、抽象的な存在、たとえば 76 億人という数字の一つにすぎないのです。

数字や数は抽象です。お金も数値という意味では抽象です。

ただし、お金がたとえ 15,867,232 円という具体的な数字であっても、それが家を購入する資金であれば、抽象ではなくなります。意味とイメージをともなうからです。数字も、777 であれば、ある人たちにとっては特別の意味とイメージを持ちます。42 が不吉だと感じる人もいます。

0203 が自分の誕生日と同じ並びであれば、あるいは何かの暗証番号であれば、それは数字でありながら言葉と同じくらい意味やイメージが付着したものになりえます。また、たとえば 364 という数字が、その日に何度も目につけば、それを「シンクロ現象」と見なす人も多いようです。

数学者でさえ、そうした数字の非抽象化とは無縁ではないでしょう。ある数字を見て冷汗をかくたり、あるいはにんまりするという意味です。承認欲求とかゲシュタルト崩壊という、一見客観的であったり抽象的な言葉をつかってメタな視座に立っているつもりでも、そうしたものから逃れている人などいない、とえば分かりやすいかもしれま

せん。

抽象というのは人が考えているほど抽象でなかったり、人が思いもしない物事が抽象として立ち現れる事態もおおいにありうる気がします。

そっくりは印象なのですが、このそっくりさえも抽象として立ち現われる気がします。

そっくりに囲まれて、そっくりに生きる

たとえばどこかをスマホを見ながら歩く人たち。たとえばどこかの待合室でスマホに見入る人たち。

スマホというモノもそっくり、その画面に映っている映像もそっくり、聞こえてくる音声もそっくり、ときどき鳴る合成音やブルブルいう振動もそっくり、そのスマホに見入っているヒトたちもそっくり、ヒトたちの身につけているモノたちもこの瞬間に地球の至るところでそっくりなものがあるはずです。

どことは言いません。至るところでの話ですから。誰とは言いません。誰もが免れない状況なのですから。

「わたしはスマホはつかわない」ですか？ テレビでもラジオでも新聞でも本でも車でも病室のベッドでも棺でもお墓でもかまいません。いま挙げたもののほとんどが、大量生産され、印刷という形で複製されたものです。あなたがつかっている、目にしている、耳にしている、皮膚にまわりついている、横たわっているそれは他のどこかにそっくりなものがあるはずです。

至るところにあるのは厳密な意味での同じや同一ではありません。同一は世の中にたった一つしかないものを言います。分子や原子レベルでの「同じ」だと考えてもいいでしょう。こうなると同一とは、個性とかアイデンティティとかいう言葉で語られる次元にはない気がします。

いま話しているのは、そっくりについてです。

なにしろ、そっくりなのです。そっくりはそっくりな点がそっくりであるところまでいくと、抽象というのがふさわしいのではないかと思われることがままあります。ここでの抽象とは、「ヒトの頭の中にしか存在しない」くらいの意味です。言葉の綾と置き換えても大差ない気がします。

言葉は物も事も現象でもありません。その代理なのです。したがって、言葉をつかって、そっくりとか似ているとか同じとか同一とかいう話をすると、齟齬が起きます。これは致し方ないことでしょう。

ではどうしたらいいのでしょうか。一つはレトリックでお茶を濁すことです。ほのめかすとか匂わせるのもいいでしょう。言葉の限界と幻界を意識して、一見矛盾であったり荒唐無稽やナンセンスに感じられる言い回しをして、その限界および幻界ぶりをほのめかし匂わせるという、ほのめかし方や匂わせ方もできるでしょう。

言い換えると、本当は何も言えないという限界と幻界を意識しつつ、何かを言っているふりをして、実は何も言っていないふりを演じるイリュージョンをすることです。つまり、「ふりのふりをする」ことなのですが、そう言うくらいの芸しかいまの私には思いつかないのです。そうです、私は芸のつもりで記事を書いています。私は、note という寄席にいるピン芸人なのです。申し遅れましたことをお詫び申し上げます。

レトリックとたわごとはさておき、話を「そっくり」にもどしましょう。

同じ、同一

「そっくり」という、「その他おおぜいのうちの一つ」（複製としての抽象）が、ある人にとっては「掛け替えのないたった一つのもの」（同一性を帯びた具象）であるということもあります。

あるお子さんが、大量生産された玩具の一つを気に入り、それでしか満足しないというケースもおおいに考えられるという意味です。愛車もそうでしょう。お気に入りの品とは、そういうものです。愛着と興味がそこに詰まっているという言い方もできるでしょう。

「そっくり」な抽象的な存在である複製の一つに、「顔」を見だし愛着を覚えれば、それは「個性」を帯びた具象になるのです。

抽象と具象のあいだにはグラデーションとしての愛着があるのかもしれませんが。この愛着を私は「顔」としてイメージしています。あるものに「顔」を見る度合いが高いほど具体性を増すという意味です。この場合の「顔」とは、赤ちゃんにとってのまわりにある「顔」のことです。

また、抽象と具象のあいだにある愛着には、生まれながらに備わっているものと、後天的に学習や習慣によって育まれるものの二種類あるような気がします。

＊

ここで整理します。

「似ている」と「そっくり」は印象であり、印象は人の中にあるものですから、確認できません。基準が、人それぞれという意味です。「同一」とは世の中にたった一つのもので、これを確認するのは至難の業です。ヒトの知覚と認知機能には限りがありますから、器具・計器、器械、機械をもちいて初めて「同一」かどうかを確認できます。

「同じ」は曖昧な言い方で、人によっては、あるいは時と場合によっては、「そっくり」と「同一」の意味でつかうことがあるでしょう。この記事でも文脈に応じてつかい分けるつもりです。

＊

話を進めます。

文字が究極の「同じ」であり「同一」であることを思い出しましょう。

猫、ねこ、ネコ、neko。

どんな活字やフォントや文字の大きさであろうと、誰が口にしようとして、いま挙げた語

は同じです。文字は複製なのに、そっくりどころか、むしろ同じであり、同一なのです。

ここでの文字は、インクの染みとか画素という意味ではありません。抽象的な意味での「猫、ねこ、ネコ、neko」という語の話をしています（観念や概念という言葉をつかうヒトもいるでしょうが、観念や概念は手垢にまみれた言葉で抽象的な話をするのには適していません）。

文字を含めて、言葉は外からやって来るものです。人の内にはありません。「猫、ねこ、ネコ、neko」は、あなたが生まれたときに既にあった語です。それをあなたは真似て学んだのです。ちなみに真似ると学ぶは同源らしいですが、ここではそんなことはどうでもいいですね。

大切なことは、文字を含む言葉が外から来ているものであり、外にあるものだという点です。正確に言うと、人の外にある言葉しか、他人といっしょにその存在とありようを確認できない、となります。

同じ、同一という抽象とまぼろし

同じとか同一という抽象は、外にあり、外と内を行き来します。これが抽象なのです。というか、抽象というとりとめのないものを言葉にするさいの一つのイリュージョン、つまりレトリックです。言葉の綾とも言います。

さて、言葉、とりわけ文字は同じであったり同一であるからこそ（つまり抽象であるからこそ）、人の外にあったり、外と内を行き来するのですが、これは意味やイメージを取り去った文字や数字だという説明もできます。文字や数字には意味とイメージが付きもので、「意味とイメージを取り去った文字と数字」なんて人にはとらえられないものなのかもしれません。

ややこしいですね。実のところややこしいのです。簡単にすばっと切り取ることができれば、そんないいことはありません。というか抽象とか「意味とイメージを取り去った文字と数字」なんて考えてもいいことは一つもありません。こういうことは、本気でやることではないのです。単なるお話とか戯言として楽しめばいいという意味です。人それぞれですけど。

抽象、まぼろし

「似ている」と「そっくり」は印象であり確認できないので、まぼろしだと考えてみます。まぼろしは、人それぞれがいただくものです。人の中にあるものですから、見えないし、触ることもできませんから、他の人といっしょに確認しようがありません。

「同一」（世界で宇宙で「たった一つ」）は、計器や機械をもちいないと人には確認できません。「同じ」は曖昧です。時と場合によって、そっくり寄りであったり、同一寄りであったりします。

「同じ」には複製として「同じ」という場合があります。典型例は、文字です。文字の抽象的な部分、つまり形の特徴をとらえて、人は「同じ」と知覚し認識していると考えられます。学習の成果です。何度もなぞったり書いたり読んだりして真似て覚えていきます。学習ですから、間違いもあります。

＊

複製としての「同じ」を、絵画で考えてみましょう。版画を除いて、実物とか本物と呼ばれているものはふつうたった一つしかありません。同一と呼んでもよさそうです。絵画の鑑賞は複製でおこなうことが習慣化されていますが、さまざまな複製があります。粗悪な複製もあれば、精巧な複製もあるでしょう。程度の問題です。

印刷物であれば、紙質、インク、濃度、鮮明度が異なります。ネット上であれば、端末の環境によっても左右されるでしょう。絵画における複製の複数性と多様性を無視することはできないと思われます。

次に、複製としての「同じ」を、文字で考えてみましょう。文章もまた絵画と同様に複製で読まれることが習慣化し、一般的になっています。たとえば、小説、新聞、雑誌、論文、公用文といった文書（テキスト）は複製として存在し、拡散（流通）し、複製され（複製の複製です）、保存（保管）されると言えるでしょう。現物（実物）で利用されるもののほうが圧倒的に少ない気がします。

文字の複製にも、複数性と多様性が見られます。書体、フォント、サイズ、レイアウト、印刷物であれば紙質、ネット上であれば端末の画面に差があります。

＊

複製では、たった一つという意味での「同一」（同一性）よりも、同じであるという抽象面での類似性を利用して、拡散（流通）し、複製され（複製の複製です）、保存（保管）されるようです。

この類似性に支えられた「同じ」ですが、これを学習の成果だと見なせば、学習できない生き物には通じないだろうと考えられます。その意味（ヒトの頭の中にだけ存在するという意味です）で、複製としての「同じ」は、抽象であり、同時に、その意味でまぼろしだという気がします。

一概には言えないでしょうが、複製としての「同じ」（たとえば、文字や絵や映像）は、イヌやネコやニワトリやイワシには通じないだろうと思われまふ。ただし、生き物によっては部分的な学習は可能かもしれません。なお、かなりうまくいっているらしい機械に学習させることについては、ここでは触れません（ひとこと言うなら、人のつくった機械は人の外にある「外」です）。

一方、「同一」（複製としての「同じ」とは対照的に）は、ヒトの知覚と認知機能を超えた精度の「類似」の話であり、ヒトのつくった機械や光学的な仕組み（ヒトがつくったとはいえ、ヒトの外にある「外」です）は、同一（ガチガチの抽象です）に支えられているようなので、まぼろしとは言いにくい気がします。ある程度の有効性が認められるからです。

まぼろしのおかげで、ヒトが仲間を月面に立たせたり、2000年問題に打ち勝ったり、地球の気温を何度か上げたりした、なんて言い方は、プライドの高いヒトが許さないにちがいありません。

以上、私小説あるいは心境小説的なお話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#言葉 # 表象 # 日本語 # 抽象 # まぼろし # 似ている # そっくり # 同一# 文字 # 数字

映る、写る、移る

＊

映る、写る、移る

星野廉

2022年8月29日 15:28

このところ、「映る、写る、移る」とか「映す、写す、移す」と何度も記事に書いてきたためか、何を見てもそう思えてくるという状態が常態化してきて困っています。

ここでいったん頭の中の整理をしようと思います。以下は、直近の記事からの引用です。ずっと気になっているところだけを取りあげてあります。

目次

表情と身振りは生まれたての赤ちゃんの中にも入ってくる

相手の動きに合わせて、心や頭の中で、あるいは実際に動く

身振りや仕草がからだに訴えてくる

映る、写る、移る

明滅、ONとOFF、吸うと吐く、あうん

映っている表情や動きが、自分の中で転写されて、「何か」が移ってくる

動詞は動きをうながす、名詞は固定を指向する

動詞的なもの、名詞的なもの

表情と身振りは生まれたての赤ちゃんの中にも入ってくる

表情や身振りは視覚言語（手話も含まれます）と呼ばれることがあります、おもに見て受けとります。

話し言葉と書き言葉との決定的な違いは、表情と身振りは生まれたての赤ちゃんの中にも入ってくるという点です。すごすぎます。不思議ですね。考えるとわくわくどきどきします。

赤ちゃんを見ていると意味と無意味について考えずにはられません。赤ちゃんの表情や仕草や声が信号に感じられるからです。信号というのは、前提として意味やメッセージを想定しているわけです。つまり、はらはらどきどきです。

しかも点滅してあおることもあります。この泣き声はおむつを替えてほしいなのか、お乳がほしいなのか、どこかが痒いのか、痛いのか、暑いのか、それとも熱いのか？
こんなふうに解釈ごっこになります。

初めてのお子さんだと心配でしょうね、不安でしょうね。解読地獄におちいる場合もありそうです。

でも、赤ちゃんとお母さん、お父さん、その家族の人たちの様子を見ていると、赤ちゃんの発するあらゆる信号をつねに正しく受けようとしているわけではないのに気づきます。

受け流しているように見える場合がよくあります。ほほ笑みにほほ笑み返す、ほほ笑みにしかめっ面をしてみせる、ほほ笑みをただ眺めている。泣いても知らん顔。

それだけでいい。そこにいて笑みを浮かべているだけでいい。そこで泣いているだけでいい。そこにいるだけでいい。

信号は解読すべきものではなく、ただそこに「いる」という、おおらかでおおまかな印として、そこに「ある」かのように見えます。

ただ「いる」という信号として、ただ「ある」だけ。

意味はそこにあるというより、人の中にあるのでしょうか。世界が意味だらけなのではなく、人の中が意味だらけなのでしょうか。人は自分の中でたちさわぐ「意味の立ちあら

われ」を静める術を心得ているようです。

(拙文「意味が立ちあらわれるとき」より)

相手の動きに合わせて、心や頭の中で、あるいは実際に動く

意味と無意味のはざまにいても可能だという意味で、表情や身振りにはダイレクトに人に「何か」を感じさせる力があると言えそうです。

ダイレクトというのは、いわば無媒介的に表情が表情を、身振りが身振りを誘発する、つまり受け手が相手の表情と身振りを模倣する（「なぞる」）という意味です。

相手の動き（表情も動きです）に合わせて、こちらも心や頭の中で——あるいはじっさいに——動くと言えば、お分かりいただけるでしょうか。

身体的レベルでの「うつる」と「伝わる」が起きるのです。必ずしも「通じる」わけではありません。なぞってうつるのです。「何か」が伝わることは確かでしょう。この伝わり方をプリミティブと言う人もいそうです。

その伝わる「何か」は各人の中で起きていることですから確認できません。確認するためには、やはり言葉にして報告するとか説明するしかなさそうです。

身も蓋もない言い方になりましたが、じっさいにはそんなことはありません。みなさんの中で起きていることです。ご自分の日々の体験を振りかえってみてください。

というか、いまも、その「何か」があなたの中で起きているのです。

(拙文「中に入ってきたときに、中で起きること」より)

身振りや仕草がからだに訴えてくる

音としての言葉と、文字としての言葉に加えて、ぞくっとくるものを感じませんか？
皮膚に来るような感じとか、触覚的なイメージと言いましょうか、頭ではなく身体に
くるような、からだに訴えてくるような感覚のことです。

文章を読んで覚えるむずむず感については、ロラン・バルトが、Le Plaisir du texte
(1973) で似たようなことを書いていた記憶があります。

＊

言葉を見たり、読んだり、聞いたりして起こる、うつす、なぞる、なする、さす
る、こする、ぬる、なでる。

言葉では、こうした感覚がとても大切であり、誰もが日常生活で感じているはずであ
るのに、ないがしろにされている気がしてなりません（文学作品の鑑賞でも、この感覚
が重要な役割を果たすのに、です）。

ないがしろにされているとすれば、なぜなのでしょう？ たぶん、恥ずかしいから
ではないでしょうか。人には隠しておきたい感覚があるような気がします。あまり口で
言ったり、文字で書いたりするものではないのでしょうか。

それは外では確認できない「何か」なのです。各人の中にあって、他人に通じないか
もしれない「何か」なのです。きわめて個人的なもの、あなただけのものなのです。

荒唐無稽であったり、いやらしかったり、ときには背徳的で残酷であったりする。あ
えて、ひとさまに披露するべきものではない。それが「個人的なもの」ではないでし
ょうか。

それはきっと寝入るときや、トイレでぼーっとしているときに、あなたのところにやっ
て来ます。そして、おそらく死ぬ間際にもやってきて、たったひとりだけで、たったひ
とりで逝くあなたをなぐさめてくれるかもしれません。

＊

うつす、なぞる、なする、さする、こする、ぬる、なでる——。持論なのですが、こうした身振りや仕草がからだに訴えてくるのは、口（舌、唇、口蓋、歯、歯茎、声帯）と指（指の先、指の腹、指の関節、指紋、爪、汗腺、痛点、皺、襞、てのひら）が深くかわっている気がします。

話し言葉は口の動きと表情から発せられる波（振動）であり、書き言葉は手と指をもちいて書き、掻き、描くものであり、いまでは入力し、指でスライドしたりスクロールして読み書きするものであることを思い出しましょう。

もちろん、受け手である、濡れた眼（瞳、虹彩、睫、目蓋）、そして小刻みに震える耳（耳たぶ、産毛、中耳、内耳、鼓膜、耳小骨、耳管、蝸牛）を忘れることはできません。いやらしく見えたり聞こえたら、ごめんなさい。でも、そういうことなのです。

いずれにせよ、言葉を入れたり出したりする部分が、ひととき繊細で精巧にできていることに驚かないではいられません。私がとくに感心するのは手と指です。手が意思表示や治療に用いられることもあるのに注目してのことです。手というものが不思議でなりません。

いちばん気がかりなのは、耳や口や目と違って、手と指が自分の目で見えることです。自分から出てきて自分の目で見える文字（音声や表情や身振りは見えません）と似ています。

（拙文「うつる」でも「映る」でもなく「写る」より）

映る、写る、移る

ものすごく簡単に言うと、向こうが顔をしかめていれば、こちらもしかめる。向こうで走っていれば、こちらも走る。表情や動作をじっさいに、あるいは頭の中で浮かべてなぞるわけです。

それが見るであり、聞くであり、読むという行為と言えるでしょう。見たもの、聞いたもの、読んだものを、いったん信じないことには——「信じる」は「なぞる」です——、

見えないし、聞けないし、読めないのです。実際には「ないもの」を見て聞いて読んでいるのですから、変な精神状態にあると言えるでしょう。

いましているのは、絵、映画、映像、動画、演劇、物語、小説の話です。虚構というものは「ない」を「ある」と一時的に信じ（つまり、思い描くことでなぞり）、しかもそれを自分自身も心の中で表情や動作として演じるわけですから、確かに変なことをしていると言えます。

要するに、映る、写る、移るです。

転写された相手が自分の中に入ってくるという感じ。それは鏡を見るときに起きることでもあります。便宜上、「相手」と「自分」という言葉を使いましたが、鏡における両者のさかいは曖昧だという気がします。どちらが主でどちらが従か、どちらが先でどちらが後か、どちらが実でどちらが虚か、こうしたさかいかも意味をなくしているのです。

うつっているからです。うつるは相互的、双方向的なものではないでしょうか。鏡の話です。虚構の話です。見るのは人なのです。人あつての鏡であることを思い出しましょう。

(拙文「私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？」より)

明滅、ONとOFF、吸うと吐く、あうん

患者に異状が起きれば、その器械が察知して音を鳴らすか、非常用のランプ（※おそらく赤でしょう）を点滅させるか、電波を通じて然るべき別の器械に伝えるであろう仕組み。

それらは、すべてが信号なのです。

信号とは生きている、あるいは息絶えようとしている「しるし」。蛍の光のように明滅している。

明滅、ONとOFF、吸うと吐く、あうん。

明滅するのは知らせ伝えるためなのでしょう。何を知らせるのかは、信号には分からない。

送るものと受け取るもののあいだで生きる明滅。ツーツー、ピーポーピーポー、1と0、○とX、開けると閉じる、目くばせ、まなざし、表情、顔。

明滅を繰り返すことで信号が何かを訴えている。その意味では息をしているし、その意味では生き物なのかもしれない。そんなことを、いまになってとりとめもなく考えています。

(拙文「病室の蛍」より)

※生き物にたとえてはいますが、ここで言う「信号」とは、人が意味やメッセージを込めて作ったものであり、いわば自然発生的に出てきたと考えられる「言葉」とは異なることを忘れてはならないと思います。

映っている表情や動きが、自分の中で転写されて、「何か」が移ってくる

アート・ガーファンクルの歌い方を見ていると、つくづく口は楽器だと思います。上下の唇、舌、口蓋、歯に注目し観察しながら、ぜひ動画を見てみてください。いちばんいいのは、口の動きを真似ながら歌うことです。自分が口になったような気分が味わえますよ。

映る、写る、移る、です。つまり、画面に映っている表情や動きが、自分の中で転写されて、「何か」が移ってくるのです。表情と動きは、話し言葉（音声）や書き言葉（文字）と同じく言葉だと言えます。

唇、舌、口蓋、歯の動きや位置を意識して真似るのです。何だかエロいことをしているような感覚になればしめたものです。そうなのです。口は性器でもあるのです。変なことを言ってごめんなさい。でも、冗談ではないのです。

ジークムント・フロイトとかジャック・ラカンとか精神分析学とかジル・ドゥルーズについての本を斜め読みすると（つねに意識散漫で集中力のない私には精読は無理です）、人が性器だけで性行為をするものでもないことや、性と生が密接に結びついていることや、全身が性感帯であり生感帯であることが分かるし、生まれたばかりの赤ん坊が唇や舌で世界を感知し触れ合う行為の深い意味について学べるでしょう。

簡単な例を挙げます。赤ちゃんのおしゃぶり、赤ちゃんをふくむ老若男女の唇に触れる癖、思わず唇を噛む仕草、無意識あるいは意識的に唇を舐める仕草、広告写真における唇の氾濫、軽く口を開けている人間の無防備な魅力、歯医者で欲情するという告白、女性の口紅、男女を問わず存在する喫煙という風習、特に男性に見られるパイプへの偏愛……。こう列举すると何かいやらしくないですか？

上述の小難しいような固有名詞を出さなくても、意識的にゆっくり言葉を音として発することで、ぞくぞくわくわくどきどきを楽しむことができるし、たとえばその行為によって発汗や赤面や動悸や息切れをはじめとする生理現象が起こることを確認できるのです。

（拙文「Lに魅せられた作家」より）

動詞は動きをうながす、名詞は固定を指向する

触れる、振る、揺らす。

とっかかりのない私は、こんなふうに言葉を並べて言葉に来てもらいます。名詞でもいいのですが、最近は動詞ばかりに遊んでもらっています。そうなのです。私は言葉に遊んでもらうのです。これはレトリックではありません。実感なのです。

動詞は文字通り動きを指す言葉ですから、動きをうながしてくれます。たとえば、「祭り・まつり」という名詞だと動きへとうつれません。まして「おまつり」というと「お」を付けただけで、名詞感がいや増し、私なんかはかえって言葉が出なくなってしまうのです。

動詞は、「映る、写る、移る」なのです。動きですから、目というスクリーンに映り、それが顔をふくむ身体における動きや表情（表情は動きです）として写り、「何か」が移るのです。

(※「何か」は「模倣あるいは反復および変奏されたもの」であることは確かでしょう。いわゆる「意味」かもしれないし、いわゆる「メッセージ」なのかもしれません。ただ、動きとして視覚的に確認できないために、とりあえず「何か」としておきます。)

話をもどしますが、「まつり」(名詞)を「まつる」(動詞)とすると、私はとたんに動きを感じます。

まつる、たてまつる、あがめたてまつる。まつ、待つ、まつわ、いつまでもまつわ、俟つ、まかせる、まける、たのむ——。こんな具合にです。

論理や体系など無視した一種の連想ゲームなのですが、それに行きつると、辞書に助けてもらいます。

纏る、奉る、献る、祭る、祀る。

並んだ言葉たちに見入ってしまいます。わくわくぞくぞくそわそわします。

(拙文「触れる、振る、揺らす」より)

動詞的なもの、名詞的なもの

こうやって引用箇所を集めてながめていると、「映る、写る、移る」と「映す、写す、移す」においては、動きとか波(振動)が大きな役割を演じている気がします。

「動き」は自然の状態であり常態であると思います。とはいえ、人は「動き」を見たり知覚したとしても、それを言葉にする以外に他の人と「動き」について語りあうことはできません。言葉という形で外に出さない限り、他人といっしょに確認できないからです。自分の中で思うだけという意味です。

そうであるなら、「動詞」について考えればいいのか、と短絡したくなります。というか、このさい短絡しましょう。ついでに「名詞」を出しましょう。

では、仕切り直します。

＊

「動詞」は自然の状態であり常態であると思います。「名詞」に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は「動詞的なもの」に満ちている気がします。

「動詞」も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、「動詞」の向いている方向は、「名詞」の抽象性とは異なる気がします。

比喩的に言うと具体的な動きを誘い出す「動詞」はすっと腑に落ちます。繰り返えし的な言い方になりますが、「動詞」が動きを指向するからでしょう。

＊

「動き」がすっと腑に落ちるとするのは、話し言葉や書き言葉を知らない（学んでいない）赤ちゃんが、表情や動きに注目して、それを目でなぞり、おそらく自分の中でなぞったり、あるいはじっさいにその動きを真似て演じることを思いだすと分かりやすいかもしれません。

こんな場合も分かりやすいと思うのですが、よく日常生活で言葉に詰まることがありますね。私なんか歳を取ってきたせいとか、頻繁にそういう状態におちいります。そんなふうには言葉が出ないときには、何かを伝えるべき相手に、おもに手や指や腕を使った仕草や、表情（一種の顔芸です）や、ずばりそのものを指すことがあります。

身振り言語とかジェスチャーとか言われるものでしょう。これをやっていると、なぜかとても気持ちがいいのです。動作や仕草と同時に、「あれ（が・を）」とか「これ（は・に）」とか「こんなふうに」なんてよく口にしますが、こういう代名詞は言葉だと言えそうもありません。

なんだか自分の恥をさらしているようなのですが、話し言葉なんかよりも、ずっと

楽なのです。また、相手もそういう感じで応えてくれると、その身振りや表情を見て、すっと腑に落ちるのです。もちろん、通じないことも多々ありますが.....。通じないのは、話し言葉や書き言葉でも同じだと思います。

(中途難聴者である私は聞こえもかなり悪くなってきているので、手話を勉強しているところです。生きていくために必要だからです。文字つまり筆談だけでは「腑に落ちない」(ぴんと来ない) ことがあると最近感じているからでもあります。うまく言えませんが、仕草や身振りのほうがずっと楽なのです。)

*

一方の、「名詞」は「頭で理解する」(比喻です) 感じで、不自然なのです。動きよりも固定を指向するからではないでしょうか。自然界には固定を指向をするものは存在しない気がします。いわゆる万物流転です。固定は抽象(ここではヒトの頭の中にしかないものという意味です、というか抽象とはきわめて人間的なものなのです)ではないでしょうか。

あらゆるものが、動いているのです。ただその動きがヒトの知覚機能を超えている場合には、当然のことながらヒトには察知できないということでしょう。

そういう知覚できないものを、ヒトは器械や機械や器具をもちいて知覚できるような工夫をしていますが(いわゆる視覚化とか「見える化」とかシミュレーションがそうです)、それが完全であったり万全であるという保証はないわけです。

私はこういう状況を隔靴搔痒の遠隔操作と呼んでいます。簡単に言うと、「手に届かないもの」の代わりに「手に届くもの」で済ませて澄ましているという意味です。「そのもの(本物や実物)」には到達できないから、とりあえず「代わり(代理や似たものや似せたものや偽物、要するに別物)」を相手にしているのです。

写真に写っているものはそのものではないし、言葉は言葉が名指している事物ではないし、目の網膜に映っているものはそのものではない、とえば分かりやすいかもしれません。

＊

話を「あらゆるものが、動いている」にもどします。

よく考えると、身のまわりのすべてのものが移動してここにあるわけです。それに、いつまでもここにあるわけではありません。「ここ」にある「これ」は、以前は「こう」ではなかったし、「どこか」にあったはずです。万物流転。万物動転。気も動転。びっくり仰天。はあ。ため息が漏れました。すべての物が長い目で見れば動いているのですね。

(拙文「あやしい動きをするもの」より)

「動詞 (的なもの)」と「名詞 (的なもの)」については、以前に記事にしたことがあるので、近いうちにもう一度加筆したうえで投稿しようと考えています。

「映る、写る、移る」が、「動詞 (的なもの)」と「名詞 (的なもの)」へと「うつって」きました。なんとなく、整理できた気分です。こういうのは、やってみないと分かりません。お付き合いいただき、ありがとうございました。

#言葉 # 表情 # 身振り # 仕草 # 顔 # 話し言葉 # 書き言葉 # 文字 # 動詞# 名詞

人は存在しないもので動く

＊

人は存在しないもので動く

星野廉

2022年8月24日 08:01

いましているのは、絵、映画、映像、動画、演劇、物語、小説の話です。虚構というものは「ない」を「ある」と一時的に信じ、しかもそれを自分自身も心の中で演じるわけですから、確かに変なことをしていると言えます。要するに、映る、写る、移るです。
(.....)

以上は、スラヴォイ・ジジエク経由のジャック・ラカンについての私なりのまとめとも言えるものなのですが、頭にあるのは赤ちゃんだけではありません。赤ちゃんから成人までを想定しての話です。

(拙文「私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？」より)

目次

開いた窓

斜めから見る

「見えないもの」を想像して見ることで、それが「ある」と決める

何でも俯瞰できるという錯覚の心地よさ

地球的規模で考えれば、誰もが傍観者

斜めから見ると見えるという話

人は有るものよりも無いものによって動いている

手に届かないAの代わりに、手に届くBで済ませている

あとはレトリックだけの問題かもしれない

開いた窓

ある少女が巧みな話術で、今はここにはいないある人物について語る。それに聞き入るあなた。そこにそのいないはずの人物がいきなり現われる。当然のことながら、あなたはびっくりして腰を抜かしそうになる。それほど少女の話はリアルだった。実在よりも不在のほうが、ずっとリアルだった――。

その村には不気味な廃屋がある。肝試しに村の若者たちが一度は訪ねて一夜を過ごし、帰ってくるのだが、そこを訪ねた若者は誰もが口ごもる。それほど恐ろしい目にあつたらしい。何を見たのか。その村に、ある男がやって来て、その幽霊屋敷の話聞きつける。男はその家に行って一夜を過ごし、「何も見なかったし何も起こらなかった」と笑う。男は村人に殺される――。

以上の二つの話に共通するのは、有りもしないことを信じる人間の想像力の強さでしょう。二番目の話では、その有りもしないものの想像が打ち破られることへの怒りも表現されています。

*

人は有るものよりも無いものによって動いているのではないか。そんなふうによく思っています。

無いものは力を持っているとしか考えられません。今ここに無いのに力を持っているとも考えられるし、今ここに無いからこそ力を発揮するのだとも考えられます。いずれにせよ、不思議な話であり、恐ろしくもあります。でも、それが人の常態なのです。人にとってだけの話（＝フィクション）とも言えるでしょう。

「馬鹿な話だ。無いものが力を持つわけがないじゃないか」そうお思いの方もいらっしゃるでしょう。一方で、「そうそう、そのとおり。無いものこそが力を持っている」とうなずいてくださる方も、少なからずいらっしゃる気がします。

*

そういえば、ないものをめぐっての小説を書こうとしていたことがあります。連作というかシリーズです。

自分にはない男性器を備えた「存在」に取り憑かれた女性の話（「存在」とは「人間」ではなく、小説や漫画やアニメや映画の登場人物のことなのです）――。

自動車事故のために切断された足の痒みに悩まされたり、今はない足にまつわる記憶に耽る少年の話——。

持ち主のない、つまり持ち主を失った物を見るとその物の来歴が頭に次々と浮かんできてとまらなくなる老女——。

そんな具合に、ないものが登場人物を翻弄するという一連の話を書こうとしたのです。

こういう書きかけの小説であったり、小説のアイデアにしかすぎないものについてあれこれ思うのが好きです。つまり、ないものをめぐって考えるというわけですね。

私は本の広告が大好きです。朝刊の第一面から次々とめくって行って各紙面のいちばん下にある書籍の広告を見ていくと眠気がなくなります。そのために朝日新聞を購読していると言ってもかまいません。

知らない本のタイトルやそれに添えられた短い説明を読みながら、その中身を想像、いや空想するのです。わくわくします。書評はたいがい長すぎて興ざめします。読んでもいない本のことをブログに書いていた時期もありました。

「架空書評」を書いているうちに、そこから小説ができあがるというきわめて安直な方法を編み出したこともあります。拙作「【小説】奪還（全10話）」と「架空書評：奪還」がそうです。私の小説はほとんどがそうやって書いたものなのです。

学生時代には文芸作品を読まずに文芸批評ばかり読んでいました。言葉に言葉をかぶせて重ねていく手際がスリリングだったのです。映画を観ないで映画評を見るのも好きです。このことは、「【小説】知らないものについて読む」という記事に書きました。私という人間のいい加減さがよく出ている文章です。

＊

話を戻します。

「ないもの」シリーズを書こうとしていた頃に頭にあった作品がいくつかあります。たとえば、サキの『開いた窓』、パトリシア・ハイスミスの『黒い家』（ブラック・ハウス）、そしてW・W・ジェイコブズの『猿の手』です。

この三編の作品はどれも解説するとネタバレになる恐れがあるので気をつけなければなりません（実はもうしちゃいました、ごめんなさい、でも作品を読んだことがある人にしか分からないやり方をしましたので.....）。「ないもの」や「目に見えないもの」が人を恐怖や不安や悲しみにおとし入れる（期待や熱狂や幸福感を覚えさせる場合もあります）、とだけ言っておきます。

斜めから見る

上の文章を書いていることを思い出したので、確認のために二階に上がって書棚からある本を取り出してきました。

スラヴォイ・ジジェクの『斜めから見る』です。

スラヴォイ・ジジェクという人は、映画や小説や大衆文化や政治を題材に、とても面白いこと（あるいは、ぜんぜん面白くないこと）をめちゃくちゃ面白く語るのので、YouTubeで検索してみるのもよろしいかと思います。

私なんかジジェクの動画に見入ってしまいます。話の内容よりも、ジジェクの仕草や表情に、です。そのレトリックだらけの話術に魅惑されないでいるのは難しいのではないのでしょうか。

*

私が「ないもの」シリーズという連作小説を書こうと思いついたのは、このジジェクの本を読んでひらめいたからだとも言えそうです。

この本の文章は決して読みやすくはありませんが、具体的に映画や小説のタイトルや作家名が出てくるので、そこだけに目をやって各作品に当たる、あるいは当たらない、と

いう読み方もできます。げんに私はそうしていました。私の場合には、各作品には当たらないという意味です。

とにかく面白いのです。後ろにある「原註」だけでも、読んでいてわくわくします。原註のほうが断然面白いと言ったら、ジジエクさんと訳者の鈴木晶さんに叱られそうですけど。

映画、特にヒッチコックに関するジジエクの文章は、その訳が分からないところがとても刺激のかつ最大の魅力で、ついさっきも再読しながら酔い痴れていました。

「第二部 ヒッチコックについてはいくら知っても知りすぎることはない」にある「第5章 ヒッチコックにおける染み」が面白いです。ここから、ジャック・ラカンに行くという手というか、道もあるでしょう。勉強にもなるという意味です。ジジエク経由ラカンはラカンに赴くのに手っ取り早い方法だと思います。

(※「ヒッチコックについてはいくら知っても知りすぎることはない (One Can Never Know Too Much about Hitchcock)」なんていうタイトルを付けるところが、ジジエクの話術とレトリックのうまさのあらわれです。煽るのです。ちなみに、これはヒッチコックが監督した『知りすぎていた男』(The Man Who Knew Too Much) のもじりでしょう。こういう言葉遊びやアリュージョン(言及・ほのめかし)も、ジジエクは得意であり、かなりの芸達者と言えます。)

この章の冒頭で、ジジエクはヒッチコックの「海外特派員」を取り上げ、チューリップ畑が続くオランダの田舎で「風車の一つが風向きと逆に回っている」ことに主人公が気づく場面に注目するのですが、次のように要約できるでしょう。

見慣れた風景(オランダの風車の並ぶ風景)に、ちょっとした特徴(風向きと逆に回っている、一つの風車)が加わったとたんに、その自然な風景が不気味なものに変わってしまう。そこには属さない場違いな、つまり何の意味も持たない細部が加わったのである。

こんなふうに、ジジエクは指摘するのですが、この指摘に続く部分を引用してみます。

”（中略）シニフィエを伴わないこの「純粋な」シニフィアンが、他のすべての要素にとっての補足的・隠喩的な意味の発生をうながす。それまではまったくありふれたものと見なされていた状況や出来事が、どこか奇妙に見えてくる。われわれはいきなり二重の意味の世界に入り、あらゆるものがなにか隠された意味をもっているように見えてくる。ヒッチコックの主人公——「知りすぎている男」はその意味を解読するのである。（後略）”

（『斜めから見る』スラヴォイ・ジジェク著、鈴木晶訳、青土社 pp.168-169）

”[...] This “pure” signifier without signified stirs the germination of a supplementary, metaphorical meaning for all other elements: the same situations, the same events that, till then, have been perceived as perfectly ordinary acquire an air of strangeness. Suddenly we enter the realm of double meaning, everything seems to contain some hidden meaning that is to be interpreted by the Hitchcockian hero, “the man who knows too much.” [...]

（“Looking Awry: An Introduction to Jacques Lacan through Popular Culture” by Slavoj Žižek The MIT Press p.88）

以上の見解は、映画だけでなく人の見る行為（ひいては五感を用いて知覚する行為）における不可避な錯覚を示唆しているように私には思えます。

＊

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」（いわば鏡の中に見ている）のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっている、ということです。

いま述べたのは、スラヴォイ・ジジェク経由のジャック・ラカンについての私なりのまとめでもあります。

＊

ふつう人はそれに気づきませんが、何らかの「異化」によって気づきます（または、思い出します）。その「異化」が、このヒッチコックの映画では「風車の一つが風向きと逆に回っている」であり、ジジェクに言わせると「シニフィエを伴わないこの「純粋な」シ

ニフィアン」なわけです。

この「異化」に気づくのは、映画の主人公なのですが、さらには映画の観客の一人である、あなたも気づくことになり、その結果あなたもまた映画にまきこまれる——、ジジェクはそう指摘します。

ジジェクの文章（邦訳と原著の英文）は読みにくいですが、難解ではありません。難解（解きにくい）とは、私に言わせると、ないことをあるように断言したり、ほのめかすからなのです。多くの哲学学者の文章がそうです。ジジェクはないことはないとほのめかします。だから、読みにくいのですが明快であり難解ではありません。「読みにくい」については、後でまた触れます。

「見えないもの」を想像して見ることで、それが「ある」と決める

人は「見えないもの」を「想像して見る」のであり、「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みがある——。

それだけにはとどまらないと私は考えています。

人は「見たいもの」（それが「見えない」にもかかわらず）を「見える」と決めるために、その根拠となりそうなものを求めるのです（この「求める」を「欲望」とか「欲求」というもっともらしい言葉で作文することもできます）。

こうも言えるでしょう。人はないものがあると決めるために、その根拠となりそうなものを求める。その根拠は何であってもかまわない。いわば、イワシの頭も信心からの「イワシ」は何でもあってもいいのです。

＊

たとえば、人は自分の顔や姿を直接見たことはないし見えない。このことにもっと目を向けていいし意識していいのではないかと個人的に思っています。あらためて考えれば不思議なことだし、それを意識しないなんてとんでもない抽象だという気がしてならないのです。

個人として、そしてヒトという種というレベルでも、です。見ると見えるのが当たり前のようになっていて、鏡や写真などで間接的にしか自分を見ていないという事実を考えが行かないのは、いくらなんでもそそつかしいし、うっかりすぎるのではないか。自分を含めてというより自分をど真ん中において、そう思います。

私は考える、だから私は存在する。これは疑いのない事実だから、これを一般化してものを考えていい。そんな言い方があるくらいですから、私も自分の「見る・見える」を前提にして物を考え、それを文章にしていくしかない気がします。

＊

どんな文学作品も、哲学の著作も、宗教的な文章も、あらゆる学問の論文も、とどのつまりは私的な感想文であり、フィクションという点で物語であり小説に思えてなりません。根本に「私」の知覚があるからであり、「ない」を基盤とする言葉を用いているからです。そこを出発点にして、考え、書くしかないという意味です。

誰もが自分という枠の中において、そこから枠の外を見ているわけです。それなのに、自分は枠を超えて見ていると思こんでいる、あるいは自分は枠を超えた存在だと思っている。自分の姿を自分の目で見たことがない存在なのにもかかわらず。

それでいいのでしょうか。致し方ないという意味で、それしかないと言うべきか。それが人なのでしょう。もちろん、この私もそうです。以上の私の文章も私が自分の知覚をもとにして書いた感想文でしかありえませんが、そもそもこの記事は小説として書いています。

＊

言葉が世界を見えなくしているのではないか。たとえば「見る・見える」という言葉があるから、「見る・見える」が当然で疑う余地のないことだと思こんでいるのではないか。最近、よくそんなことを考えます。なぜ見えるの？　だって見てるんだもん。何が見えるの？　見ているものに決まっているでしょ。というわけです。すごく明快だと思えます。

私は見る、だから私は存在する。見ることと見えることに何の疑いもいだかない、い
だく必要なんであろうはずがない――。

見るという行為がどんなことなのかを考えようとしなのは、考える必要がないから
でしょう。考えてもいいことはなさそうだと、体が知っている（いや、むしろ体感を裏
切って頭が盲信しているのでしょう）のかもしれませんが。だから、自分の姿も顔も肉眼
で直接見たことがないとか、見た人間はいないし、いなかったし、これからもいないと
いう事実には思いが行かないのです。

でも、私はそんなことをこのところしょっちゅう考えています。

何でも俯瞰できるという錯覚の心地よさ

いつだったか、牧羊犬が羊の群れを誘導する様子をドローンか何かで撮影したらしい
動画を見たことがあります。羊たちも犬も上空から見るとほとんど点なのですが、その
点の動きが美しいのです。犬らしき点が動きまわり、羊たちらしい点の集まりが形を変
えて、ある方向へと導かれていきます。犬の動きには無駄がないのです。上から見ると
ちょっと動いているだけで、羊たちを着実に囲いの中に誘いこんでいるように見えます。

こういうの俯瞰といいますね。犬にはそうした上から見た映像が見えているとは考え
られません。それなのに、無駄なく正確に、人が望んでいる方向へと多数の羊たちを誘
導するのですから、奇跡を見ている思いがしました。

そのときに連想したのは、テレビで見るサッカーの試合の映像でした。サッカーの選
手の動きは、複数のテレビカメラによって映像化されているわけです。遠方の高い位置
から俯瞰的に撮影した映像もあれば、各選手の体の動きや顔の表情やその汗の流れさえ
間近で見えているような接近した映像もあります。

ある選手に注目していると、敵と味方を含めた選手たちの位置と動き全体を、あたか
も俯瞰しているような驚くべき動きを見せることがあります。上で述べた牧羊犬のよう
に、フィールドの中の一点としてその位置からの視点で見ているはずなのに、まるで羊
の群れ全体の位置と動きを把握しているかのような動きをします。

サッカーの試合のライブも臨場感があってわくわくしますが、試合中に複数のカメラで撮った映像を試合後に編集して見せる場合には、もっと驚くべき動きが紹介されることが多々あって、ぞくぞくします。何であんな離れたところが見えているような動きをするのだろう。背中に目でもあるのだろうか。視界にあるものから視界にないものの動きを察知しているとしか思えない。さもなければあれは魔法だ、いや奇跡なのか。

＊

人は俯瞰が好きです。何でも視覚化できるだけでなく、何でも俯瞰できると思いこんでいる節が見られます。地域地図、世界地図、航空写真、宇宙の画像。集合写真も、俯瞰の一種かもしれません。クラスの全員が映っていれば、全員を把握した気分になれるからです。

俯瞰とは、場所、つまり空間だけではありません。時間的な俯瞰もあります。スケジュール表、タイムライン、カレンダー、年表などは、時間を見える化するだけでなく、時間の流れを時系列で視覚化する仕掛けとか仕組みとか装置だといえるでしょう。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史というぐあいに、個々の事象にまつわる出来事を時系列で記述しようとする人の試みと情熱には驚かされます。

図書館、博物館、美術館、博覧会も、それぞれが俯瞰の一形態だと見なすことができるでしょう。百科事典、辞書、図鑑、博物誌のたぐいも、空間（地球・宇宙）だけでなく時間（歴史・有史以前）の俯瞰を指向していますね。人の飽くなき意志と欲求に驚かされます。

俯瞰という身振りは、人が初めて水面に「かがみ」こんで自分の姿を見た身振り、そして鏡を作り毎日鏡に見入っているという身振りに重なります。自分を見ているつもり。でもその鏡像と映像は自分ではないのです。見えているのは自分ではなく自分の影、幻影なのです。人は自分を肉眼で見ることはできません。ここに「見る・見える・見ない・見えない」の原点がある気がします。

＊

ところで、文学史に出て来る人は特定の人物でしかないことに気づき、嘖然としたことを思い出しました。よく考えれば当たり前のことです。文学史に限らず、文学について語るさいに登場する作家たちは、文学の歴史すべてをすくい取った人選ではありえません。

幸運にも同時代や後世の人たちから注目されたりもてはやされた書き手で、その作品が原稿や日記や印刷物として残っている人だけが、いまも作家として取り上げられているにすぎないのです。中にはある時代に評価され、いまは忘れ去られている書き手もいるにちがいありません。

それなのに、あたかもある特定の作家だけが作品を書いていたかのような扱いを受けているのは、よく考えれば不思議な出来事です。

音楽もそうでしょう。科学もそうでしょう。芸術一般もそうであるにちがいありません。選択と排除の結果です。「評価」や「価値」という言葉には、そうした側面があることを忘れてはならないと思います。綺麗事ではないという意味です。

宗教も例外ではありません。異端、刑、罰、悪などの名のもとに、それだけの人や生活がなきものにされた、つまり排除されたことでしょう。その結果が、現在の各宗教のありようであり、かたちなのです。みなさんがご存じのように、排除が続いている地域が世界にはまだあります。

＊

ある「特定の人」と「特定の作品や本や理論や法則」だけが残っているを必然と見るのか、それとも「たまたまそうになっている」のだと見るのとでは違う気がしますが、一方で「そうになっている」ということの重みはあまりにも重大なので、「それしかない」という無力感に襲われてしまう自分がいます。

考えても仕方ないたぐいの問題なのでしょうね。考えてもくたびれるだけです。

＊

いつだったか、「人は一つのテレビ画面しか見えない」みたいなことをブログで書いた

ことがあります（※「1人に2台のテレビ」と「人面管から人面壁へ」）。もちろんそれは比喩なのですが、何を言いたかったのかというと、人には見える、つまり集中して見ることができる画面は限られているのではないかということなのです。

一つなのか二つなのか数は分かりませんが、複数の画面を集中して見ることはできないという気がいまもします。この「画面」を意識とか認識と言い換えてもかまいません。

いま述べたのは個人レベルの話なのですが、地域とか国とか世界というレベルで考えてみた場合、何千万、何億、何十億という個人を集めても、ある程度限られたキャストの舞台とかドラマとか映画とか小説しか（もちろん比喩です）、人間は見ることができないうし、認識できないし、意識できない気がします。要するに限りがあるという意味です。

＊

多数（おびただしい数のというべきでしょうか）のものごとを、あるいは多量の情報を処理するには人の脳は容量が小さすぎるとも言えそうです（認識や知覚がからむと脳だけでなく神経系統の機能に限界があるからだとも考えられます）。

だから、書籍とか文書とか資料とか、それを収める図書館や博物館、そして通信機器と情報通信技術、およびそれらが洗練され発展したコンピューターやインターネットなどという記憶装置と伝達装置を人は作って補っているのでしょうか（この辺の知識が乏しいので稚拙な表現しかできなくて申し訳ありません）。

地球的規模で考えれば、誰もが傍観者

ところで、見殺しにするという言葉は的を射てなかなか「言えている」と思います。見えていることで、人を殺しているとか、助けないので、自分を含め、誰もが免れない事実ではないでしょうか。地球的規模で考えれば、誰もが傍観者なのです。救える命（たとえば貧困で苦しんで飢え死に寸前である人たちです）がたくさんあることを承知しながら、のほほんと生きている。

見るごとと殺すごとが同義になってしまいます。屁理屈と言われるでしょうが、私はこの理屈を否定できません。さらに屁理屈を言わせてください。スマホに見入っている

人は、見ているというより、何かに入りこんでいる。ゲームの世界、誰かとの言葉や映像のやり取り、何かのトレードとか商取引、楽曲の中、動画の中に、です。

要するに、「見る」が、「プレイする（遊ぶ、賭ける、演奏する、演じる、競う）」とか「商う」とか「話す」とか「もえる（要するに欲情するという意味です）」とか「いじめる」とか「幸せにする」だったりするわけです。

ネットを利用して世界旅行もできます。「見る」が「移動する」になるわけです（ゲームもそうでしょうね）。私もよくやっているのですが、ストリートビューで知らない土地や過去に訪ねた場所をよく歩いています。上空を飛んでいる場合もあるみたいです。そういえば、ストリートビューは「見る」のではなく「撮影する」行為なのだという卓見を note の記事で読んだことがあります。

たしかに、ストリートビューは見ていると撮影するが同時に起きている気がします。そうなると、スマホのカメラで撮影することと、スマホを見ることの境がとても曖昧に思えてきます。見ると見られるの境も不明になります。ネットに接続することで、誰かに、あるいはビッグブラザーに見られるのです。見ていることは見られていることである、という状況を私たちは生きているわけです。

パソコンやスマホの画面を覗きこんでいる、いま、この時点もです。

SNSなんかであるツイートや記事を開覧することが傍観することであったり、その文章や映像が何らかの犯罪につながるものであれば、閲覧と拡散が加担や共犯にならないとは言いきれません。

じっさい、そんなケースもありますね。いつだったか、「不祥事」を起こしたとされるある芸能人が記者たちから集団でハラスメントを受けているのを閲覧していて、はっと我に返り、自分はこのハラスメントの共犯者ではないかと思ったことがありました。見ることで、知らない間に「見ている行為に加担している」のです。

かといって、その気づきの上に立ち、私が何か積極的な行動をしたわけではありませぬ。私が共犯者であるなら、共犯をつづけたと言われても返す言葉ありません。

＊

話が飛びすぎました。人は「見ている」のではなく「見る」という言葉を使うことで（あるいは使われることで）「見ていると決めている」のではないかという話でした。また、「見る」がほかの行為と同時に起こっているのではないか（たとえば（仲間を）「殺す」が、ほかにもあるはずです）とか、あるいは「見る」が「何もしていない」と等しいこともありえるのではないか、という話でもありました。

鏡に見入る人はそして人類は、鏡の中の住人または囚われ人なのです。鏡の中がどれだけ自分とその世界を反映しているのでしょうか？ 鏡や画面に枠があることを思い出しましょう。無限に広がっている鏡なんてないのです。果たして、人はそして人類は「見えている」のでしょうか？ 何を、どれだけ、どんなふうに見ているのでしょうか？

＊

話を戻します。

「見る・見える」という行為は、実は「見る・見える」という言葉を代理に使って済ませられるほど単純なものではないように思われます。

たとえば、スマホやパソコンを使ってネット上である文章（テキスト）やある画像や動画を閲覧することが、「見る・見える」では済まされなくて、傍観する、見殺しにする、見て見ぬ振りをする、であることは十分ありえる気がします。困った人や困った状態を見ている場合です。

困ったどころか、見ている対象が犯罪行為であれば、共犯にならないとは言い切れません。自動車に装備されているカメラ、あちこちにある防犯カメラやライブカメラや情報カメラ（何というまやかしじみた言葉なのでしょう、恐ろしいものをこういうふうに言えるのですから、言葉は怖いですが）は「見ている」あるいは「撮影している」わけですが、人がそうさせていることを忘れてはなりません。特定の誰かの利益になるという意味です。

権力の後ろ盾のある国家やある集団が、そうしたカメラだけでなく、ネットでつながった、あるいはつなぐことが可能な、さまざまな装置（コンピューター、端末、通信器機、医療器機、音響器機、家電一般.....）を操ったり管理すれば、どうなるでしょう。

そんなことが妄想とは言えない兆候が、見えますね。もうそうではなく、もうそうなっています。怖くて、どの国とは言いませんけど。

*

自分を肉眼で見たことがない個人レベルの人と、人類というレベルの人が、しゃかりきになって自分の映像（映った像）と鏡像（鏡に映った像）に見入って、それが自分であり、それが「見る・見える」であると思いこんでいるという話でした。

こういうしゃかりきというか、人のなりふり構わない必死ぶりを見ていると、人は自分が見えないことを失念しているところか、深層ではそれがトラウマに近いほどショックであり（「うちらは人間さまだぞ、こんなはずじゃない、ありえない」、その事実を隠蔽するために無意識に画策しているのではないか（無意識ですから、ふつうは「見えない」し気づかないのです、上のジジエクのレトリックに満ちたお話のように）、なんて妄想してしまいます。

斜めから見ると見えるという話

再び話を戻します。

ジジエクは、上述の「風車の一つが風向きと逆に回っている」という映画のショットを、ジャック・ラカンがよく引き合いに出すホルバインの「大使たち」という絵画に関係づけます。真っ直ぐに見るのではなく、いわば斜めから見ると「染み」が「頭蓋骨」に見えるというわけです。（邦訳 pp.172-173）

これも人に気づきの「異化」をもたらすものと言えるでしょう。上述のヒッチコックの映画で、「異化」に気づくのが映画の主人公だけでなく、映画を観る人（つまり、あなた）であったように、あなたもこの絵画にまきこまれるということでしょうか。斜めから見ることによって。

大使たち - Wikipedia
ja.wikipedia.org

このように、ヒッチコックを題材にラカンの考え——人が世界を解釈し、意味を生み出す生き物であること——を語るジジエックの話術とレトリックは巧みで迫力があります。映画好きの人にお薦めの本です。

映画は、スクリーンに映写機で映し出された影、影絵、幻影を見るという仕組みです。影という「ないもの」を見ているとも言えます。そしてその影は作られたものです。カメラで撮影され編集されているわけですね。「ないもの」が「作られた」とも言えます。

(んなこたーない。映画に映っているエッフェル塔に感動したら、それは実在するエッフェル塔に感動したのと変わらんだろーが——。なんて幻聴が聞こえてきたので、お答えします。そういうことを言っているのではないのです。目の前にないもの、つまりエッフェル塔の映像、影、幻影を見て、人は感動するという話をしているのであり、それ以上でもそれ以下でもありません。エッフェル塔の実在は問題にならないのです。というか「実在」なんてややこしい話はしていません。バンビが実在しなくても、人はその幻影に感動します。あ、バンビじゃなくてオバケのQ太郎でも同じです。大切な点は、「実在するもの」の幻影に対する感動と「実在しないもの」の幻影に対する感動には質的に何ら違いはないことなのです。)

映画は、「ないもの」を「あるもの」だと錯覚させる——「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」をもちいる、つまり代用する——という、人のいとなみの集大成みたいなものなのかもしれません。テレビ（走査線）もネット上に飛び交う映像（画素の集まり）も、影絵の集大成である映画の焼き直しと言えるでしょう。

映像の魔術師であるヒッチコックに、言葉の魔術師のジジエックが惹かれるというのは分かりやすい構図です。

付け加えますが、おそらくジジエックはその華麗かつバロック的なレトリックを戦術としています。魔術でも呪術でもなく、戦術です（だから私はジジエックの著作を読むのですけど）。魔術や呪術と受け取られることを計算に入れての演出に長けているのです。師であるジャック・ラカン譲りの戦略かもしれません。

*

私の好みの作家や作品を、この本の後ろにある索引から抜き出してみます。

・ロバート・シェクリイ

『夢売ります』(仁賀克雄訳『幻想の怪奇』1、ハヤカワ文庫)

・パトリシア・ハイスミス

『ブラック・ハウス』(鈴木晶訳『ニュー・ゴシック』、新潮社)(※『黒い家』in『黒い天使の目の前で』扶桑社ミステリ)

『見知らぬ乗客』(青田勝訳、角川文庫)

『池』(小倉多加志訳、『風に吹かれて』、扶桑社ミステリー文庫)

・ルース・レンデル

『死を誘う暗号』(小尾扶佐訳、角川文庫)

『ロウフィールド館の惨劇』(小尾扶佐訳、角川文庫)

・スティーヴン・キング

『ベット・セマタリー』(深町真理子訳、文春文庫)

懐かしいです。持っている本もあれば、処分した覚えのあるものもあれば、行方不明のものもあります。私にとって、まさに「ないもの」同然の作品になりつつあるのは確かです。でも、「今ここにはない」からこそ、力を持って今ここにいる私に迫ってくるのも事実なのです。

あちこち話が飛んで申し訳ありません。話を戻します。

人は有るものよりも無いものによって動いている

人は有るものよりも無いものによって動かされている、いや動いているのではないか。そんなふうによく思います。

無いものは力を持っているとしか考えられません。今ここに無いのに力を持っているとも考えられるし、今ここに無いからこそ力を発揮するのだとも考えられます。いずれにせよ、不思議な話であり、恐ろしくもあります。

「馬鹿な話だ。無いものが力を持つわけがないじゃないか」そうお思いの方もいらっしゃるでしょう。一方で、「そうそう、そのとおり。無いものこそが力を持っている」とうな

ずいてくださる方も、少なからずいらっしゃる気がします。

＊

今ここにないものには確かに力があるような気がします。今ここにないからこそ力を持つ。そんなふうに思われます。

芸術、宗教、科学、哲学、数学、ビジネス、文学、報道といった分野では、今ここにないものを思考したり希求することで、そのないものがあるものになるように努力するという行為が繰り返されてきたのではないのでしょうか。

まとめてみましょう。

芸術：ないものを創る・クリエーション・創作・捏造・模造・創ったものもほとんどの場合には複製という名のないものとして流通する。ところで、私たちは「作品そのもの」に出会えないのが普通です。お目にかかれるのはコピー（複製、ある意味で幻影）ばかりなのです。コピー数とかダウンロード数が多いほど、その「現物」の値段が高くなるのは皮肉でしょうか。

宗教：見えないものに祈る、すぎる・ないものを呼び寄せる・今はない状態の実現を願う・この世にないものを求める・あの世での便宜を願う。

科学：（今）ないものを発見する・（今）ないものを発明する・（知覚でき）ないものを知覚する（観測・計測）・ないものをないままで、あるいはあることとして証明する。

数学：苦手なので分から「ない」です。考えてはいないことはないのですが。数学批評（数学史ではないです）があれば、喜んで読むと思います。あるわけ、ないか——。最近、数学とか論理学は数字や言葉という表象の「ほぼほぼ抽象的な」側面を使っただけの遠隔操作だと個人的にイメージしています。

ビジネス：そもそもお金は実体がないもの。ないものを欲する・投資する・投機する・生産する・成長させる。もともとないものを欲するわけだから、満たされない、切りがない。

文学：そもそも言葉は実体がないもの。ないものを心の中で見えるようにする・ないものによって心を動かされる（フィクション）。

哲学：各言語、つまり一言語—あらゆる言語はローカルなものであり、普遍を目指すのは土台無理な話、もちろん翻訳であっても無理—という枠の中での隔靴搔痒の遠隔操作をおこないながらも、メタ指向が旺盛でオブセッションとなり、メタ思考を悲願としつつ、メタ試行を重ねているもよう。要するに、めためた。ないものについては、上記の文学とほぼ同じことが言えそう。

報道：（真実とか事実の検証という地道な作業がつきまとうはずなのにもかかわらず）声の大きさや武力やレトリックや利害関係に左右されるのが報道の「真実」であり「事実」・「ある」か「ない」は保留して、あたかも「ある」ように見せかけるレトリックに長けたデマやプロパガンダやフェイクニュースが横行しているのは古今東西に見られる「真実」であり「事実」。

以上は大雑把なメモですが、こうやって眺めてみると、ないものをめぐっての人の営みに共通するのは、ないものを想うことが、ないものを創る行為に発展するという身振りではないでしょうか。

想像が創造に変わるとか、想像を創造に変えるという言い方もできそうです。自己啓発書みたいですね。いや、みたいじゃなく、そのものという感じがします。人類の歩みは自己啓発書に見られるワンパターンと軌を一にしています。

＊

いずれにせよ、大切なことはこうした身振りの根底にあるのは想像（あるいは思考）という、人の頭の中で起きることだという気がします。

人の頭の中での出来事ですから当然のことながら「ない」のです。「ない」から自由自在にいじれるという意味で最強ではないでしょうか。実際に「ある」ものであれば、そう簡単にはいじれません。

ない、最強。
ない、恐るべし。

人は、ないものの持つ力を利用して生きている。
人は、ないものに依存（嗜癖）している。
人は、ないものなしに生きられない。

これは、「あるもの」が手に負えないから、「ないもの」を「あるもの」と錯覚して手に負えるものとして扱うという、いわば魔法として人が身につけた身振りだという気がします。

手に届かないAの代わりに、手に届くBで済ませている

大きいものの代わりに小さいもので済みます。
●の代わりに・で済みます。
長いものの代わりに短いもので済みます。
重いものの代わりに軽いもので済みます。
厚いものの代わりに薄いもので済みます。
たくさんの代わりに一つで済みます。
・・・・・・・・..... の代わりに・で済みます。
ややこしい（複雑）の代わりにすっきり（単純）で済みます。
分からないものの代わりに分かるもので済みます。
遠くにあるものの代わりに近くにあるもので済みます。
手に届かないものの代わりに手に届くもので済みます。

簡単に言うと、手に届かないAの代わりに、手に届くBで済ませているのです。Aが手に届かないもの、手に触れることができないもの、直接に見ても聞いても感じてもないものだからです。その代わりに、手が届き、手に触れることができ、直接に見たり聞いたりできるBで済みます、我慢する。

なぜこんなことをするのでしょうか？ そのほうがチョロいと錯覚できるからです。世界や森羅万象はチョロいと錯覚したいからです。

世界や森羅万象は、もどかしいけど、いらいらするけど我慢したり、便利だから有難いと思なおしたり、Aのことは忘れてたり、Aの代わりにBで済ましていることを忘れ

たり、AはBだと言い聞かせたり、AはBだと思いこんだりしているわけです。

隔靴搔痒の遠隔操作です。つまり、長靴の上から痒いところを搔いているようなもの、めっちゃうちゃ長い孫の手を使って欲しい物を移動させているみたいだという意味です。それである程度うまくいくなら、うまくいかないことは忘れて満足しようという魂胆とも言えそうです。

Aには至れない、Aを知ることはできない、Aには出会えないのであれば、BがAだと考えたがるのは人情というものでしょう。その気持ちは痛いほど分かります。これが痛感できてこそ、ヒトなのです。こんな私もヒトの端くれですから、よく分かりますとも。

＊

ややこしいですか。

先ほど使った「想像」とか「思考」のことなんです。「妄想」とか「錯覚」といっても大差ないでしょう。「頭の中でおこなうシミュレーション」といえば格好がつくかもしれませんが、どう呼ぶかなんて趣味や面子の問題だと思います。事態はいっこうに変わりません。

想像（妄想）、最強。

想像（妄想）、恐るべし。

頭の中では何でもできるという意味で最強なのです。また人は「ない」を「ある」と信じるとか思い込む、つまりその気になってしまうという意味で恐るべしなのです。

まわりを見まわしてみてください。そんな気がしませんか。

錯覚、最強。

錯覚、恐るべし。

語り得ないものについては、錯覚しなければならない。したがって騙るしかない。騙りまくるしかない――。

それにしても、「ないもの」をめぐる話をしているうちに、自分が「ないもの」を「あるもの」へと一向に創造していないことに気がつきました。想像ばかりで創造していないのです。言葉の遊びに明け暮れて、もうそうばかりして、ぜんぜんもうそうになっていないです。

やれやれ。どうやらこのまま終わりそうに感じられるこの頃です。

あとはレトリックだけの問題かもしれない

サルトルの『存在と無』の英訳を初めて見た時には拍子抜けしました。そのタイトルにです。Being and Nothingness なのです。東京、神田古本屋街にある洋書専門店で見つけて、啞然、そして呆然となりました。

Being and Nothingness ですよ。か、軽すぎです。

サルトルさまの『存在と無』さまに、そんな日本の中学生でも知っているような単語のタイトルを当てるとは何事だ。そうは思いませんでしたが、あまりにも意外で、その本をこどもまりとした店の床に落としそうになったのを覚えています。

せめて、がちラテン系の、Existance and Non-exisitance くらい存在感のある単語を並べてほしい、なんて、今でもめちゃくちゃを言いたくなります。

あれは、私が高校生で、夏休みに東京に出かけた時のことでした。

原題は L'Être et le néant - Essai d'ontologie phénoménologique だと薄々知っていましたが、フランス語はラジオとテレビの講座で勉強しているくらいで、自分の中では哲学とは結びついていませんでした。

その L'Être et le néant ですが、軽い。発音も軽いし、字面に存在感がないのです。これも拍子抜けっばいと言わざるを得ません。

*

ちなみにドイツ語訳では、Das Sein und das Nichts - Versuch einer phänomenologischen Ontologie であり、スペイン語訳では、El ser y la nada - Ensayo De Ontología Fenomenológica だそうです。

うーむ。

ドイツ語訳もあっさりしていますが、Das Sein und das Nichts と発音すると厳めしさが増します。ドイツ語を音読する際にはついつい力んでしまうのです。

スペイン語の El ser y la nada はさらさらしています。なだいなださんを思い出さずにはられません。うろ覚えなので検索してみると、ウィキペディアの解説に次のように書かれています。

「なだいなだ」はペンネームで、スペイン語の “nada y nada” (何もなくて、何もない) に由来する。

*

フランス語は軽快で、小回りがきいて、おしゃれで (※「駄洒落」の「しゃれ」も含まれます)、明快 (※言い古されたイメージです) などところが、いいです。一方、ドイツ語は、重厚で、力強く、生真面目 (※「ドン臭い」も含まれます) で、魂にぐっぐっとくるところが、いいです。フランス語は滑ります。ドイツ語は停滞します。

フランス語が「下痢」(※失礼!) なら、ドイツ語は「便秘」か「胃もたれ」です。フランス語が「軽いめまい」なら、ドイツ語は「昏倒 (こんとう)」か「失神」です (※フランス語、そしてドイツ語を母語とする方々、ごめんなさい)。

で、存在と無ですが、『存在と無』を書いた、あの小柄なフランス人は、確か血筋的にも、また思考のプロセスを踏むうえでも、ドイツ人に近いDNA (※比喻です) の持ち主でした。だから、あの人の著作はフランス語で書いてあるのですが、胃にもたれます。

*

『存在と無』 がちがち

L'Être et le néant ほわーん
Being and Nothingness で？
Das Sein und das Nichts ごちごち
El ser y la nada さらさら

＊

以上は、拙文「存在と無」から引用し加筆したものです。

ジジェクの文章（邦訳と原著の英文）は読みにくいですが、難解ではありません。難解（解きにくい）とは、私に言わせると、ないことをあるように断言したり、ほのめかすからなのです。多くの哲学学者の文章がそうです。ジジェクはないことはないとのほめかします。だから、読みにくいのですが明快であり難解ではありません。「読みにくい」については、後でまた触れます。

ないことをあると断言したりほのめかすのに最適なツールは、日本語では漢語系の言葉および漢字だと思います。

「あるとない」と「有ると無い」と「存在と無」は、同じことを言っているというのは抽象です。それぞれが違います。

「あるとない」 < 「有ると無い」 < 「存在と無」

「存在と無」は「あるとない」よりずっと厳めしい、つまり存在感があります。難解な印象を与えますし、実際に難解でもあります。なにしろ、「ないことはない」という振りをして「ないことがある」とほのめかしているのです。「いや」が「いいわ」だったりするSMプレイとそっくりなのです。

漢語系の言葉や漢字は、「ない」を「ある」ようにほのめかします。これは顔の問題だと思います。文字には顔がありますが、漢字のいかめしさはすごいです。漢語系の言葉を使うと頭が良さそうに見えるし、すごいことを言っているように見えます。

字面が強面だとも言えそうです。ないはない、ことばはことば、ことばはものではない。こういう身も蓋もない、がっかりするしかないほど明快なことを「無は無なり」「言葉は言葉である」「言葉は事物ではない」と漢語系の言い回しで言うと、とたんに「ないはある」の振りをしてしまうという事態が生じます。がちで「ある」ように思えてしまうのです。いわば顔芸です。

「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまうとか、「無」に「ある」がつまっている気がすると言えば、分かっていただけでしょうか？

あるあるあるあるある
あるあるあるあるある
あるあるあるあるある
あるあるあるあるある
あるあるあるあるある

無 = あるあるあるあるある.....

漢字や漢語には何だか「思い」がつまっているようで「重い」のです。ただし、あくまでも日本語においての話です。また私という個人においての話であることは言うまでもありません。

(日本語において難しい言葉遣いで賢く見せようとする人には、漢字こそが最適のツールとも言えそうです。というか、この芸の達人はたくさんいます。理屈ではなく、体が覚えているのでしょうか。あ、カタカナ、特に元がフランス語である外来語の顔芸もすごいです——シニフィアン、シニフィエ、ルプレザンタシオン、エクリチュールなどなど、あ、私も上で引用として使いました——、このことについてはまた別の機会に。)

漢語はないことをあると思わせる（におわせる、ほのめかす、ふりをする）日本語における仕組みではないか、なんて思ってしまいます。無い無い、無無なんていくら言っても、あるあると暗にほのめかしているのです（理性理性と感情的に叫んだり、論理論理と支離滅裂に連呼するのと似ています、しかも言葉を使いこなしていると思っている人がそれに気づいていないケースがきわめて多い）。めんどくさいですね。きわめてM的な資質だと思わざるをえません。M的というのは言葉もその生みの親である人もです。両者はMの世界に生きているのです。

言語活動はSMプレイ。※「プレイ」、ここが大切です。遊戯であり競技であり演劇なのです。⇒「*「S、M、そしてM寄りのH」より」in「ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると（その5）【引用の織物】」

【※ちなみに、「意味しているもの」と訳すこともあるシニフィアン（フランス語では

signifiant) はジジェクの原著の英文では signifier、「意味されているもの」とも訳される
シニフィエ (signifié) は signified となっていますが、親戚関係にある英仏語間では何ら
顔芸は生じないみたいです。日本語では、前者を「能記」、後者を「所記」と訳すことも
あったらしいのですが、こういう造語には厳めしさは感じられず、ははのんきだねとか
納期とか、暑気払いとか食器を連想させて何だか間が抜けて見えないこともないところ
が救いです。概して、由緒正しいガチな漢語よりも和製の造語のほうがチャーミングで
すね。概念とか理性とか意識とか演繹とか哲学とか.....。あ、これは個人の意見および
感想です。】

＊

ないものの力
ないものの持つ力

無いものの力
無いものの持てる力

存在しないものの力

無の力
無のパワー
無の魔法

存在しないものの力で人は動かされる。
人は存在しないものによって動かされる
人は存在しないものによって動く
人は存在しないもので動く

ないものを相手にする以上、それに自覚的であろうとなかろうと、レトリックを相手
にしなければならない。レトリックだけが問題になるのかもしれない。

＊

このところとくに、「真理」（「でたらめ」でもいいですけど）とか「真実」（「フェイク」
でもいいです）とか、真理っぽさ（または「でたらめっぽさ」）とか「真実らしさ」（ある
いは「フェイクらしさ」）というのは、とどのつまりはレトリックの問題ではないかとよ
く考えます。

言い方次第、書き方次第、口調次第、プレゼン次第で、本当っぽくも嘘っぽくも、意味ありげにも、深遠そうにも見えるという意味です。言葉は空っぽなのに、です。

言葉は空っぽ。言葉は「らしさ」。言葉は「っぽさ」。言葉は魔法。

人が求めるのは、詩ではなく詩のようなもの、小説ではなく小説っぽさ、哲学ではなく哲学っぽさなのです。いかにも芸術らしい、いかにも文学らしい、いかにも真実らしいではありませんか。なお、いま述べたことには大した意味はありません。内容なんてないようなのです。

*

あることないこと

「ある」と「ない」

「有る」と「無い」

あるということと、ないということ

存在と無

こういうふうには、ないことをめぐって言葉をいじることができます。レトリックで遊ぶとも言えるでしょう。

言葉を使えば何とでも言えます。もちろん、読む人や相手に乗ってくれるかどうかの問題は残ります。駄洒落やお笑いのギャグと同じです。説得力があるかないかとも言えそうです。

「人は存在しないもので動く」という、この記事のタイトルも、あれこれといじった結果なのです。

「人はあるものではないものによって動かされる」では長たらしいなあと思い、「人は「ないもの」によって動かされる」にしてみたところ、迫力に欠ける気がして、「人は「無いもの」によって動かされる」でもイマイチなので、思い切って「存在」なんていうあまり使いたくない漢語を持ってきて（「存在しない」のほうが「ない」や「無い」よりも「存在」感があるからです）、「人は存在しないものによって動かされる」でもまだるっこいので、「人は存在しないもので動く」と縮めたわけです。

きわめて地道で事務的というか、レトリックに翻弄されている、いや、もてあそばれているといいたいましょうか。めちゃくちゃかまってちゃんて真性かつ神聖ドMな言葉を前にして、人は言葉の下僕になるしかないのです（Mと本気で付き合うためにはMの世界に浸らなければならないという意味です）。

*

以上、本記事は、ないものを相手にすると、たとえばこうなるという例でした。ないものをめぐって、たとえば 21224 文字の文章が書けるのです。

#小説 # 読書 # 映画 # 言葉 # 日本語 # 大和言葉 # 漢語 # 漢字# ヒッチコック
ジャック・ラカン # レトリック # ジジェク # サキ# パトリシア・ハイスミス

こんなの私ではない

＊

こんなの私ではない

星野廉

2022年7月23日 17:14

名前は最小最短最軽の引用です。なかでも固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。

(拙文「固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。」より)

固有名詞の中でも人名や作品名にそなわったというか、名前が放つパワーと光はすごいものです。その人物や作品への愛や敬意や親しみが強いほど、人はその名前を大切にすし、その名前を唱えるだけで力が湧いたり癒やされたりするのではないのでしょうか。

What's in a name? たかが名前だなんて侮れません。犬や猫やムササビに向かって名前を唱えても、通じないにしても、ヒトのひとり相撲だなんて身も蓋もないことを言うべきではないでしょう。

同姓同名があったり、同じ文字列のタイトルが「使用中」であったとしても、人名や作品名、とりわけ有名人や歴史上の人物の名前や、有名な作品のタイトルであれば、「たったひとり」感と「たったひとつ」感はきわめて強いだろうと考えられます。

＊

もはやこの世にいない人物、遠く離れていてなかなか会えなかつたり目にすることができない人物であっても、その名前を唱えるとか文字にするという形で引用すれば、あるいはその名前を見聞きすれば、ふとあたかもその人物がここにいるような感じがするものです。

一方で、絵画や楽曲や文学作品の場合には、複製や再生や再演でしか鑑賞できないにしても、その作品名を唱えたり、目にしたり耳にすることで、その作品の一部や断片（場合によっては全体像）がよみがえってくるにちがいません。

その意味で、固有名詞は最強で、最小最短最軽の引用だと言わざるをえません。これはヒトにしか体験できない魔法だと言っても過言ではないでしょう。

＊

私は自分の過去の記事にツッコミを入れながら、新しい記事を書くという癖があります（論理的思考が苦手な私は矛盾だらけの文章を書いているからです）。また自己引用をしてパッチワークを作ることも頻繁にやっています（横着なのです）。さらに言いますと、そっくりそのまま再投稿することも珍しくはないのです（常時ネタ切れで金太郎飴状態なのです）。お恥ずかしい限りです。

というわけで、性懲りもなく、今回も以前の記事にツッコミを入れようと思います。ある気づきを得たからです。

＊

固有名詞が最強で最小最短最軽の引用だなんて、嘘だとは言いませんが、言いすぎではないでしょうか。

ある例を挙げます。

これが、フランツ・カフカなんだそうです。アラビア文字らしいのです。「らしい」なんて言うのは、私が検索して引用した（要するにコピペした）だけだからなのですが、かろうじてKに見える部分が識別できるくらいで、これがカフカだなんて予備知識がなければ分かるはずがありません。

弗朗茨 ũ 卡夫卡

中国語だそうです。恥ずかしい話ですが、私は可不可だと思いこんでいました。お察しのとおり、「可もなく不可もなく」からの類推です。

К а ф к а, Ф р а н ц

これはロシアで用いられているアルファベットです。

タイ語だそうです。

こういうのは、ウィキペディアで検索できます。引用したというか「うつした」のです。

ちなみに、ウィキペディアの解説の日本語バージョンでは、

フランツ・カフカ (Franz Kafka, ときにチェコ語: Frantiek Kafka, 1883年7月3日 - 1924年6月3日) は、現在のチェコ出身のドイツ語作家。

とあります。恥ずかしい話ですが、チェコ語が出てくるとは、思いもしませんでした。生い立ちを考えれば、なるほどと唸るしかありませんけど.....。

*

さて、上で挙げた複数の表記ですが——フランツ・カフカさんには連絡が取れそうもないので確認はできないので、想像するだけですけど——、「こんなの、私ではない」とおっしゃる気がします。

もちろん、

フランツ・カフカ、ふらんつ・かふか、Furantsu Kafuka

もです。「えっ！ 三種類もあるの？ スゲー！」なんて感動なさるかもしれません。

みなさん、ご自分の名前で想像してみてください。日本語とは異なる文字が使われて

いる言語で、あなたのお名前が書かれていたとします。それをいきなり、予備知識なしに目の前に出されたとしたら、どんな気持ちがするでしょう？

何ですか、これ？ えっ！ ○○語で私の名前を書くところなのですか？

(一瞬絶句)

こんなの私じゃないです。

こんな感じではないでしょうか。私なら、そんなリアクションをしそうです。

*

そう見えないのです。自分なのに自分には見えない。正確に言えば、自分の分身だと言ってもいい自分の名前には見えない。

また訛りやアクセントの違いがありますから、発音されたとしても、そう聞こえないのです。つまり、自分なのに、正確には自分を指す音声なのに、自分にはそう聞こえない。

*

Franz Kafka、Frantiek Kafka、К а ф к а、Ф р а н ц、弗朗茨・卡夫卡、 、フランツ・カフカ、

固有名詞は最強で最小最短最軽の引用である。

そうは言えるかもしれませんが、引用は複製であると同時に置き換えであり、翻訳でもありうることを忘れてはならないようです。言語や文字や発音の違いを失念している、もっと厳しく言えば、あっさり切り捨てているからです。これは抽象に他なりません。「うつす」行為である引用は、同一の複製という意味での複製だとは限らないのです。

簡単には「うつせないもの」や「うつしてはならないもの」もあるのです。おそらく「うつせるもの」よりずっと大切なものだという気がします。

*

人類の歴史は「うつる・うつす」に満ちています。

うつる、写る、映る、移る、遷る、伝染る、流行る、孫引る、引用る、模倣る、写本る、写経る、印刷る、翻訳る、映画る、写真る、複製る、放送る、網路る、偽造る、剽窃る、盗作る、広告る、宣伝る、布教る、革命る――。

こうしたものは、ぜんぶ、うつるんです。ですから、ぜんぶ「うつる」と読んでください。よくご覧ください。人類の歴史そのものでもあります。

(拙文「引用の織物」より)

いずれにせよ、名前は大切です。とりわけ、愛する人の名前と自分の名前は、自分の生まれ育った土地の発音と文字で、愛でたいものですね。あ、そうそう、地名つまり土地の名前もです。

世界を見まわすと、言葉と土地が奪われたり、言葉と土地が失われたり、言葉と土地が変えられたりする例には事欠きません。これまでにいくつの言語や文字が、いくつの故郷が失われたかを考えたり想像するだけで、悲しい気持ちになります。恐ろしくもあります。いまじっさいに世界のあちこちで起きていることも含めての話です。

「うつる・うつす」の裏には、恐ろしい現実があります。それを失念してはならないと思ひあたりました。迂闊でした。

簡単には「うつせないもの」や「うつしてはならないもの」もあるのです。おそらく「うつせるもの」よりずっと大切なものだという気がします。

気づきを得た私は、反省を込めてこの記事を書きました。

「うつせないもの」「うつしてはならないもの」を武力でうつそうとしている人(たち)がいますね。いま、まさに。言語の問題の深さと根深さに途方に暮れているわけにはまいりません。

平和を祈ります。

#文字 # 音 # 名前# 固有名詞 # 人名 # 地名 # タイトル # 言語 # 引用 # 翻訳

引用の織物

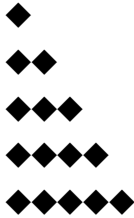
＊

引用の織物

星野廉

2022年7月22日 07:54

目次



引用

(夏目漱石の『吾輩は猫である』より引用)

の

(芥川龍之介の『杜子春』より引用)

織

(紫式部の『源氏物語』より引用)

物

(中原中也の『感情喪失時代』より引用)



どこまでが引用でどこまでがオリジナルなのでしょう。

どこまでが借り物でどこまでが自分の物なのでしょう。

どこまでが借り物でどこまでが仮の物なのでしょう。

どこまでがコピー（複製）でどこまでがオリジナルなのでしょう。
どこまでがコピー（宣伝文句）でどこまでが詩の文句なのでしょう。

どこまでが詩でどこまでがデタラメなのでしょう。
どこまでがデタラメでどこまでがおふざけなのでしょう。
どこまでが本気でどこまでが正気でどこまでが狂気なのでしょう。

どこまでが本物でどこまでが偽物なのでしょう。
どこまでが偽物でどこまでが似たものなのでしょう。
どこまでが偽物でどこまでが似せたものなのでしょう。
どこまでが偽物でどこまでが複製なのでしょう。
どこまでが本当でどこまでが嘘なのでしょう。

引用の元をたどるとそれもまた引用だったりして。
借り物の元をたどるとそれもまた借り物だったりして。
コピーの元をたどるとそれもまたコピーだったりして。

コピーの中にバグや変異やズレが含まれていたりして。
そっくりなのに中身が空だったりして。

起源神話の根強さ。
オリジナル神話のたくましさ。
本物神話のしつこさ。



あなたが持っているある本を開いてみるとします。

ある一文があります。印刷物であるその本はどこか他にもあるはずで。

あなたが見ている一文は、どこか他にある本の一文と同じはずで。あなたがその一文をPCなりスマホなりで書き写したとします。

その一文を引用として明記するのではなく、自分の記事の中で自分の創作として公表したとします。

それは盗作でしょうか。著作権に触れる行為として責められるべきものなのでしょうか。

その一文の長さ、つまりデータの量の問題でしょうか。短い一文ならOK、長い一文ならたぶん問題かも、二文ならアウト——その程度の話なのではないでしょうか。

あるいは、少し手を加えて変えればそれで問題なしと考えていいのでしょうか。誰でも書きそうなものなら大丈夫だという程度の認識でいいのでしょうか。

それとも、単に良心の問題なのではないでしょうか。ばれたら、偶然の一致じゃないですか、とぼければいいのでしょうか。

パロディですよ、オマージュです、と言って笑って済ませばいい問題なのではないでしょうか。

私には分かりません。

文学だけの問題ではありませんね。音楽、アート、科学技術、ビジネス、学問全般において活動する際にも避けられない問題のようです。

いっしょに考えてみませんか。

○

みなさんは、俳句を詠む場合、まずどうなさいますか？　今まで俳句を詠んだことのないヒトが、俳句を詠もうとするとき、5・7・5という規則だけをあたまに入れて、いきなり、森羅万象に目を向けるなんてことをするのでしょうか？　そのまえに、既存の俳句を読むだろうと思います。

*俳句は、いきなり詠むのではなく、まず読む。

のです。

和歌であっても、ヨーロッパの言語の定型詩でも、状況は同じだと思います。さらに言うなら、韻文だけでなく散文でも同じことが言えるような気がします。たとえば、基本的に何を書いてもいい、

*小説は、小説を読んでから書ける（＝掛ける＝賭ける）。

のです。話を一気に飛躍させますが、ヒトの赤ちゃんは、いきなり言葉をしゃべりません。

*赤ん坊は、話し言葉を聞いてから話すようになる。

のです。

(拙文「つくる (4)」より引用)

○

言葉はみんなのもの。
誰もが生まれた時に、既にあったもの。

言葉は真似るもの。
誰もがまわりの人の言葉を真似て学んだ。
まねる、と、まねぶ、と、まなぶは、きょうだいだったらしい。

自分が口にする言葉は既に誰かが言ったもの。
自分が書いている言葉は既にどこかに書いてある。

言葉は借り物。
既にある言葉を借りて使わせてもらう。
借り物は返さなきゃならない。
次の世代のために残すもの。

だから、大切に使おう。
言葉はみんなのもの。

誰もが生まれた時に、既にあったもの。

(※お断りしておきますが、著作権を否定しているわけではありません。むしろ著作権を支持しています。ただし著作権は制度であり、著作権という考えが出て来たのは、言葉の長い歴史の中ではほんの最近の出来事なのです。これを機に著作権についてもっと勉強しようと思います。)

○

レプリカ、レプリカ、レプリカ

上の三つのうち、真ん中の「力」は漢字の「ちから・リキ」なんですけど、こんなの分かりませんよね。

アンドロイド、アンドロイド、アンドロイド

上の三つのうち、最初の「口」は漢字の「くち・コウ」なんですけど、これもそっくり。違っているなんて分かりませんよね。

でも、デジタル化された情報としては別物らしいのです。アナログな体感重視派としては、もう泣きそうになりながらも「同じだ」と言いたいです。ちなみに、今使った「アナログ」ではいたずらはしていませんよ。

一見そっくりなコピー（あるいはコピーもどき）の中に微小な変異が潜んでいても分からないみたいですね。そう思うと怖いんです。

ところで、カフカをカフカと呼んでしまうのは、おそらく学習の成果であって、そう読み間違えないほうが尋常ではないと思われます。

○

私は散文的な人間で詩歌は作れないのですが、日本の伝統的な定型詩には興味と敬意をいただいています。いまも多くの詠み手がいるのは短歌や俳句ですね。

伝統的な定型詩には先行する膨大な数の作品があります。そうした先人のあるいは先輩の作品を読んで自分でも詠む。「読む」が「詠む」につながる。考えてみるとすごい話じゃありませんか。自分が大きな伝統の連鎖につながる、つらなる、つまりその一部になるのですから。

もっとも、短い定型詩ですから、同一の、あるいはほぼ同じ作品が生まれるという事態も頻繁に起こるみたいですね。私はそうしたジャンルに身を置いて活動していないので、何とも言えませんが.....。想像すると怖いです。

(拙文「言葉を誘い出すもの <言葉は魔法・023 >」より引用)



世界は似たものに満ちている。
世界は顔で満ちあふれている。

似ているはいたるところにある。
同じや同一はない。

似ているは印象。
同じと同一は検証しなければならない。それも機材を用いて科学的に精密に。

似ているが人にとっての体感できる現実。
同じと同一は人にとっては抽象でしかない。



剽窃
(■■■の『■■■』より引用)

から
(詠み人知らず)

遠く
(author unknown)

離れて
(anonymous)

※「剽窃(ひょうせつ)」はあまり使われない言葉ですね。他人の作品やアイデアを盗作して発表する行為のことです。引用やパロディやオマージュが剽窃と見なされることがよくあります。



「Maji で Hyosestu する 5 秒前」・「世界で一つだけの剽窃」・「剽窃 3 兄弟」・「剽窃は突然に」・「CAN YOU 剽窃？」・「剽窃は勝つ」・「世界中の誰よりきっと剽窃」・「硝子の剽窃」・「Addicted To 剽窃」・「ロマンスの剽窃さま」・「剽窃されるより剽窃したい」・「剽窃するボンボコリン」・「ヒョウセツノムコウ」・「剽窃するフォーチュンくっきー！」・「ずるイ剽窃」

3 窃・剽窃の不時着・あつまれ剽窃の森・ヒョウセツノマスク・オンライン剽窃・剽窃の刃・GOTO ひょうせつ・ひょうせつちゃん・剽窃などあろうはずがありません・ぼーっと剽窃してんじゃねーよ！・剽窃論法・ひょうせつずラブ・剽窃ファースト・剽窃の 2 回生・げす剽窃・安心して下さい、剽窃してますよ。・剽窃ウォッチ・ヒョウセツミクス・特定剽窃保護法・ブラック剽窃・手ぶらで剽窃させるわけにはいかない・窃活・イク窃・草食系剽窃・名ばかり剽窃・ゲリラ剽窃・後期剽窃者・消えた剽窃・剽窃王子・剽トレ・剽窃があるさ

『ライ麦畑で剽窃して』・『ボクはイエローでホワイトで、ちょっと剽窃』・『剽窃写真集』・『超凶解剽窃』・『剽窃少年の事件簿』・『剽窃宣言』・『真夏の夜の剽窃』・『剽窃する勇氣』・『剽窃を 10 倍楽しくする方法』・『剽窃と瓢箪の見分け方』・『盗作と倒錯と創作の見分け方』・『剽窃の時』・『金持ち剽窃さん貧乏剽窃さん』・『剽窃のかんづめ』・『だからあなたも剽窃して』・『こんなに剽窃していいのかしら』・『剽窃タワー オカンとオイラと、時々、ゴットン』・『ノルウェイの剽窃』・『剽窃記念日』・『君たちはどう剽窃するか』・『きみの剽窃をたべたい』・『誰のために剽窃するのか』・『世界の中心で、剽窃を叫ぶ』・『チーズはどこで剽窃中なのか』・『剽窃ちゃん』・『パリー・ホッターと剽窃の部屋』・『剽窃の壁』・『老人と剽窃』・『剽窃失格』



小説から遠く離れて
ベトナムから遠く離れて
アメリカから遠く離れて
テキストから遠く離れて
フタバから遠く離れて
双葉から遠く離れて
ぼくから遠く離れて
君から遠くはなれて

シブヤから遠く離れて
あの戦争から遠く離れて
彫刻から遠く離れて
起源から遠く離れて
愛から遠く離れて
ミヤコから遠く離れて、みる
江國香織から遠く離れて
歓声から遠く離れて
リバプールから遠く離れて
カフカから遠く離れて
シナリオから遠く離れて
ルイユから遠くはなれて
“ふつう” から遠くはなれて

○

似たものは目まいを誘います。
くらくらしてきました。

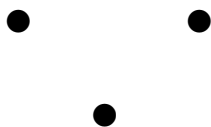
一方で適度の似たものは安心感をもたらすようです。
というか、人は常に適度に似たものに囲まれているように思えます。

何にも似ていないものに囲まれたとしたら、人はメンタルをやられる気がします。

人は似たものに囲まれている。
それが常態なのかもしれません。

持論ですが、適度に似たものとは顔です。比喩でもあり比喩でもありません。
人はいたるところに顔を見ます。

人面○○どころではなく、左右の目と口に当たる三点があると、もうそれで顔を認めるのに十分なのだそうです。こういう空想は子どものほうが得意だといわれています。



世界は顔に満ち満ちているのです。

ときには不気味な顔も見ますが、基本的に人は顔に囲まれていることで安心します。

人にとって最初の顔は、やはり「母親」（括弧付きです）なのかもしれません。

○

真、偽、本、顔、素顔、真性、本性、真名、真字、本名、偽名。

（拙文『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』より引用）

○

裏千家と表千家。どんな道、つまり芸道にも派閥が付きものです。流派、主流派と非主流派、正統と異端、多数派と少数派、保守と革新、本家と分家、正と邪、主と従、下克上、復古……。

西ローマ帝国と東ローマ帝国、西の大関と東の大関、北軍と南軍、北酒場と南酒場、右大臣と左大臣、右往左往、左前と右前、上り電車と下り電車、上座と下座と土下座、うなぎ登りつつるべ落とし。

パンタレイ。

京都○川と大阪西○と東京○川。木村屋、きむらや、キムラヤ。柔道と judo、俳句と haiku、野球とベースボールとクリケットとソフトボールとカラーボール野球と野球拳……。

パンタレイ。

（拙文「三つ葉の日、三ツ矢サイダーの日、シルクロードの日、京都裏千家利休忌」より引用）

○

*連想ゲーム、一人プレーンストーミング（※今後の記事のためのメモ）

うつす、写す、移す、映す、遷す、撮す、伝染す
うつる、写る、移る、映る、遷る、撮る、伝染る

DNA、親子、きょうだい、はらから、親族、細胞、生殖、性交、分裂、繁殖、双生
児、バニシング・ツイン、多胎児

印刷、なぞる

ならう、倣う、倣う
まねる、真似る

まなぶ、まねぶ、学ぶ、真似ぶ

*

鏡、カメラ、水面、反射、幻灯、影、映画、幻灯、罅・エコー、反響
鏡像、ネガ、ポジ、縮小、拡大

はなす、話す、放す、離す
うける、受ける、承ける、請ける
つたえる、伝える、つたわる、伝わる

糸電話、電報、テレックス、電信、無線、電話、放送、インターネット、網、電網
感染、伝染、感染、転写、複写、アクシデント、変異

印刷術、複製文化、複写機、コピーペースト、コピーペ
デジタル化、視覚化、映像化、映画化、舞台化、言語化

真似、複製、レプリカ、パプリカ、フーリン、ふーせん、言葉遊び、比喩、暗喩、隱
喩、直喩、だじゃれ、オヤジギャグ、偽物、贋作、盗作、剽窃、オマージュ、本歌取り、
パロディ、伝承、伝統文化、師弟、本家・分家、本流・亜流、正統・異端、著作権侵害、
クリエイティブ・コモンズ、ミメーシス、ミーム、パクリ、もじり、風刺、形態模写、文
体模写、物真似、そっくりのど自慢、そっくりショー、擬態

印刷、謄写版、印鑑、シャチハタ、ハンコ、芋ハンコ、消しゴムハンコ

同調、共鳴、共振、シンクロ、同情、思いやり、感情移入、なりきり、同意、賛成、賛
同、共感
想像、創造、捏造、妄想

変換、換金、転換、交換、転移、変異、変移、変位、代理、代議制、ルプレザンタシオン、上演、代行、代理店、エージェント、表象、記号、信号、象徴

パラレルワールド、反世界、反宇宙、反物質、反粒子、陰陽、陽子、中性子、イオン、プラスマイナス、対称・非対称、VR、絵空事

再生、再現、リピート、変奏、アレンジ、編曲
仮装、女装、男装、異装、ユニホーム、お仕着せ、制服

インターネット・ミーム、イミテーション、イミテーションゴールド、まがいもの、章句品サンプル、フェイクファー、フェイクニュース、人工肉、アンドロイド、マネキン、ハウスマヌカン、分身、ゴーストライター、影武者、そっくりさん、こっくりさん、ひょっこりさん

多重人格、二重人格、分身

RT、リレー、リピート、リプロダクション、リストア、リフォーム、リサイクル、レコード、ルプレザンタシオン、レプリカ、リプレー、リプリー、太陽がいっぱい、パトリア・ハイスミス、分身

引用、パッチワーク、ごった煮、コラージュ、ブリコラージュ
フュージョン、異化、アドリブ、ジャズ、パスティーシュ

インスピレーション・靈感、憑依、オートマティスム（自動筆記）、神託、イタコ
メタフィクション、小説の小説、演劇の演劇、作中劇、不条理演劇、シュール、ドタバタ

ジャズ、アドリブ、インプロヴィゼーション、即興、でまかせ、おまじない、ナンセンス、ノンセンス



今回は、そのうちの特に「そっくりなもの」について、前半で、ヒトや他の生き物の顔を見分けることを例にとって、あれこれと書いてみました。変な質問も、いくつかしました。「そっくりである」と知覚することの不思議さと、そのメカニズムの複雑さを、体感的に感じとっていただければ、「記号」というトリトメのないものを「感じとる」のに、とても役立つからです。たった今、「感じとる」という言葉を使い、「理解する」と書かなかったのは、トリトメのないものを、頭で理解しようとするのは、ある種の矛盾をはらんでいるからです。

もしも、あなたのまわりに、外見がそっくりな人たちが、いっぱいいたとします。それは不気味ですよね。でも、外見がそっくりなものたちが、いっぱいあったとしても、別に不気味ではありませんね。スーパーで売られるために陳列されている製品が、「そっくりなものたち」の典型例です。「そっくりなヒトの羅列」＝「不気味」と「そっくりな商品の羅列」＝「当たり前」との差は、何でしょう？

このように、自分が当たり前だと思っていることに、揺さぶりをかけたり、突拍子もない質問で軽いめまいを覚える。そのさいには、脳を使って考えてみるだけでなく、自分の知覚を総動員して「体で考えてみる」。そうしたことが、現在の人たちが忘れかけている、大切な「知覚する」といういとなみの1つだと思うのです。

世界とは、頭による理解可能とは縁遠い「何か」なのです。その「何か」が「分かる」ことを苦渋の果てに放棄し、「分からない」or「トリトメのなさ」を体感する。そうした行為の対象となるべきものが、たとえば「そっくり」なのだと思います。個人的な意見ですが、「そっくり」はきわめて現代的な状態だと思います。

コピー＝複製がいとも簡単になったのは、ヒトの歴史という尺度から見れば、ごく最近の出来事だからです。これほど「そっくり」に囲まれた状況は、ヒトの歴史の中ではなかったと考えられます。安易に「記号」という言葉で「そっくり」を理解した気持ちになったり、お茶を濁したくありません。

(拙文「そっくり」 in 「そっくりという、まぼろし」より引用)

○

そっくりがそっくりをそっくりな場所でそっくりなやり方で売る、そしてそっくりなお客さんたちがそっくりなやり方で買う。そして、自分もまたそっくり化していることにふと気づき、嘔然となる。

おそらくこれが資本主義なのでしょう。というか、資本主義の顔であり表情であり身振りなのでしょう。

(拙文「そっくりという、まぼろし*」より引用)



○

言葉、話し言葉

口承文学

口伝え

伝承

うける、受ける、承ける、請ける

つたえる、伝える、つたわる、伝わる

○

言葉、文字

聖書の写本

経典の写本

源氏物語の写本

うつす、写す、移す、映す、遷す、撮す、伝染す

うつる、写る、移る、映る、遷る、撮る、伝染る

○

* 「言い換える＝置き換える＝伝える＝知らせる＝言葉にする＝何かの代わりに何か以外のものを用いる」

という意味での

* 「翻訳」

は、

* 不可能

だというふうに傾いています。これを「翻訳」すると、

*異言語間の翻訳は大いなる妥協でしかない。

とか、

*個人レベルで、ヒトとヒトとは分かり合えない。

となります（※「翻訳」は不可能だという意味のことを書いた後に、「翻訳」をやっている。これが、「でまかせしゅぎ」です。どうぞ、よろしく）。



ところで、

*世界一のベストセラーは、バイブル＝聖書だ。

と聞いたことがあります。実際、あれほど多数の言語に翻訳された書物はないのではないのでしょうか。しかも、

*何語で書かれて＝訳されていても聖典だ。

ということらしいのです。

*聖典としての翻訳を絶対に認めないクルアーン（コーラン）

とは、考え方が対照的ですね。

（拙文「翻訳の可能性と不可能性」より引用）

*

翻訳と原著は別物だというのは、突拍子もないたとえかもしれませんが、夏目漱石の『我輩は猫である』の東北弁訳と関西弁訳を想像してみると分かりやすいのではないのでしょうか。そんな「翻訳」が二つあったとして、原文というものがあり、その翻訳は原文と「等価なもの」であるはずだ、と頭で理解していても、原文を含めた三者が同じものであるとは日本語の語感が許さないのではないのでしょうか。

語感とは体感にきわめて近く、身体的なものだと思います。理屈や知識でねじ伏せるわけにはいかないという意味です。

(拙文「恐るべき敬体小説（言葉は魔法・第3回）」から引用)



似たもの
そっくりなもの
同じもの
ほぼ同じもの
同一のもの
等価なもの
等しいもの

あなたの持っている消しゴムはどこかにある消しゴムと同じでもそれらは同一ではない。同一のものは世界に一つしかないはずです。分子とか原子レベルの話でしょう。

むしろ、それはそっくりなのです。
そっくりなところがそっくりなのです。
激似なのです。

人は似ているとそっくりしか認識できません。印象とも言います。
その意味で、同じ、同一、等価、等しいは個人のレベルにおいては抽象なのかもしれません。機器をもちいない限り、検証不能だからです。

さて、

* 「似ている」が、あちこちにあふれている。

一方で、

* 「同一である」ということは、きわめて、まれな現象である。

と言えそうです。

なぜなら、「同一であるものは、原則として＝基本的に、ある特定の1ヶ所だけにしか存在し得ない」という屁理屈が理由であるだけでなく、「同一である」ことを、ヒトが知覚したり、知覚した結果を認識し、断言するに至るまでには、かなりの時間＝間（＝ま・あわい）と隔たり＝距離が必要だからです。

*ヒトにとって、「似ている」は「近しい＝親しい」現象であるが、「同一である」は「ほぼ知覚不能」な現象である。

と言っても言いすぎではないような気がします。

（拙文「あらわれる・あらわす（8）」より引用）

○

うつす、写す、移す、映す、遷す、撮す、伝染す
うつる、写る、移る、映る、遷る、撮る、伝染る

○

初めて目にする影、初めて見る鏡、初めて覗くカメラのファインダー、初めて見る写真——。思いつくままに並べたフレーズですが、どれもが「うつる」と関係あります。影に映る、鏡に映る、ファインダー越しの眼に映る、写真に写る。

こうした行為や身振りを個人レベルで初めて体験するさまを想像するとわくわくどころか、ぞくぞくしてきませんか？ 自分の記憶の中の、そうした場面を思いだしてみてください。と言われても、なかなか覚えていませんよね。

*

人類のレベルで空想してみましょう。

初めて目にする影、初めて見る鏡、初めて覗くカメラのファインダー、初めて見る写真。影に映る、鏡に映る、ファインダー越しの眼に映る、写真に写る。

こうした身振りや行為を人類というレベルで初めて体験したさまを想像すると、これまた気が遠くなりそうです。不思議だったでしょうね。たまげたにちがいありません。

初めての鏡なんて、雨のあとの水たまりとか川とか湖の水面だったのではないのでしょうか。水面に映った自分の姿を覗きこんだナルキッソスの話を思い出します。エコー（エコー）の話もありましたね。こだまは、木霊、木魂、冪ですが、これも音声が遠くへとうつるわけです。

「うつる」には距離がともないます。その距離は空間的であったり時間的なものでしょう。そう考えると「うつる」は、「つたわる」「つたえる」に近そうですね。

＊

「うつる」の漢字をまじえた表記には自信がありません。辞書や用字辞典で確かめながら書きますが、例文が同じだったりして、自分の書きたい文でどちらをつかったらいいのか、迷うことがよくあります。とくに「映る」と「写る」は迷います。

「にやけた顔で写っている」「裏のページの絵が写って読みにくい」「鏡に映った顔」「障子に映る人影」なんて複数の辞書やネット辞書でも見かける例です。孫引きというやつですね。辞書の例文や語義は、伝染んです。

きょとんとなさっている、お若いあなた、「うつるんです」と読んでください。とってもシュールで味わいのある漫画です。

うつる、写る、映る、移る、遷る、伝染る、流行る、孫引る、引用る、模倣る、写本る、写経る、印刷る、翻訳る、映画る、写真る、複製る、放送る、網路る、偽造る、剽窃る、盗作る、広告る、宣伝る、布教る、革命る――。

こうしたものは、ぜんぶ、うつるんです。ですから、ぜんぶ「うつる」と読んでください。よくご覧ください。人類の歴史そのものでもあります。

(拙文「【夜話】ぜんぶ「うつる」と読んでください」より引用)

○

今思い出しましたが、ジェイムズ・M・ケイン作の『郵便配達はいつもベルを二度鳴らす』(または『郵便配達はベルを二度鳴らす』)という邦訳が、田中西二郎訳、田中小実昌訳、中田耕治訳、小鷹信光訳の四種類も楽しめた(つまり本屋に並んでいた)時期がありました。こっちは原著なしで、日本語訳だけを四種類読み比べましたが、わくわくするような体験でした。若くなければできない冒険だと今になって思います。そう言えば、J・D・サリンジャーの『ナイン・ストーリーズ』(または『九つの物語』)もいくつかの訳本がありましたね。私は野崎孝による邦訳しか読んだことはありませんが。

『失われた時を求めて』の井上究一郎訳を私が好きなのは、律儀に訳してあるからです。つまり、センテンスが長くてとても読みにくいのです。ああいうのを難しいとは私は言いません。とにかく読みにくいのです。でも、あれよあれよという感じで気持ち良く読み進めることができました(難しいものはあれよあれよとは読めません、私の場合には)。「できました」と過去形なのが残念です。寂しいです。今は無理ですね。

井上訳を原文に忠実な訳とは言いません。フランス語がろくにできないのに、偉そうな言い方をしてごめんなさい。あれは忠実と言うよりも、律儀な訳なのです。そもそも外国語の作品を原文に忠実に訳すなんてあり得るのでしょうか。はなはだ疑問です。

直訳という言葉思い出しました。そればかりか、意識、逐語訳、逐次訳、大意、抄訳、完訳、改訳、重訳、超訳、名訳、迷訳、誤訳というぐあいに、次々とあたまたに浮かびます。あと、翻案というものもありますね。翻案を広義の翻訳と見なすと、パスティーシュやオマージュや文体模写まで広義の翻訳だと言いたい気分になります。

(拙文「いやだ、ズルしちゃ駄目よという感じでしょうか」より引用)

○

うつす、写す、移す、映す、遷す、撮す、伝染す
うつる、写る、移る、映る、遷る、撮る、伝染る



*ヒトがつくるものは、ヒトに似ている。

と前回に書きましたが、今回も、前回に引き続き、

*つくる

の前の段階である、

*似ている

に徹底的にこだわってみたいです。

これを片付けないと、「つくる」に話を移せない気がするのです。「似ている」について考えるさいには、自分自身の実体験や、自分が体感できる経験を材料にするのが、いちばん分かりやすいと思います。何と言っても、世の中でもっとも関心があるのは自分自身であり、もっとも信頼できるのは、自分自身の感性や感覚ではないでしょうか。

(拙文「つくる (2)」より引用)

*

似ているもの

そっくりなもの

同じだったり同一かは保留しての話

そっくりなものはたいてい人間がつくり出したものではないでしょうか。

そっくりな点がそっくりなのです。

それくらいそっくり。

人には同じに見える、そっくりなものには自然物にはない精巧さが備わっています。

同じものなんて、人がつくり出さないかぎりないのではないのでしょうか。

人がつくるそっくりなものには、どこか人に似たところがあります。部分的に似ているも含めて。

人に似ているのは、むしろ人が無意識に似せているからかもしれません。

自分や自分の仲間に似ているから安心するのです。
人は不気味なものはつくりません。不気味に似たものはつくりますよ。でも、何にも似ていない不気味なものはつくりません。

テレビは、「記号」と非常に相性がいいのです。おととい行った電気製品の量販店は、「記号」に満ち満ちていました。商品とか製品は、大量生産されて、そっくりなものがたくさん存在しますね。「記号」というもののイメージは、まさにそれなんです。

*そっくりなものが、多量に並んでいる。そっくりなものが、世界各地に散らばって存在している――。

そういうイメージのものが、「記号」なんです。テレビの売り場なんて、そっくりな（※「同じ」や「同一」とは違います）映像がずらりと並んでいるのですから、それこそ「ほんまもん」の記号だらけなんですよ。はい。

>すべてのものは、「記号」という幻（まぼろし）を発している

今、コピペしたのは、さきほど上で書いた文です。

*幻=まぼろし=間ぼろし=間滅し=魔ぼろし=魔滅し

(拙文「人面管から人面壁へ」より引用)

*

ところで、こうやって自己引用をしていると、私は以前からいつも同じことを言っているような気がしてなりません。こうやって記事を書いていると既視感の洪水に襲われる気分になります。

やっていることが同じなんです。同じことを繰り返しているのです。
そっくりなのです。そっくりな点がそっくりなのです。
金太郎飴とそっくり。

進歩がないとしか考えられません。ギネスには「進歩がない」という項目はないので

しょうか。

○

この note 内で投稿する記事は、すべて「随時更新中」にしてあります。

「随時更新中」とは、いったん投稿した記事に随時加筆していくという意味です。いったん投稿したブログ記事をいじりまくる癖のある私にとって苦肉の策なのです。

そんなわけで、記事の内容が大きく変わる可能性があります。現在ここで新規に投稿している記事もまた、ほとんどが過去に投稿したもので、何度もなんども加筆したり書き直して現在の形に至っています。

私にとって新規投稿はないと言えそうです。あるのは再投稿ばかりなのですが、再投稿をするたびにズレが生じるという言い方が正確かもしれません（写す移すたびに何らかのズレが生じるという意味では写本と似ています）。

したがって記事間の重複が多く、過去の記事のパッチワーク（いわば自己引用の織物です）、あるいはコラージュみたいな形の記事が目立ちますが、すべては「随時更新中」だからなのです。ご理解いただければ幸いです。

（拙文「サイトマップ・星野廉@随時更新中」より引用）

○

*

始まりと終りは捏造されたもの。つねに揺れうごく、移り変わるがあるだけ。

いま、ここを大切にしたい。移り変わる自分を尊重したい。

未完成を恐れない。断片でいい。重複を恐れない。冗漫でいい。矛盾を恐れない。

*

固定することなく揺らぐ。決定稿などない。暫定を決定と呼ぶのは気休め。

印刷物は固定を指向する。一方でネット上の文章は常時改変と改編にさらされている。これを自由と考えよう。印刷の時代、つまり固定の時代がそこそこ長く続いたようだが、その前には写本と口承による時代がそこそこよりはずっと長く続いていたことを思い出そう。

写本や写経や口承の時代は必ずしも固定が優勢であったわけではなく、つねに改変と改編があった。作者やオリジナルや本物という観念がまだなかった時代。写し間違い言い間違いや意識的な改変と改編と新たな創作がおそらく罪の意識もなくおこなわれていた時代。

間違いを恐れず、未完成を遠慮することなく、断片であってかまわないから、随時更新中の自分を尊重しよう。

(拙文「随時更新中・星野廉@随時更新中」より引用)

#言葉# 翻訳# 著作権# パロディ# 引用# オマージュ# 蓮實重彦# 複製# 宮川淳

えんえんと迂回しつづけるしかない

＊

えんえんと迂回しつづけるしかない

星野廉

2022年7月19日 07:59

あなたと口にするとき、あなたを想うとき、あなたは二人います。かなたにいるあなた、たとえそばにいても自分のものには決してならないあなた、つまり外にいて「外」であるあなた。そして、もう一人のあなたは、自分の中にいるあなた。
(拙文「「あなた」と唱えるとき、あなたはふたりいる」より)

目次

外と中の二重写し

外であり同時に中であるもの

言葉を用いる以上、迂回するしかない

しょせん隔靴搔痒の遠隔操作でしかない

外と中の二重写し

あなた（かなた）・彼方・貴方（貴男・貴女）。

こんなふうに表記されるのは、「遠く離れて」と「近いあなた（貴方）」が二重写しになっているわけですが、二つの意味が重なっているのですから、よく考えると不思議でなりません。

あなたと口にするとき、あなたを想うとき、あなたは二人いるのです。

一方は、かなたにいるあなた、たとえそばにいても自分のものには決してならないあなたであり、いわば外にいて「外」であるあなた。

もう一人のあなたは、自分の中にいる近いあなたです。

外にいるあなたと中にいるあなたは、「あなた」と呼ばれるという一点だけでつながる存在であって、別々のものであるはずですが。外のあなたと中のあなた——両者の隔たりは解消できないにもかかわらず、その二重写しを、「あなた」という言葉は具現しているように思えます。

外であり同時に中であるもの

日本語の「あなた」に具現されている二重写しは、人にとっての森羅万象に見られる両義性に等しい存在だとも言えそうです。人はあらゆるものに呼び掛けることによって、その対象との関係を結ぶという意味です。

呼びかける対象が人以外の生き物や無生物の場合には、擬人化することになります。相手を人とみなさない限り、人は呼びかけません。まるで人のようなものとみなしたもののしか、目に入らないかのようです。それが幻界であり言界であり、同時に現界でもあるのですが、大切なことはこれが人にとって限界であるということです。

人にとって呼びかける、つまり名前と呼ぶあらゆるものが自分の外にあり、同時に自分の中にあるのです。外と中の間を行き来するものが言葉だと言えます。具体的には、名づけるのであり、声に出して呼ぶのであり、文字として書きとめたりします。名づけるは手なづけるでもあるという意味ですが、じっさいには名前など付きはしないし、手なづけられるものでもありません。人のひとり相撲です。

言葉においては、「(自分の) 外にある」と「(自分の) 中にある」が同時に起きているのです。言葉で言うと相反するものというか状態が同時に起きているわけですが、この「相反する」というのは言葉の世界の話であり、現実では「相反する」が矛盾することなく起きています。というか、「起きているように見える」というのが正確な言い方かもしれません。

言葉の世界と現実の世界とはそれぞれ異なった論理と文法があるからです。簡単に言うと、言葉と現実とは別だからです。さらに言うなら、言葉の世界と現実の世界と叫ぶの世界（おそらく夢の世界も）は異なります。それぞれ異なった論理と文法があります。言界と現界と幻界は異なるなんて言い方を私はよくしますが、単なるレトリックです。

異なるどころか、人においては同じなのです。それが限界です。こうした矛盾した言い方（レトリック）しかできないという意味です。言葉をつかえば何とでも言えます。それでいて何とも言っていないのです。

いずれにせよ、いま私が書いているのは言葉であり、言葉の世界の論理と文法に沿って文字を書いているのですから、当然のことながら、現実について書く場合には矛盾した言い方になることもあるでしょう。矛盾したことについて矛盾しないすばっとした（割りきれぬ）言い方もできるでしょうが、それは不正確というものです。ちなみに論理的であるとか理性的であるとか整合性とか辻褄とか普遍とか真理というのは人にとって努力目標でしかありません。絵に描いた餅です。努力目標（という言葉です）ですから、信じてひたすら唱えれば元気が出る人もいます。言葉の最大の効用は景気づけです。それは日々実感できます。

私はそう考えています。私がそう考えているだけの話です。それ以上でもそれ以下でもありません。人それぞれです。

言葉を用いる以上、迂回するしかない

誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉のことです。

曲がりくねった言い方ですね。

短く直線的に言っていない。すばっと割りきれぬ言い方をしています。いらいらする人もいるにちがいありません。矛盾しているとか、論理的ではないという感想を持つ人もきつといるでしょう。あほらし、くだらないという感想があるのも承知です。人それぞれです。

言葉はあなたの中に入ったり出たりする。外に出てはじめて見えるもの。それでいて見えない。

言葉と事物が異なる以上、言葉は事物にたどり着くことはできないし、せいぜいなぞ

るのが精一杯。

ヒトの知覚機能は相対的なものであって、まだらでまばらだし、言葉と事物は一対一に対応していないから、ヒトは偶然と必然にもてあそばれながら、まだらでまばら状に世界と宇宙をとらえ、一か八かに賭けながら宙ぶらりんの状態でぶら下がって言葉を放つしかない。

言葉について語るさいには、こんなふうに言葉でもって迂回するしかないようです。森羅万象について語るさいも言葉を用いるわけですから、迂回するしかないようです。迂回してどこかにたどり着けるわけではありません。えんえんと遠回りをするのです。

しょせん隔靴搔痒の遠隔操作でしかない

遠回り続けながら、人には遠回りをしているという実感はふつうありません。実感して、いいこと（気持ちいいこと）は一つもないからです。実感すれば興ざめする（萎える）だけですから。

操縦桿を握っている、地面を自分の足で踏んで歩いている、目の前にスクリーンがあってそこに世界が映しだされている、世界と無媒介的に触れあう、世界を直観（直感）する、事実を直視する、真理（真実）を悟る（洞察する）、言葉を舌で転がし文字をいじくることで世界をいじった気分になる、真理や事実は単純明快に語る事ができると信じる。

とはいうものの、しょせん隔靴搔痒の遠隔操作でしかありません。長靴の上から痒いところを搔いているようにままならない状態で、搔いた気になるしかないという意味です。夢の中で藻搔いたり足搔いたり、必死に駆けるのにも似ています。

もどかしいのに、人はそのもどかしさをなかなか感じないし、おそらく感じたくないのです。覚めない夢の中にいるとしか思えません。覚めたくないのかもしれませんが。迂回しながら迂回を感じない、というか迂回を感じる余裕がないのが夢なのかもしれません。夢はあれよあれよなのです。

#迂回 #レトリック #言葉 #夢 #矛盾

偽物っぽくない偽物

＊

偽物っぽくない偽物

星野廉

2022年7月17日 12:58

「夏目漱石の『吾輩は猫である』」とか「ショパンの「幻想ポロネーズ」」とか「アンリ・マティスの「帽子の女」」が、どこにもあって手軽に入手できたり、どこでも聞けてここでも聞けたり、どこでも見ることができてここでも鑑賞できるということのほうが、圧倒的にリアルに感じられるのは私だけでしょうか。

(拙文「作家、音楽家、芸術家は、作品を残すと言うよりも、むしろ名前と作品名を残す。」より)

目次

偽物っぽさのランク付け

絵と楽曲と小説を鑑賞する

文字だけがしつこく残る

文字は複製であってなんぼ

小説は複製という偽物で読むもの

偽物っぽさのランク付け

上の引用文で挙げた「夏目漱石の『吾輩は猫である』」と「ショパンの「幻想ポロネーズ」」と「アンリ・マティスの「帽子の女」」は、ふつう複製を読んだり、聞いたり、見たりして鑑賞します。

本物や実物や実演ではなく、複製（要するに偽物であり似たものです）を鑑賞するのが、一般的な芸術鑑賞という意味です。とはいえ、小説と楽曲と絵画では、その偽物っぽさに濃淡があるように私には思えます。

偽物にもいろいろあるという意味です。いかにも偽物っぽいものがあれば、そこそこ偽物っぽいものもあるし、なかには偽物だとまったく意識しない偽物もあります。

よくできた偽物か粗悪な偽物かという、似せるのが上手いか下手かといった品質の問題は、ここでは除外させていただきます。

絵と楽曲と小説を鑑賞する

大ざっぱに小説（詩歌を含む言語芸術の一つ）と楽曲（演奏および歌唱される作品の一つ）と絵画（視覚芸術の一つ）で考えてみましょう。具体的には、上で挙げた「夏目漱石の『吾輩は猫である』」と「ショパンの『幻想ポロネーズ』」と「アンリ・マティスの『帽子の女』」を例に取ってイメージしてみてください。

*

絵画からいきます。絵は芸術作品の中では「たったひとつ感」がきわめて強いものです。複数の「同一の作品」が存在する版画や浮世絵とは対照的に基本的にたった一枚しかないようです。したがって、絵画は複製で鑑賞するのが一般的であると言えるでしょう。

一般的だというのは、たとえば教科書や画集やビデオを使わざるをえない教育の現場、美術館や展示会に出かけることができない遠くに住んでいる人や、出かける余裕のない庶民の鑑賞を指しています。これが圧倒的に多い絵画の鑑賞の形態ではないでしょうか。

「モナ・リザ知ってる？」「知ってる、知ってる、世界でいちばん有名な絵なんでしょ？」

「知っている」は複製を見て知っているという意味でしょう。つまり、複製での鑑賞を偽物での鑑賞だと非難する人はごく少数だと思われます。逆にそんな人はへそ曲がりだと非難されそうです。

余談ですが、たった一つの芸術作品が、オークションなどで売買されて個人の所有物

になっている、つまり誰もが鑑賞できるわけではないという少なからぬ現状に敏感でありたいと思います。

＊

つぎに楽曲です。これは実際の演奏で鑑賞するのが理想でしょう。楽器と肉声を拡声器など機械をとおさずに自分の耳で聞き、耳で聞くだけでなくその場の空気を吸いおいを嗅ぎ、その場のざわめきを含む雑音（ノイズ）まで体験しなくては鑑賞したと言えないなんて人もいそうです。じっさい、そんな意見を何かで読んだ覚えがあります。

また、演奏や歌唱は不動ではなく、つねにブレや揺らぎの中であって、そのパフォーマンスは毎回違ったものになるという考え方も広く存在するようです。絵画や小説とは大きく異なる点ですね。

とはいうものの、アナログであれ、デジタルであれ、ハイレゾであれ、ネット上で配信されたものであれ、CDやDVDを再生したものであれ、大型スピーカーで聞くのであれ、イヤホンで聞くのであれ、複製されたり加工された、つまり機械を用いて作られた音による演奏を聞くのが一般的な鑑賞であるのはみなさんご承知のとおりです。

（※余談ですが、重度の中途難聴者である私は補聴器（デジタル式）を装用していますが、つねに作られた（調整され加工された）音を聞きながら生活していると言えそうです。生の音が恋しいです。）

「わたし、一日に二回はアデルのハローを聞かないと駄目なの」「いいよね、アデル。ぼくは、ミスチルの HANABI を聞かないと一日が始まらない。それも、Tour2015 のライブのじゃなきゃ駄目」「ふーん。おれは、エリック・サティの……」

楽曲もまた複製での鑑賞を偽物での鑑賞だと非難する人はごく少数だと思われます。逆にそんな人はへそ曲がりだと非難されるか、単に無視されそうです。

＊

では、小説はどうでしょう？

初版本でなければ本物ではない。文庫版より単行本、単行本よりも文芸誌での初出でしよ。電子本なんてとんでもない。あと印刷された本をコピペしたものをネット上で小説を読むなんてねえ……。んなことたーない、そんなものは全部が複製であり偽物であって、書き込みとかが分かる生原稿で読むのが真の文学鑑賞なのだ。

そんな声が聞こえそうです。

文字だけがしつこく残る

私は言葉を広く取っています。話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、表情や身振りといった視覚言語も言葉だと思っています。このうち、いちばん不思議だし気になってならないのが文字なのです。

話し言葉と表情と身振りは発せられると同時に消えていきます。どんどん消えていきますから、受け手はつぎつぎと現れるものを聞いたり見たりして追いかけていかないと理解できません。追いかけてこなのです。しかも現れる順に受けとっていく必要があります。

ある意味面倒だし、いらいらさせることもあるでしょうね。話し言葉と表情と身振りを受けとるのはもどかしいのです。それは時間に制約され、時間的に拘束されるからです。

文字だけが残ります。消さない限りしつこく居続けるのです。いつまでも残っているので、時間に拘束されません。残っている限りは、いつでも気の向いたときに読めます。しかも、はしょることができます。

ざっと読んだり、好きな箇所だけ読んだり、面倒なら見るだけで済ませることができる。これがおおかたの「文字を読む」であり、「文字を見る」なのです。

ところで、私には「文字を読む」ことが途方もなく難しい行為に思えてなりません。見るのではなく読むことが、です。たいてい見ているのです。見てしまうのです。

文字は複製であってなんぼ

文字で書いたものは、はしょって読める、飛ばし読みができるのです。素晴らしいとお思いになりませんか？ 忙しい現代人にはぴったりの表現手段ではないでしょうか。

みなさんはいま私の記事を読んでいらっしゃると思いますが、ご覧になっている文字は画素の集まりだそうです。印刷物であれば文字はインクの染みです。つまり、複製できます。しかも簡単に。

文字においては無数のコピー（複製）が可能なのです。驚くべきことですが、身のまわりには、コピー（複製）された文章がげんに無数に存在します。それが当り前に思われていることが、私には恐ろしく感じられます。

*

文字は、複写、印刷、筆写され、さらには文書や映像という形でデジタルデータ化されています。なぜなのでしょう？

文字には抽象的な側面があるために複製が可能なのです。抽象的というのは文字の形のことです。一方の音声の形は五感ではとらえにくいですが、抽象的な面があるからこそ複製されるのだと思われます。

具象の抽象的な面は「写す」（複製する）ことで「映る」（再生される）のです。「移す」（物理的に移動させる）の代償行為です。

現在ではありとあらゆることが文字になっていますが、文字は無限に複製できます。しかも、投稿と複製と拡散がほぼ同時にかつ瞬時に起きています。インターネットのことですね。

文字は複製でしか存在できないと言っても言いすぎではない気がします。文字のオリジナル、つまり現物とか実物とか本物というのは、よく考えると、ナンセンスなのです。文字は複製であってなんぼという意味です。

文字においては、人は文字の具象より抽象的な面を活用していると言えます。書道、カリグラフィー、文字や書体のデザインを除き、文字においてはオリジナリティが失われているのです。失念されていると言うべきかもしれません。

文字の複製や引用は、同じ、つまりほぼ同一になります。それが文字の抽象性なのです。抽象だから複製をしても偽物（似せたもの）どころか同じという理屈になります。驚くべき性質ですね。こんなもの、ほかにありますか？ 私は考えるたびに腰を抜かしています。

小説は複製という偽物で読むもの

冗談はさておき、要するに、小説のオリジナリティ云々というのはそれが盗作とか剽窃であるかどうかという別の次元の話になります。

おそらく作者を除く——ひょっとすると作者も含んで——誰もが複製としての小説を手にし、複製である、いや複製でしかありえない文字から成る小説を読んでいるのです。

小説の偽物っぽさなんて言うこと自体がナンセンスであり戯言であるのが、よくお分かりになると思います。小説は複製という偽物で読むものなのです。それ以外の読み方はまずないでしょう。現実的ではないという意味です。

小説こそが偽物っぽくない偽物だと言えそうです。お察しのとおり、小説に限らず、文字で書かれたものであればどんなジャンルの文書でも、偽物っぽくない偽物ということになります。

そもそも小説を成り立たせている文字が複製であり、おそらく複製の複製だからでしょうか。切りのない話なのです。

さらに言うなら、誰が（AIなどの機械も含みます）いつどこで何を用いて書いても、あるいは入力しても「雨が降った。」は「雨が降った。」で、同じです。これが私には不思議

議でなりません。どう受け止めていいのか分からないのです。よく考えると不気味だし恐ろしくもあります。

念のために言い添えますが、文書における偽物とは複製という意味ではなく、その内容の真偽（そんなものがあるとしてですけど）であるとか、盗作や剽窃や改変や改ざんという別の次元の話になります。文字というよりも文字列とか文章としてのレベルの話なのでしょう。

吾輩はネコである。名前はまだにゃい。

その意味で、みなさんがネット上で上のような文章で始まる夏目漱石作『吾輩は猫である』をご覧になったとするなら、それは偽物である公算が大きいと言えるでしょう。複製ではなく改ざんされた偽物です。こうした改ざんされた（数字や文言が書き換えられた）文書が公文書に存在します（黒塗りも改ざんです）。改ざんは報道にもあります。これこそが、ゆゆしい事態です。

#固有名詞 # 人名 # 名前 # 引用 # 作品 # タイトル # 複製 # 文学 # 音楽 # 芸術 # 鑑賞 # 小説 # 絵画

作家、音楽家、芸術家は、作品を残すと言うよりも、むしろ名前と作品名を残す。

＊

**作家、音楽家、芸術家は、作品を残すと言うよりも、むしろ名前と作品名を残す。

星野廉

2022年7月17日 11:32**

複製の持つ、いや複製のもたらすと言うべきでしょうか、臨場感（錯覚のことです）は半端じゃありません。人にとって本物か偽物かはどうでもいいのではないか。そんな気さえします。

（拙文「「移す」の代わりに「写す」と「映す」で済ます」より）

目次

**「たったひとつ」という抽象、「たったひとつがあちこちにある」というリアリティ

作品は商品であり複製である時代

言葉自体は空っぽ。

「移る」の代わりに「写る」と「映る」で我慢するしかない**

「たったひとつ」という抽象、「たったひとつがあちこちにある」というリアリティ

固有名詞とは、この世にたったひとつ、たったひとりしかないという怪しげな前提に立ったレトリックです。

なぜ「怪しげな」のかと言いますと、同姓同名があるし、表記が違うだけで読みがまったく同じ人名があり、また同一だったり、ほぼ同じだったり、そっくりなタイトルの作品があるからです。いまのは半分冗談なのですが、確かにそうですよね。

固有名詞が「怪しげな」（嘘っぽいという意味です）言い回しであるというのは、「たったひとつ」とか「たったひとり」とか「唯一」というのが抽象だからです。空疎なので

す。なにしろ抽象的で実感も体感もできません。「唯一」の存在とは、ふつうそう簡単に出会えないからです。

直接に見たことも触れたこともないものを「これはこの世にたったひとつのものなのよ」なんて言われて、「ああそうですか」と素直に納得できますか。むしろ、「唯一だ」と言われているものがたくさんあるというのが揺るぎない現実だという気が私にはしてなりません。

とかく固有名詞は嘘くさいのです。たぶん固有名詞は口にしたり文字にするのが簡単（引用するのが簡単だという意味です）だからでしょう。なにしろ、固有名詞は実物や本物の代用物（偽物とか似たものとか似せたもの）であり、複製であり、多くの場合には複製の複製だからです。

だから、というか、その証拠にあちこちにあります。「唯一のもの」と称して。

作品は商品であり複製である時代

たとえば、「夏目漱石の『吾輩は猫である』」とか「ショパンの「幻想ポロネーズ」」とか「アンリ・マティスの「帽子の女」」は、どこにもあって、手軽に入手できたり、どこでも聞けるし、どこでも見ることができます。唯一のものであるはずの、この「どこでもある」感が、圧倒的にリアルに感じられるのは私だけでしょうか。

商品や製品については、大量生産、流通、複製、拡散という言葉でまとめることができそうですが、いまや文学作品、楽曲、芸術作品は商品なのです。本や画集やCDやDVDやネットでの配信という形で、大量に複製を生産し流通させ拡散することが可能ですし、現にそうなっています。

唯一の物であるはずの「作品」をどこでも手に入れて鑑賞できる時代に私たちは生きているのです。

言葉自体は空っぽ。

とはいえ「読んだ」という言葉だけがあります。そうです、「読んだ」は言葉なのです。「見た」や「聞いた」や「買った」や「持っている」や「食べた」でも事情は同じです。必ずしも裏付けのない言葉と言えます。

言葉自体は空っぽなのです。空っぽでべらべらなので、さくさく扱えます。とくに名前は短いですから、気軽に（その中身を知らなくても）引用できます。あっさり言いましたが、とんでもない事態だし、恐ろしい話です。

「移る」の代わりに「写る」と「映る」で我慢するしかない

ちなみに、私は夏目漱石の『吾輩は猫である』を読んだことがあります、文庫版を持ってもいますが、何が書いてあるのかはきれいさっぱり忘れしました。その意味では「読んだ」なんて、とてもじゃないけどひとさまには言えません（上で書きましたけど）。「読みつけている」のです。死ぬまでそうでしょう。

ショパンの「幻想ポロネーズ」は聞いたことがありません。アンリ・マティスの「帽子の女」は見たこともありません。作者名だけ知っているのでも、検索して適当にみつろってコピーペーストしただけです。まるで知っているみたいに引用して、ごめんなさい。なにしろ、簡単に引用できるので、つい……。

これで終わってしまったのは、さすがに後ろめたいので「幻想ポロネーズ」（もちろん実演ではありません）と「帽子の女」（もちろん実物ではありません）を鑑賞してみます。タイトル（固有名詞）ほどさくさく扱うわけにはいきませんが、それぞれの複製（おそらく複製の複製でしょう）をネット上で探してみるつもりです。

本物ではなく偽物（この言い方が気になるなら「似たもの」とか「似せたもの」でもかまいません）である複製を鑑賞して勉強してみます。それしかないですよね？ というか、みんなやっていることじゃありませんか。

一般的に芸術鑑賞とは偽物（複製）の鑑賞です。移動を制限されている現在は、なおさらそうではないでしょうか。「移る」の代わりに「写る」と「映る」で済まし我慢するしかないのです。

レトリックはそこまでにして、複製の本物感と実物感（「やってる感」と似ています）と臨場感（錯覚のことです）を満喫したいと思います。

*

この記事のタイトルを変更しなければならなくなりました。

「作家、音楽家、芸術家は、作品を残すと言うよりも、むしろ名前と作品名（つまり固有名詞）と複製（あるいは複製の複製）を残す。」

現在は、このほうがリアリティがありそうです。

#固有名詞# 人名# 名前# 引用# 作品# タイトル# 複製# 文学# 音楽# 芸術# 鑑賞

「移す」の代わりに「写す」と「映す」で済みます

＊

「移す」の代わりに「写す」と「映す」で済ます

星野廉

2022年7月17日 07:55

地面や水面やスクリーンに姿が映る。影が映る。写真に姿が写る。影が写る。動いていないのに移っている。うつっている。「うつる」は魔法の言葉です。

(拙文「あなた」と唱えるとき、あなたはふたりいる」より)

目次

「移す」の代わりに「写す」と「映す」を用いる

遠くにある事物を複製という形で手に入れたり、見聞きできる仕組み

本物や実物を偽物や似たもので代用する

芸術は錯覚だ！

偽物と似たものと似せたもののリアリティ

「移す」の代わりに「写す」と「映す」を用いる

世界は「写す・写る」と「映す・映る」に満ちています。とりわけ現代というか現在はそうです。いま、あなたと私をつないでいるのも「写す・写る」と「映す・映る」ですね。

お察しのとおり、インターネットを介しての画面上でのお付き合いのことですが、これは直接あなたのところへ私が移動する、つまり「移る」ことが容易にできないための次善の措置とも言えるでしょう。

身も蓋もない言い方をしましたが、「移す」の代わりに「写す」と「映す」を用いるという行為のことです。これで「動いていないのに移っている」が可能になります。

パソコンや端末の画面に映っているものは、移すことがかなわないから、映しているのです。このさい音声も映っていると考えましょう。音声も複製される（うつされる）からです。

あるものがそのまま移動するのではなく、映ったり、写ったりするというのは、ネット上では「(一回) 投稿する = (多量に) 複製する = (世界中に) 拡散する」という形で、ほぼ同時かつ瞬時に起こっています。しかも、いったん投稿されたものはどこかに情報とかデータとして保存されているみたいなのですが、詳しいことは知りません。

ある意味恐ろしいですね。削除しても残っているとすれば、です。

遠くにある事物を複製という形で手に入れたり、見聞きできる仕組み

かつては、「写す・写る」が主流の時代が長く続いていたようです。写経、写本、筆写、印刷、写真、複写機が頭に浮かびます。写すのは大変だっただろうと想像します。多大な時間と労力を要したにちがいません。

写真と映画とテレビとコピー機が登場したあたりから、「写す・写る」と「映す・映る」の境が曖昧になり、さらには不明になったようです。この過程と並行して、「本物・実物」と「偽物・似たもの」の境も曖昧で不明になって現在に至ります。

いずれにせよ、直接どこかに出かけていなくても、つまり「移動させる・移動する・移す・移る」をしなくても、遠くにある事物（本物・実物）を複製（偽物・似たもの）という形で手に入れたり、見聞きできる仕組みが次第にできあがって、今日に至るわけです。

(※ telescope (望遠鏡)、telegram・telegraph (電信や電報)、telephone (電話)、television (テレビ) の tele- が、telepathy (テレパシー) や telekinesis (念力) や telegnosis (透視力や千里眼) と同じく「遠い」という意味を持つのは象徴的です。)

どれもが「遠く」を「近く」に知覚する仕組みであり、「写す・写る」と「映す・映る」であることに注目しましょう。

すごいことだし、考えようによっては不遜で恐ろしい仕組みというか仕掛けを人類は手にしたものです。人類がはまる（嗜癖する・依存する）のは当然でしょう。

「遠く」を「近く」に——。「写す・写る」と「映す・映る」を「移す・移る」に——。これは、人類のオブセッションであり悲願だと思います。その悲願を実現するための鍵（魔法）が、「代用・代理・代表」なのです。

本物や実物を偽物や似たもので代用する

（一回きりの）投稿、（多量の）複製、（世界的規模の）拡散。これがほぼ同時に、しかも瞬時におこなわれている。

要するに、本物や実物を偽物や似たもので代用するわけです。錯覚とも言えます。これまた身も蓋もない言い方ですけど。

我錯覚する、ゆえに我あり。語りえないものを前にして、人は錯覚するしかない。錯覚は力なり。ヒトは錯覚する葦である。

芸術は錯覚だ！

芸術の基本は「写す」と「映す」ではないでしょうか。人類における芸術の起源と、個人における芸術の初めの一步には、「なぞる」と「写す」と「映す」という動作がある気がします。

たどり着けないもの、かなたにあるものをなぞろうとする代償行為かのかもしれません。目で追い、眼差しを向け、目でなぞる。届かないものに、手を伸ばし、指と手でなぞるのです。なぞるとつつすは遠くはないと思います。

芸術は錯覚だ！ by Talo

偽物と似たものと似せたもののリアリティ

「移す・移る」の代わりに「写す・写る」と「映す・映る」で済みます。

本物と実物の代わりに偽物や似たもので我慢する。

こんなふうに言えば罰が当たりそうです。偽物と似たもので、その気になれば御の字というものでしょう。贅沢は言えません。偽物と似たものと似せたもののリアリティ（本物っぽさ）は馬鹿にならないからです。錯覚上等。錯覚さまさま。錯覚していますけど、何か？

複製の持つ、いや複製のもたらすと言うべきでしょうか、臨場感（錯覚のことです）は半端じゃありません。数年前には口にするのも恥ずかしかった仮想現実が、いまでは大手を振って取り上げられています。

人にとって本物か偽物かはどうでもいいのではないか。人は現実よりも夢の中で生きたいのではないか。そんな気さえします。

#本物 # 偽物 # 実物 # 複製 # 錯覚 # 芸術 # 作品

固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。

＊

固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。

星野廉

2022年7月8日 08:30

名前は最小最短最軽の引用です。なかでも固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。小さくて短くて軽いくせに、どうして最強なのかと言いますと、放つ光が半端じゃなくまぶしいからです。たとえば、文章に人名や作品名があるだけでそこに光がさして、他の部分が見えなくなって読まない人も多数いるくらいです。

冗談はさておき、長々と原文を引用する必要はなく、人名を出すだけでそれで済むと言っても過言ではありません。長々とした引用はむしろ邪魔なのです。いまの時代は誰もがやるべきことや読むべきものがたくさんあるからでしょう。できることなら、何でも早く済ませるに越したことはないのです。

最小最短最軽、万歳！　ちっちゃい、あっという間、さくさく、最強！　というわけです。早送り機能やファスト映画があったり、つぶやき拡散サービス、要約、まとめサイトが盛んなのがうなずけます。ほんとうは引用もかったるい、できることなら名前を知っているだけで済ませたいのかもしれない。

半分冗談はさておき、ネット上で書いた文章では、固有名詞（とくに人名）をタグにすると多くの人に読まれ、リアクションもたくさんあることは皆さんがご存じのとおりです。豆がほしいか、そらやるぞ。人が飛びつくのです。

＊

それだけではありません。人名を口にしたり書くことで、引用した人名の持ち主になりきったり、なりすますことができます。「なりすます」と言いましたが、気持ちのうえ

での話です。なりきりはともかく、そう簡単に有名人や偉人に、なりすますことができるわけではありません。

ポロが出て叩かれることがあります。ポロを出さないためには、あまり自分の意見は出さないほうが賢明でしょう。手短に引用するだけで、読者は乗ってくれます。すごい！ 勉強家ですな！ ○○の△△をご存じとは……。博識に驚嘆いたしました。

引用した文と、その引用元である人名や作品名を文章にちりばめれば、それでオーケーです。余計なことは書かない（自分の意見は無用）。書くとすれば、その固有名詞について繰り返し使われてきた枕詞（本の裏表紙とか帯にあります）がいいでしょう。これがコツです。

最小最短最軽、万歳！ ちっちゃい、あつという間、さくさく、最強！ 長くてしつこいのは、いや……。

*

ところで、固有名詞を出すと、めちゃくちゃ気持ちがよくなります。胸に手を当てて、よく考えてみてください。胸がときめくのは、名前を出すことで、名前の主（そんなものがいればの話ですけど）に同化するからでしょうか。

汗ばむ場合もありますね。「人の禪で相撲を取る」とか「虎の威を借る狐」に似ています。相撲を取れば熱くなり、虎の皮を被れば暑くなります。ついでに面の皮も厚くなるでしょう。篤くなるかどうかは不明です。

冗談はさておき、あなたのお好きな、あるいは崇拜する人の名前を口にしてみてください。ゆっくりと噛みしめたり、口の中で転がしてみましょ。噛み噛み、れろれろ、です。

どうでしょう？ 愛しくありませんか？ 親しみと尊敬の混じった不思議な気持ちになりませんか？ その人に対する思い入れや愛が深いほど、のぼせます。

＊

それがなりきりであり、密かなるなりすましの正体です。「名前を唱える」という行為は、じつは「(その者や物に) なる・なりきる」儀式。太古から続いている呪術のひとつです。ただし諸説あり。

レトリックはさておき、好きな人物や敬愛する有名人の名前を、あなたの書く文章に織りまぜてみましょう。「〇〇はこう言った」とか「きょうもコーヒーを飲みながら、△△の曲を聞いた」とか「XXさま、命」なんて具合にです。

力がみなぎってくれば、あなたの愛は本物です。ときめかないとすれば、それは愛（あるいは信心）が足りないのです。宗教の勧誘みたいな口調になって、ごめんなさい。

＊

名前を単独でひたすら筆写したり唱えるだけでも構いません。無心に、かきかき、れろれろするのです。むしろ、このほうが純粋に名前の呪術を楽しめるかもしれません。名前をなぞることは手軽にできる最強の引用なのです。意識さえあれば、死ぬ間際にでもできるでしょう。こんなものが他にありますか？

名前は力を与えてくれます。一瞬、あるいはしばし、あなたをどこかへ連れていってくれることがあっても不思議はありません。大丈夫です、ちゃんと帰って来られるほどの魔法です。

名前のもたらす力は気持ちがいいので嗜癖します、依存します。大半の人が嗜癖しています、依存しています。この私も例外ではありません。その証拠に、この記事のタグに「名前」を入れました。名前もれっきとした名前なのです。

固有名詞 # 人名 # 名前 # 引用 # タグ # 呪術

書いても書いても書いてはいない。

＊

書いても書いても書いてはいない。

星野廉

2022年7月7日 08:21

何かに追いかけて必死で走る夢を見たことはありませんか。

走っても走っても、走っていないようなのです。一生懸命に（命を懸けて）足を動かし手を振っているつもりなのにぜんぜん進んでいないのです。つまり、あがき、もがいているだけ。

これは駆けても駆けてもじつは駆けていないとも言えます。賭けても賭けてもは賭けていないと激似ではありませんか。もどかしい限りです。

気に掛けても掛けても、じつは掛けたことにはならない。絵を描いても描いても、じつは描けてはいない。文章を書いても書いても、じつは書いてはいない。

隔靴搔痒の遠隔操作。まるで夢の中。知覚機能を用いる限り対象には触れることができない。言葉を使う限り直接的に森羅万象を相手にすることはできない。

駆けても駆けても駆けてはいない。掛けても掛けても掛けてはいない。搔いても搔いても搔けてはいない。書けても書けても書けてはいない。要するに、そういうことです。

どう足搔いても藻搔いても現実にたどりつけない私たちは、覚めた夢の中にいるのかもしれない。

#書く #文章 #夢 #遠隔操作 #レトリック

うつるはうつる

＊

うつるはうつる

星野廉β

2022年5月8日 10:38

目次

文字の不自然さ

固有名詞をうつす

うつるはうつる

文字の不自然さ

表情、身振り、話し言葉（音声）、書き言葉（文字）のうち、文字だけが残り、あとの言葉は発した瞬間に消える。

言葉を口にする、書く。

言葉を耳にする、目にする。

「書く」だけが浮いている。赤ちゃんを思いうかべると「書く」がないのに気づく。「書く」は、「なぞる」「まねる」「写す」という行為を通じて系統的に学ぶ必要がある。

「書く」には体系があり、その意味では不自然なのである。無文字社会や無文字文化はあっても、無言葉社会や文化はありえない。

文字に体系があるというのは、文字は段階的に意識的に学ばなければならないということだ。これは文字が目に見える形で残り、保存されているからだろう。

体系化するためには、その対象が目に見えていなければならない。目に見えないものを整理するためには記憶に頼る必要があるが、整理どころか体系化しようと望むなら、並々ならぬ記憶力を要するにちがいない。

並々ならぬ記憶力がなければ扱えないものがあるとするなら、それは自然界には見られないという意味での「不自然なもの」であり、おそらく人工物だと言えるだろう。

文字をある程度習得した者にとって、文字は当然のものであり、自然なものに感じられるのは学習の成果にちがいない。習得する過程での苦勞を忘れていているという意味である。

この当然という感覚は思考停止にほかならないが、文字を使用するためには、文字の不思議さにとまどっていたり、こだわってられないことを考えれば、この思考停止も当然だということになる。

固有名詞をうつす

表情、身振り、話し言葉（音声）、書き言葉（文字）。

言葉を口にする、書く。

言葉を耳にする、目にする。

言葉を口にする、書く、耳にする、目にするという行為は、言葉をうつしていると言える。「うつす」は動詞だが、どの動詞も、限定的なものであって、ある動きの一部を言い表しているのにすぎない。これは名詞と同じである。

言葉は事物でない以上、言葉は事物の一部しか、うつせない、つまり移せないし、映せないし、写せない。

*

固有名詞という言い方がありますが、この世にたったひとつ、たったひとりしかないという前提に立ったレトリックです。

固有名詞は、名前という呪文の中で最強であり、その放つ力はまばゆいです。文字どおり、目がくらむのです。中毒性と毒性も強いです。

作家、音楽家、芸術家は、作品を残すと言うよりも、作品名を残しているというのが、日常生活を送るさいの感覚です。

名前は最小最短最軽の引用だからです。

(拙文「片想い」より引用)

＊

人名を口にしたり書いたりすることを引用だと考える人は少ないかもしれないが、引用以外の何ものでもない。この考え方から言えば、あらゆる言葉を口にしたり書くことが引用になる。

誰もが生まれたときに、言葉がすでにあっただけだから、言葉は借り物だと言えるし、共有物だとも言えるし、引用するものだとも言える。借り物と見なせば貸し借りという連想が働き、共有物であれば汚さずに使うという配慮が生じ、引用という文脈で考えれば、現在であれば出典や著作権を気にする人もいても不思議はない。

ある事物や事象を、ある言葉で述べたり論じるさいには、その言葉の語義やイメージにしばられるのは当然の成りゆきだ。言葉を使うことは、言葉の世界の論理と文法、つまりレトリックにしたがうことを意味する。

＊

固有名詞のうち、人名に話をしばってみよう。名前こそが最小最短最軽最強の引用だからだ。名詞であり人名が最小最短再軽だというのは分かりやすいだろう。名詞には活用がないからすっきりもしている。

人名が最強の引用であるというのは、人名に対する人の思い入れが大きいからにほかならない。名詞の中で人名ほど人がこだわりを示すものはないからだ。大切にもし、ないがしろにもする。人名は、名づけられた人の分身なのである。

同姓同名はあるにしても、ふつう人はある人名で、ある特定の人物を思いうかべるだ

ろう。人名を唱えたり、文字として記すことにより、その人名を持つ人物をうつす（移す・写す・映す）のであり、引用するのである。

人名の書いてある名札を踏んだり、ハサミを入れたり、切り刻んだり、インクで改ざんしたり、インクを塗って消したりするのにためらいがあるとなれば、それは人名が単なる文字や言葉や名詞ではないからだろう。これは、単なる人名ではなく、知っている人物や親しい人物、さらには愛する人の名前を思いうかべると分かりやすいだろう。

人名以外に、これほどの強い輝きを持つ言葉があるとは思えない。その意味で、人名は最小最短最軽最強の引用だと言える。

うつるはうつる

固有名詞。地名、団体名、集団名、国名、人名、作品名、商品名、商標。

固有名詞の放つ光はまぶしい。固有名詞を出せば、そのまわりの言葉がかすんで見えるほどまばゆいため、聞いている人や読んでいる人が、文脈の大半を忘れて固有名詞だけを覚えていることも日常的に経験するにちがいない。

「〇〇についての話だった」「〇〇が△△だという話だった」というふうには〇〇という固有名詞が記憶の中心になる。

固有名詞を口にしたり書いたりする行為は、その指ししめす事物を呼びよせることだとも言えるだろう。「呼びよせる」「招く」「連れてくる」「よみがえらせる」「その場に立ちあらわれる」「目に浮かぶ」「そこにいる（ある）ような気分になる」。

こう考えると、固有名詞を唱えることが呪術的な行為に思えてきてならない。たしかにそうなのだろう。そもそも人以外のものを名づけることは、擬人なのである。

人ではないものに声を掛け、名づけて、手なづける。名前という生餌（なまえ）、つまり生の餌を供えて、手なづけ、飼いならそうという気持ちが根っこにあると考えられる。

＊

固有名詞に話をしぼると、たとえば地名であれば、土地の名を唱えることで、自分がその土地を呼びよせ、同時にその土地に自分が一時的に「移った」気分になる。人名であれば、その人を呼びよせ、同時にその人になりきることもできる。やり方しだいではなりすますことも可能だろう。

要するに、その土地に「移った」ような気持ちになり、その人に「乗り移る」のである。これは気分の問題であるが、そもそも人は気分で生きている。気分を想像力と置き換えても大差はないだろう。

人名に話をしぼると、誰かに「なる」と「なりきる」と「なりすます」のあいだに、人はそれほど明確な境を設けていない気がする。虎の威を借る狐。

＊

現在、引用はきわめて容易にできる。ネット上ではいわゆる「まとめ」が横行している。日替わりで、誰かの名前、著作名、著作からの一節をうつして（移して、写して、映して）、その著作者になる、なりきる、なりすますことが可能な時代になっている。これは癖になる。

記念写真のように、楽な気持ちで、人名、著作名、著作からの抜粋をうつし、その横に自分の名前やユーザー名を添える。もちろん、有名のほうが無名よりもその輝きはまばゆい。抜粋は忘れ去られ、うつされた人名と作品名が記憶に残る。

同時に、そのうつした人物の名前も記憶に残る。正確に言えば、その人名のあるサイトに行けば、記念写真がたくさん見られるという記憶も残るにちがいない。

＊

名前はきわめて簡単にうつすことができる。うつすことで、自分がうつる気分にもなる。名前の中でも人名、人名の中でも有名な人の名前をうつすことは、最小最短最軽最強の引用である。

うつすことで、自分がその威を借りるだけでなく、その人物になった気分にもなれる。つまり、自分がうつるのである。うつされた有名な人の人名は、さらにその名前を見た他の人たちにも「うつる」を伝染させる。うつるはうつる。

人はうつるとうつすに嗜癖している。対象が、映像、文書、音声に関係なく、現在は「うつす」「うつる」が、端末さえあれば誰でもきわめて容易にできる時代になっている。嗜癖するなというのが無理なのである。

#言葉 # 日本語 # 音声 # 文字 # 名前 # 固有名詞 # 人名 # 地名 # 引用

映っている私、写っている私、移っている私

＊

映っている私、写っている私、移っている私

星野廉

2022年4月27日 13:08

人が自分を直接見たことがないというのは当たり前でありながら、ふつうは考えないことだと思われまゝ。でも、こういうことが気になる人がいます。ひとりだけですが、私も知っています。

私にとってきわめて近い人です。でも、見たことはありません。会っているような気はします。その人についてお話ししたいと思います。

ぶっちゃけた話が私のことなのですが、直接見たことがない私というよりも、鏡に映っているものであったり、写真に写ったものである「私」であるをご理解願います。

ややこしいことを言って申し訳ありません。じっさい、ややこしい話なのです。どうか、ややこしいのは私なのですけど。

目次

映っているもの

写ったもの

「ずれ」と気配

写っているもの

【挿入話】鏡の前では見るのではなくビビる

移っている

そこにはないものを見てしまう、置き換えてしまう

とっかかり

自分という気配

映っているもの

たとえば、鏡を覗きこみますね。映っているものがあります。いわゆる映っている人なのですが、正確にいうと人ではなく、人の映像とか姿であり、映った影なのです。

私にはお化粧をする習慣がありません。だから自分の顔や姿を鏡に映して、その鏡を覗きこむことはほとんどありません。朝、洗面所で顔を洗ったついでとか、シェーバーでひげをそったあとに確認のためにちょっと見るくらいです。

毎日、それも日に何度か、そこそこの時間を鏡の前で費やす人は大変だろうと想像します。お化粧なんて面倒ではないかと要らぬ心配をしてしまいます。お金もかかるにちがいません。

もちろん、お化粧が楽しいという方もいるはずです。お化粧という行為に何らかの価値を見出している人もいるでしょう。

＊

私の場合には、鏡を前にすると、つまり自分の顔や姿を見ると、自分が見えなくなります。自分であるはずの像は目に入っているのですが、見れば見るほどそれが何なのか分からなくなるのです。

自分だとは頭で分かっています。その姿と形は見えていますが、見留められないのです。認められないのではなく、見留められないです。目に留まっていない感じなのです。

ですから、鏡を前にしたまま目をつむると、目をつむる直前に見えていたはずの顔が像として残っていない、つまり残像がないのです。

特に顔です。着ている服とかは思い出そうとすれば何とか思い出せますが、顔を思い浮かべることができません。

念のために言いますが、いま話しているのは、鏡を前にしたまま目をつむる直前の自分の顔のことで、髪型や耳も思い出せません。首も自信がありません。

写ったもの

必死になって自分、つまりさっき見たばかりの自分の顔を思いだそうとしているのですが、なかなか浮かばないうちに、かつて写真で見た自分の顔が浮かんできます。

自分の顔ではなく、正確に言えば、写真に写ったものです。べつに正確にいうべきものでもないのかもしれませんが。

自分の顔を思いだそうとして、さっき鏡で見たばかりの顔の像ではなく、写真の像が優勢になってくるともう駄目です。そちらに意識が行くのか、写真の像ばかりが、頭か臉の裏か知りませんが、そこに浮かんでくるのです。

その写真というのは、証明書に貼るために撮ったものです。数年ごとに取り替えなければならない写真があって、数か月前に見た「最新の」私を撮った写真が頭に浮かびます。私の写真というと、それくらいしかないのです。

「ずれ」と気配

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが、鏡に映っているのは自分なのでしょうか？ 鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がします。

正確に言えば、時間ではなく、「ずれ」なのです。抽象である時間を人は「見る」ことができず、「前」と「いま」との「ずれ」として感知するしかない気がします。

この「ずれ」こそが私にとって具体的な自分の像なのかもしれません。残念ながら、「それ」は見えませんが、「それ」の気配を感じることはできます。

その「気配」に親しみを覚えます。愛おしくてたまらないくらいです。「自分」とは「気配」なのかもしれません。

写っているもの

以上、映っているものとしての自分つまり鏡像、写ったものとしての自分つまり写真の像、鏡に映っている「前」と「いま」の「ずれ」としての自分、そして「気配」としての自分——四つの自分についてお話ししました。

もう一つの自分を見ることができるようなのですが、残念ながら見たことはありません。

スマホの自撮りの画面に写っているものとしての自分のことです。

私には自前のスマホがありません。外出するときにスマホを借りて、電話機として使うだけです。それ以外の機能については使ったことがないので、知りません。

*

私のイメージする自撮りとは、要するにリアルタイムで見る写真です。リアルタイムに写っている自分の姿ということになります。しかも、動画として見ることもできます。

リアルタイムで見る鏡像と、過去の自分が写った写真の中間に位置するものとして考えていますが、よく分かりません。

【挿入話】鏡の前では見るのではなくビビる

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが、鏡に映っているのは自分なのでしょうか？ 鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がします。正確

に言えば、時間ではなく、ずれなのです。抽象である時間を人は「見る」ことができず、「前」と「今」とのずれとして感知するしかないとも言える気がします。

この場合のずれは印象であって計測も検証もできません。その意味で、このずれは「似ている」に似ています。念のために言い添えますが、鏡だから「似ている」に似ているわけではありません。鏡には「似ていない」も映るのです。

「似ている」を見るためには、同時に「似ていない」も見ていなければならないということです。ここは似ている、ここは似てないというふうに見ていないと、見えないとも言えます。

白と黒の細かい点からなる絵や写真（文字でもいいです）は、濃淡はあるにせよ、白の点と黒の点を同時に見ていないと形が見えないと思われませんが、それと似ているのではないのでしょうか。

*

鏡を前にしてのお化粧は、刻々と目の前に現われるずれとの追っかけっこです。先を越されないように必死で見ていなければ、顔は見えないし、化粧品ののり具合を確かめることはできない。だから、ずれを深く受けとめている暇も余裕もない。

お化粧をする時には、鏡の中の自分、つまりずれとは妥協するしかないのです。いつまでも眺めているわけにはいかない。考えこんでいる暇もない。ま、いっか、と唇を噛んでつぶやいてその場を去るしかない。ずれとまともに向き合えば喜劇や悲劇や惨劇になります。

数年前の写真を見るのは恥ずかしいものです。恥ずかしくてまともに見られない。髪型も化粧も服装もださくて見るに堪えない。ただし顔そのものはあえて見ないだけの体感的な知恵がそなわっているようです。というか、おそらく見えないのです。

ずればかりがやたら目につく。だから、顔や姿は目に入らないと言うべきかもしれません。映っている人を卒業したという優越感と、それがちょっと前の自分だったという屈辱感のあいだで揺れるとも言えるでしょう。要するに、ちょっと前の自分は恥ずかし

いと同時に憎い。ちょっと若いから小憎らしい。つまり、ライバルなのです。

免許証とか証明書の写真が好例です。恥ずかしさと屈辱だけが映っている。だから正視できないし正視に耐えない。これは、ずれがダイレクトに襲ってくるからではないでしょうか。恥ずかしさと悔しさ、つまりずれを感じとるだけの余裕ができていとも言える気がします。

昔の写真とか子どもの頃の写真だと、ずれをもろに受け入れる余裕ができていて、見てもそれほど恥ずかしくはないし憎らしくもないし悔しくもない。むしろ、懐かしくて見入ることがある。もはや、他人となった自分。まあ、かわいい。この子、誰？
なんてぐあいに天使を見る人もいます。我が子や甥っ子や姪っ子や孫を見るのに似ています。似ているけど、自分ではない誰か。いまの自分以外に自分はいないはずなのに、自分がそこに映っている――。

＊

人は鏡や鏡に似たものに取り憑かれているとしか思えません。

鏡に我が身を映し、どんなに頑張ってみたところで、しょせん鏡像は幻でしかない。鏡に映った像と、実像あるいは実物とは似ているが、同じではありません。鏡像を見て我が身を知ろうというのは、冷静に考えれば正気の沙汰ではない気がします。

絵や写真や映画や動画は、鏡に似ています。人はそれらを前にして、鏡に面すると同じ反応をします。見る、見入る、かんがえこむ、かんがみる。ただ見るだけではないということです。物思いにふけったり、考えるのです。

＊

飛躍します。

絵、写真、映画、動画は、実は自分を映すためのものではないでしょうか。世界は自分に似たもので満ちているから、風景を描いても撮っても、人以外の生き物を描いて撮っても、他人を描いても撮っても、そこに描かれている映っているものは自分なのです。広義の自分。複数形の自分。おそらく赤ん坊にとっての「自分」と同じ。

人は自分に似たものを目にすると、幼児返りや赤ちゃん返りをする。たぶん、ごく短い間だけ、またはとぎれとぎれに。人はいくつになっても、まばらな幼児、まだら状の赤ん坊なのです。

＊

鏡の前で、人は普通ではない精神状態になります。簡単に言うと、緊張してびびるのです。恐怖でおののくと言え、言い過ぎでしょうが、それに近い気がします。

鏡を前にして、人はビビるしかない――。

したがって、鏡の前の人は見ているわけではありません。ビビっているのです。だから自分が見えないのです。見えていると思っただけです。見えていない自分なんて気味が悪くて受け入れられないということでしょう。そんな荒唐無稽な、つまり馬鹿な話は拒否してしまうのです。

こういうことはよくあります。人が自分を守るために備わった習性だと思われます。錯覚や自己暗示を利用して、メンタルが受けるダメージを阻止するのです。

＊

鏡、絵、写真、動画がどんどん増えていく。人が真似てつくり、複製するから、当然のこと。鏡は自然に増えるわけがない。人がつくる。

つくるだけはない。似せて、真似てつくる。何に似せ、何を真似るのかといえば、鏡。鏡に似せて、鏡を真似て、つくる。どんどんつくる。

世界は鏡に満ち満ちている。人は、ふだんは、それに気づかない。意識しない。だから、よけいに増えていく。

言葉も鏡。人も鏡。人は自分に似たものを真似てどんどんつくっていく。

＊

人はそこにはないものを見ます。鏡、絵、写真、動画が、そうです。見えないはずのものを見ることもあります。可視化とか見える化なんて手品を発明したりもします（手品ですから種はあります、見えないものを見る化しているのではなく、見えにくいものを見るように錯覚させているだけです、だいたいにおいて「見える」とはヒト固有の視覚機能を用いた錯覚であり錯視なのです、他の生き物と比較して相対的なものであり、絶対的なものではなく限定付きだという意味です、簡単に言いますと、見える化とは制作者（作者がいるんです）が見せたいテーマを図解にしたものです、あくまでも絵なのです、えっ、なんて言わないでくださいね、うまい絵にだまされない人はいません、だまされた時点で絵だと思っていないからです、いま言っている「見える化」の絵には、写真や映画やビデオも含まれます、あれらは人が作った絵です、撮影や現像や編集や加工や修正をなさっている人はあれらが作られた絵だと知っているはずですよ）。

見えないものを見るのですから、人は見えているはずのものを見ていないことがあっても不思議ではない気がします。

＊

見えないものを見る場合の「見えないもの」というのは、たとえば、意味やメッセージや筋書き（物語）やテーマや思想のことです（どれもが自分がすでに知っているお馴染みのもので見新しいものはありません、知らないものを人が見ることはありません、というか知らないものは見えないのです、だから知っているものに置き換えて見ます）。そこには映ったり写っていないにもかかわらず「つい見てしまうもの」なのです。

つい見てしまう、意味やメッセージや筋書き（物語）やテーマや思想に共通する点は何でしょうか？ ぜんぶ自分が見たいものだという共通点があります。自分が見たいものを、つい見てしまうのです。それが「見えないもの」です。

その「見えないもの」を見ているとき、人はたぶん「どこかに移っている」と思われます。鏡や写真や画面のある「ここ」や「そこ」にはいないという意味です。

難しい話ではありません。不思議な話でもありません。いまのあなたがそうです。

気がつきましたか？ お帰りなさい。

では、また行ってらっしゃいませ。

【※「挿入話」はここまで、です。】

移っている

話を戻します。

鏡を覗きこむとき、人は映っているというよりも移っているのではないのでしょうか。

身体は映っているのかもしれませんが、心や気持ちや魂は移っているのではないのでしょうか。

「どこか」に移っているのかもしれませんが。

その「どこか」は「何か」や「誰か」と同様に、保留の言葉です。特定はできないから「どこか」と保留するしかない気がします。

そこにはないものを見てしまう、置き換えてしまう

人はそこにはないものを見てしまいます。鏡、絵、写真、動画が、そうです。見えないはずのものを見てしまうこともあります。つまり置き換えてしまうのです。

*

.

●

*

●

●

＊



＊

以上、三組の二点が描いてありましたが、その各二点に人は何かを見てしまいます。

・



たとえば、平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えて見る
ことがあるでしょう。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景というふう
に連想を呼びさ
ます気がします。



上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、
2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。



今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるか
もしれません。大きい、小さい、ですね。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなとこど
も。人と犬。人とペット。この国とあの国。遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。
「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした
目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

こうした連想も、置きかえでしょう。置き換えは関係性とも言えます。関係性には実

体はありません。抽象的な概念です。その実体のないものを、人はたとえば、二つの大きさの異なる点に見てしまうのです。

とっかかり

「何か」に、「それではない何か」を見てしまう。

その「それではない何か」がとっかかりです。何かを見るとき、人には「とっかかり」が必要です。「見えてしまうもの」、つまり「置き換えてしまうもの」が必要だとも言えます。

「とっかかり」がないと不安になるからかもしれません。「とっかかり」とは、意味や関係性や筋書き（物語）のようなものとイメージしています。

上の三組の二点で見たように、「そのもの」を見るのはとても難しいのです。「何か」に置き換えてしまいます。

＊

その「何か」とは、自分がすでに知っているもの、自分が無意識に見たいもの、見ることで自分が安心するものです。

（大切なことなので繰り返しますが）ざっくりと言えば、意味や関係性や筋書き（物語）のようなものとイメージしています。

それはたぶん「見る」のでも「見える」のもなく、むしろ「見てしまう」、正確に言えば「置き換えてしまう」のです。

「見てしまう」のですから、無意識にとっさに見てしまうのです。ここがいちばん大切だと思います。

上の各二点という、いわば「空っぽ」に何を「見てしまうか」つまり「置き換えてしまう」は人それぞれで、本人の言葉による証言以外に確認はできません。つまり検証はできませんが、各人の証言をもとにある程度のコンセンサスが形成されることは大いにありえます。

＊

じっさい、そうなっている気がします。みなさんも、自分のまわりを観察なさってみてください。

もちろん、そのコンセンサスも、局所的なもので、いくつかの集団に分れるだろうし、その集団の成員もつぎつぎと変わる気がします。私の周囲を観察した結果ではそうなっています。

何が覚えてしまうかは、ふいに頭に浮かぶ印象（なにしろ「見てしまう」つまり「置き換えてしまう」のです）ですから、各人もよく分かっていないからでしょう。刻々と変わる可能性も大です。

自分という気配

話を鏡に戻します。

鏡に映っているもの（つまりいわゆる自分の顔）を目にすると、私はどこかに移っています。そんな私は頭で自分の顔だと知っているもの、つまり知識（情報でもいいです）としての自分を目の当たりにしてビビってしまいます。

「これは自分なんだ」と、鏡に映った像（私自身ではありません、像であり影です）を「自分」に置き換えてしまいます。私が人間だからでしょう。

頭では、鏡の像だと分かっています。知ってもいます。でも、納得はしていないようです。不安とおののきの中にもいえるとも言えます。

鏡を前にした私はふつうの状態ではないのです。あえていえば、どこかに「移っている」のです。

そんな私にとって自分とは気配なのです。

*

不安とおののきの中にいる。平たく言えば、ビビっている私は、よく目をつむります。自分の気配に耳を澄ませます。自分の体の動き、体の中、体の表面、体のまわりで起こっていること、生じていることに集中しようと努めます。

目をつむったまま、自分の手と指でできる限り、自分の体をあちこち触ってみます。舌に意識を集中して自分の口の中を舌でさぐることもあります。嗅覚に集中してみることもあります。

五感はそれぞれを意識的に集中しないとなかなか感知できません。意外と難しいのです。自分というものが、これほどままだらない、つまり思いどおりにならないものなのかと苛立つこともあります。

*

目をつむっているから、当たり前だと言われそうですが、この気配としての自分が、鏡に映っている影とはぜんぜん違うことは確かです。目に映っている自分だけが自分ではないと言いたいです。

自分が見えないという私事にお付き合いいただき、どうもありがとうございました。

*

この記事は、三本の記事の一部を再編成し加筆したものです。

#私小説 # 小説 # 鏡 # 写真 # 自撮り

とっかかり

＊

とっかかり

星野廉

2022年4月24日 11:19

目次

意味という空っぽ

努力目標

抽象画

とっかかり

延々と続く迂回、または脱線

抽象、具象

「ようなもの」を作文する

意味という空っぽ

何かを見るとき、人にはとっかかりが必要だという気がします。とっかかりがないと不安になるからかもしれません。とっかかりとは意味のようなものだとイメージしています。

「意味だ」と言い切るわけにはいきません。意味のようなものというふうに、「ようなもの」という言いまわしを使って迂回するしかないのです。「意味」という言葉が空っぽだからです。

空っぽなのは、おまえの頭だよ。そう言われるとそうかもしれない、いや、そうにちがいないと思います。

この記事は、空っぽの頭が、空っぽ（意味のようなもののこと）について考えているものです。

ちなみに、辞書に載っているのは意味の語義であって、意味ではありません。ここで言っている意味というのは、「この単語の意味は何？」という場合の意味に加えて、「人生に意味なんてある？」というときの意味です。

例文で見ると後者の意味の「空っぽ感」がよくお分かりになるのではありませんか。そんなものがあるわけがありません。

意味に意味なんてありますか？

レトリックはさておき、やっぱり空っぽなのです。空っぽが言うのですから、意味はありません。

努力目標

何かを目にして、その姿なり形なり様（さま）を認めるときには、取りかかっているのです。さもないと、ぼんやりとながめていることになります。

「ああ、これは〇〇だ」と言葉にしたときには、言葉の世界に入っているように思われます。「ように」「思われる」のであって、これも迂回するしかありません。

「本当に」とか「真の」とか「まさに」は私も使いますが、言葉の綾であって、ぜんぜん「本当に」でも「真の」でも「まさに」でもありません。努力目標なのです。

「真の」とか「本当の」と言えば言うほど、嘘っぽくなるのです。「本当の」とか「真の」という言い回しを見たら、あるいは耳にしたら、「そうじゃないんだ」と考えれば馬鹿を見ないかもしれません。

「真の」とか「本当の」とは努力目標であり、景気づけだとも言えます。なにしろ、空っぽの頭が空っぽの文字に空っぽの意味を求めているのですから、努力目標を定め、それを口実にして景気づけ（虚勢を張ること）をしないことには、人間なんてやっつけられ

ないのです。

私のことです。ひとさまのことは知りません。

抽象画

抽象画と呼ばれているものがあります。抽象画がありますとは言えません。口が裂けても言えません。「と呼ばれているもの」（「らしきもの」のたぐい）があるのです。「抽象画」という言葉は空っぽなのです。

辞書や事典に載っているのは語義です。そう決めたのです。誰が決めたのかは知りませんが、決めたから載っているのです。語義というのは建前なのかもしれません。

白紙の辞書や事典を出版するわけにはいかないからです。だから、無意味の意味や意味の意味も語義として辞書に載っています。

冗談はさておき、抽象画と呼ばれているものはとっかかりがないものの典型だと思います。

「抽象画とはとっかかりのない、またはとっかかりが見当たらないものである」という語義はどうでしょう。意味ではなく（意味なんてありません）、語義（建前とか努力目標のこと）です。

どこから手をつけていいのか、どこから目をつけていいのか不明ということです。

「抽象画とは訳の分かんない絵である」なんて語義があったとすれば、なかなか正直で好きになりそうです。

*

冗談はさておき、抽象画が具象画であることは確かでしょう。具象画にとっかかりが

ない場合に、抽象画と呼んでいるのです。

それが芸術性（芸術ではなく芸術性）や芸術っぽさ（芸術ではなく芸術っぽさ）の「性」であり「ぽさ」なのかもしれません。

万が一抽象画だと自ら称している作品があるとすれば、「確信犯」というよりも、やらせではないでしょうか。芸術界でしか通じないであろうギャグでしかありません。

「何描いているの？」「抽象画だよ」

「何書いているの？」「難解で抽象的な現代詩」

「何書いているの？」「難解で晦渋な哲学エッセイ」

まさか、そんなことはないと思いますが、万が一あったとすれば、「らしさ」や「性」や「ぽさ」を求めているにちがいありません。ギャグです。

とっかかり

*

.

●

*

●

*

●

.

*

以上は、「空っぽ」という記事から引用しました。

空っぽが空っぽを引用したわけです。

三つのというか、三組の二点がかいてありますが、その各二点に何を見るかが「とっかかり」です。意味や関係性や物語が立ちあらわれるという美辞麗句も可能です。

見るためには、取りかからないと見えないと言えお分かりいただけるでしょうか。上の各二点という「空っぽ」に何を見るかは人それぞれです。

延々と続く迂回、または脱線

空っぽにどんな意味を見るかは人それぞれですから、その意味は保留して、あえて言葉にするなら迂回するしかありません。

意味を断言、つまり「こうだ」と言い切っても迂回していることに変わりはありません。言い切っただけです。

言葉を使うことでわざわざ迂回しているのです。言葉は迂回の道具なのです。したがって、いまも迂回になります。

とっかかりは始まりです。ああでもないこうでもない、ああだこうだの始まりなのです。迂回の始まりです。何かが決まって一件落ち着いたわけでありません。

とっかかりとは、多数の他者による「ああでもないこうでもない、ああだこうだ」という延々と続く迂回（こうなると脱線と変わりません）に参加することだ、なんていうものなかなか言えている気がします。

抽象、具象

抽象とか抽象的という言葉がありますが、取りかかる余地がないという感じでしょうか。とっかかりがないものを難解だと感じる人もいます。

難しそうだと珍重されるという風潮もあります。

「抽象的だね」、「抽象的すぎて分かんない」、「難解ですな、ふむふむ」、「うーむ、難解というか晦渋ですね。頭をかかえますわ」、「御作は私には難しすぎて、とてもとても……」

抽象というのは具象に対する印象のようです（韻を踏んでいます）。あくまでも具象であり具体です。見る対象がない場合には、抽象とか抽象的だとは言われないからです。

何か具体的な形や模様やありさまを目にして、「抽象的だ」「これぞまさしく抽象だ」なんて言うわけです。

それが絵であれば、褒め言葉になるかもしれません。試しに、抽象的な絵、つまり訳の分からない具象を描いてみてはいかがでしょうか。

「ようなもの」を作文する

絵心のない方は、抽象的な文章、つまり訳の分からない文章を書くのもいいかもしれません。

訳の分からない文章を書くのに文才が必要なのかは不明ですが——ある程度の文彩（言葉の綾・レトリック）は必要な気がします——、ペンと新聞や雑誌があれば書けそうです。

書けそうとか、書けるといふか、賭けるのです。

新聞を床に広げて、ペンを上から勢いよく落とすなり投げるのです。ペンの当たった文字とか言葉をメモして、組みあわせて作文します。

詩のようなもの（詩ではありませんというか、詩というものはありません、小説というものが無いと同じです、小説のようなものがあるだけです、誰もが「ようなもの」や「らしいもの」を求めるからです）が書けるかもしれません。詩というジャンルは、じつに懐が深いのです。

文字は具体的なものです。インクの染みであったり、画素の集まりであったりします。形もあります。目に見えます。

でも、文字は空っぽなのです。その空っぽにとっかかりを見つけて読んでくれる人がいるはずですが、とっかかりが見当たらなければ、「抽象的だ」「難解だ」と褒めてくれる人もいないにちがいません。

どうでしょう。書けそうですか？

書けそうというか、書けるというか、賭けるのです。じつのところ、かけるしかないようです。

運よく誰かに引っ掛かるかもしれません。とっかかりはひっかけりなのです。運であり賭けなのです。魚を針に掛ける釣りと同じです。

#言葉 #日本語 #小説 #文字 #とっかかり #文章 #抽象画 #作文 #意味

過剰で過激な想像力

＊

過剰で過激な想像力

星野廉

2022年4月18日 09:24

「映す」も「写す」も、姿だけでなく心や魂を「移す」ということで、今回はまとめたと思います。

眠れない夜の遊びにお付き合いいただき、ありがとうございました。
(拙文「眠れない夜の遊び」より引用)

昨夜もなかなか眠りに就けなかったので、うとうとしながら考えたことを思いだして言葉にしてみます。

目次

地面に映る

鏡に映る

人工の影

影を写す

言葉は最強の人工の影

過剰で過激な想像力

想像力を消していれば、ボタンが押せる

地面に映る

木が地面に映る。
木の影が地面に映る。
木の姿が地面に影として映る。

実際問題として何が移るのでしょうか。移動という意味です。影が映っているわけですが、その影って何ですか？

たぶん理系の問題みたいなので、理系的な発想ではなく考えてみます。光とは何かとか影とは何かなんて、私には荷が重すぎます。わくわくしません。

わくわくするどころか難しそうで気持ちが萎えてしまいます。

*

物が移っているわけではないですよね？ 見た目で考えましょう。体感で考えましょう。それしか私にはできません。

姿が影として、その輪郭だけが歪んで地面にうつっている。いまズルをしました。映っているのか、移っているのか分からなくなったのです。

ひらがなは便利ですね。漢字と違って、分からないところを保留できるのです。ぼかせるのです。ひらがなモザイク説。

*

輪郭はいいですね。輪郭がうつる。木という物、つまり本体は移っていない。

これは確かでしょう。たぶん。

なんか変です。

輪郭じゃなくてシルエットではないでしょうか。輪郭は枠で、その中が塗りつぶされている感じですから、シルエットに訂正します。

*

木が地面に影として映る場合には、木という本体はそのまま、シルエットが地面にうつる。

あっさりとしら一と書きましたが、不思議ですね。いったい何が起きているのでしょうか。謎ですから、なぞるしかなさそうです。空（くう）をなぞるのです。

想像するのです。像を想いえがく。イメージを抱く。抱きしめるのです。

鏡に映る

木が水面に映る。

木の姿が水面に映る。

実際問題として、何が移るのでしょうか。移動という意味です。地面の影とは違って、水面だと条件がよければ鏡みたいに映るわけです。

木の姿が鏡に映る。

これとほぼ同じではないでしょうか。映っているのは、姿であり、映像であり、鏡像とも言います。鏡像は私にとっては嫌な言葉です。理系ばいですよ。

辞書で調べてみました。やっぱり理系です。しかも数学とも関係あるみたいです。それに私の苦手な「鏡像段階」なんて言葉も載っていました。こういうもっともらしい用語はパスします。

*

物が移っているわけではないですよ？ 見た目で考えましょう。体感で考えましょう。それしかできません。

鏡に木が映っているのをイメージします。想像するという意味です。鏡を持って木のそばに行く気にはなれないのです。そんなところを近所の人に見られたらどうしましょう。

ただでさえ変人に見られているのに、へたすると通報されますよ。

「近所のおじいさんが、手鏡を持って桜の木のそばに立ってキョロキョロしています」

うちの居間でおとなしく想像しているほうが、ぜったいによさそうです。だいいち安全です。

*

木の姿が鏡像として鏡に映っている。木という本体の何かが移っているわけではなさそうです。木が傷ついたり、木の一部が欠けたり、減っているとは考えにくいです。

鏡像って何でしょう。理系的には考えられないので、想像しつづけます。左右が反対なんですよね。ところで、なんで上下はそのままなのでしょう。

なんだかとんでもない方向に行きそうなので、上下は考えません。

鏡像という言葉の意味不明なままに保留して使いつづけるのがいちばん、私にとって現実的な方法みたいです。

*

木が鏡に鏡像として映る場合には、木の本体はそのまま、その左右反対の鏡像が鏡にうつる。

あっさりとしらーっと書きましたが、不思議ですね。いったい何が起きているのでしょうか。

人工の影

ちょっと待ってください。

鏡に映す像は意識的にうつします。これは「写す」ではないでしょうか。さらに言うなら「移す」です。そもそも鏡は人が作るものです。人の作った物に人が意識的に像（姿）をうつすのです。

映像、影像、いや、むしろ影（かげ・えい）と書きたいところです。自然にできている影と、人工的に作った影とは違うと思います。

＊

作られた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。

作られた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとは作られたものです。物語であり、フィクションのことです。写真であれば目的やテーマです。

（拙文「投げた影に影を重ねて見る」より引用）

そうでした。そういうことです。

＊

人は影に意味を見るのです。自然の影であれ、人工の影であれ、その影に意味を見るのです。この意味には、枠、筋書き、物語、イメージ、目的などが含まれます。

各人が影に勝手に意味を見るのですから、個人的なものでまちまちです。意味は人の中にあるものですから、確認も検証もできません。何らかの判断をするためには、各人の証言が必要です。

証言は言葉という形をとります。話し言葉であったり、書き言葉、つまり文字です。

影の意味は、文字として固定され、「残る・残す」ことが圧倒的に多いと思われます。

＊

影に何がうつっているかは、一概に言えるものではなく、各人がそれぞれ影に何を見るか、正確に言えば何を五感で知覚するかである、なんて言えそうな気がします。

もっと正確に言えば、影で各人のいadakイメージは刻々と変わるにちがいありません。猫を検索して、画像検索をするといろいろな猫の画像が出てくるのに似ています。一定していないし、固定していないように思います。

影に何が移っているかは、客観的にも普遍的にもとらえられないということですね。各人による言葉による証言しか、判断材料はないわけです。頭の中を見るわけにはいきません。

しかも証言は当てにならないでしょう。刻々と移り変わりつつある自分の中にある「何か」を言葉にするなんて土台無理なのです。だいいち、言葉はその「何か」ではないのですから。

言葉はお茶を濁すために存在するようです。

＊

とはいえ、言葉は大したものなのです。後で触れることになりますが、言葉によって、脳が暴走するのです（想像力のことです）。その起爆剤が言葉ですから、捨てたものではありません。

影を写す

人は影を意識的にうつします。影を作るのです。自分で作った影に意味を見たいからでしょう。正確に言えば、人は自分が見たい意味を見るために影を作るのではないのでしょうか。

ぜったいにそうです。さもなければ、わざわざ「鏡」（比喩です）を作ったり、その鏡に「影」（比喩です）をうつすなんて、面倒なことはしません。

人は自分の見たいものを見るために影を作り、あるいは見つくろった影を持ってきて、その影に自分の見たいものを見て、気持ちよくなりたいに決まっています。ぶっちゃけた話が、やらせなんです。

自分を基準にして人類を語って、ごめんなさい。

*

影を写生する。

絵による写生、描写。言葉による写生、描写。

この場合には、本体つまり被写体、写される対象は無傷のはずです。何かが減ったり加わったり、変化することはないでしょう。

せいぜい、写生される間に時間的な拘束を受けて、劣化する、腐敗が進む、あるいは成長するぐらいでしょうか。

*

影を写真に撮る。

静止影像としての写真、写真撮影。レントゲンやCTやMRIも含めていいと思います。

フィルムによる映画の撮影、デジタル映像による動画。これもCTとかMRIがある気がします。詳しいことは知りません。

この場合には、被写体は何らかの変化をこうむるようです。放射線を浴びるなんて、目に見えないし、その後遺症は時間の経過を待たないと確認できそうもありません。

あ、そう言えば私は、この種の撮影の前に何度も造影剤を飲んだことがあります。あれって体に何らかの影響を与えているはずですが、大丈夫なのでしょう。

フィルム撮影やデジタル撮影は、ただ見ているだけでは済まない気がします。人は撮りたい絵を取ろうとしますから、被写体をいじったり、移動させたり、光や風など環境を変える可能性が大です。

＊

映画や写真にはぜんぜん詳しくないのですが、撮影には加工、修正、編集がつきものだと聞いています。

よく考えると当たり前です。写真や動画は被写体である事物ではないわけです。

そこに特撮、漫画、アニメ、CGといったものを考えあわせると、訳が分からなくなります。

私には荷が重すぎます。研究でも探求でもなく、私は好きで楽しむためにやっているのですから、知らないことを調べて深入りはしません。

寝入り際にネット検索なんてできません。いまは眠れない夜のとりとめのない思いを思いだしているのです。

言葉は最強の人工の影

人はなんで言葉を使うのでしょうか？ 伝えるため、つまり伝達のためだけではない気がします。

人は気持ちよくなりたいから言葉を使うのだと思います。具体的には、言葉を入れたり出したりするのです。言い換えると、読んだり、聞いたり、見たり、触れたり、話したり、叫んだり、詠んだり、歌ったり、唱えたり、論じたり、書いたりします。ここには「伝える」も入ります。

伝えるとは他人とつながりたいからする行為ですから、やはり「気持ちよくなりたい」に通じると考えられます。じっさいには伝えようとして伝わることは難しいし不可能なことが多いのですが、それでもめげずに人はせっせと伝えようとしています。

読む、聞く、見る、触れる、話す、叫ぶ、詠む、歌う、唱える、論じる、書く、伝える
――。

どれも気持ちがいいです。適度に苦しいと、これまた気持ちがいいです。適度の締め付けや縛りは気持ちがいいものだということを、みなさん日常的に経験なさっているのではないのでしょうか。ああきつい、でも気持ちいいわ、なんて。

気持ちよくなるためにたしなむものに嗜好品と薬物がありますが、人にとって最高で最強の嗜好品であり薬物は何でしょう？ 言葉です。

人は言葉という最強の嗜好品であり薬物を楽しむために、さまざまな嗜好品や薬物をたしなんだり摂取します。

コーヒーあるいはお茶を飲みながら詩を書く、あるいは詩を読む至福の時。お酒をちびちびやり、好きな小説を読む最高の時間。書きものや読書の途中で煙草を吸う、これほど心が安らぐ時の過ごし方はない。そういえば、いわゆる麻薬やドラッグを服用して書いたと言われる文学作品は多いです。

お芝居や映画や楽曲やテレビ番組やネット上の映像にも、言葉がともないます。動きに満ちたスポーツも、言葉による解説と言葉で述べられるドラマがあってこそ盛り上がります。映像や音楽や動作を一種の言葉と見なす人もいます。

持論ですが、人が臨終という究極の時に必要とするのは、あるいは頭に浮かべるのは顔と言葉だと思います。この顔については、またいつか書きたいです。

(拙文「続・外にあって、外からやって来て、外であるもの」より引用)

*

話し言葉である音声も、書き言葉である文字も、事物とはぜんぜん似ていません。少し似た感じがする身振りや表情という視覚言語にくらべても、似ていない度ははるかに高いです。

それなのに音声と文字による意味の喚起力、つまり意味、枠、筋書き、物語、イメージ、目的などを呼びさましたり、さらには音声と文字をきっかけに、それらの意味を勝手に生み出す力には、想像を絶するものがあります。

そうです。想像力のことです。

この文字の呼びさます、そして文字が勝手に生み出す力は、文字を学習した成果なのでしょうが、そのように言葉で置き換えたところで、不思議さは解消されません。

過剰で過激な想像力

人の想像力は、過剰で過激なのです。逸脱しているのです。

だから、「猫・ねこ・ネコ・neko」という文字を見て、各人が勝手に猫を想像するのです。

「猫・ねこ・ネコ・neko」という文字は猫に似ていますか？ 「ねこ」と発音して、その音は猫に似ていますか？

ぜんぜん似ていないのに、猫を想像するのです。あっさり書きましたが、すごいことではないでしょうか。腰を抜かしても罰は当たらないと思います。

＊

持論なのですが、言葉は人の作った最強の映像、つまり影だと思います。

話し言葉（音声）や書き言葉（文字）によって、意味という像（イメージ・印象）が浮かんだり、意味の暴走が始まるのですから、これは絵や影や写真や動画と同じく映像と見なしてかまわないと思います。

そんなわけで、写真と動画の話に移ります。

＊

あなたは愛する人の写真を踏めますか？ その人ではなく、ただその姿が写ったものですよ。

愛する人の動画がけなされても平気ですか？ 動画を変なふうに加工作られて、冷静でいられますか？ その人ではなく、その姿が映っただけのものですよ。

あなたの愛するキャラクターやフィクシヤスな人物の映像が汚されて、憤りや悲しみを感じませんか？ キャラクターやフィクションの人物には実体がないのによ。

想像力を消していれば、ボタンが押せる

愛する人の写真を踏める人は、想像力が欠如しているか、想像力を消している人でしょう。

想像力が欠如しているか、想像力を消していれば、平気で文字としての人を、数字としての人を処理したり処分できます。

さらには、文字や数字としての人を大量に処分するボタンを押せるでしょう。いろいろなボタンがありますが、もう何度も、無数に押されていますね。

最終ボタンだけは押す結果にならないでほしいです。祈っています。

Imagine.

#日本語 # 漢字# 和語 # 大和言葉 # 文字 # 漢字 # 鏡 # 影 # 写真 # 映像 # 映画 # 動画# 想像力

うつるとうつすで影を編む

＊

うつるとうつすで影を編む

星野廉

2022年4月15日 13:25

目次

映る、移る

移る、移す

撮る、撮す、写す

写り（複製）、移り（拡散）、残る（保存）

影絵、幻影、「いる」

言葉を編む、影を編む

幻灯、幻影、映写

移っている

映る、移る

木の影が地面に映っている。

木の影が池に映っている。

上の二つの文で描写されている影は自然界に見られるものです。この場合の「木の影」は木の姿が映った影、つまり像のことであり、木そのものでも、木の姿形でもありません。

影が地面と池に映っています。太陽に照らされた物の姿、つまり像が光の現象として、地面と水面に映っているわけです。

これを「移っている」と考えることもできるでしょう。大昔の人（大ざっぱな言い方で恐縮ですが）は「移っている」と考えていたのではないのでしょうか。私の偏見かもしれませんが。

こどものころの自分は、「移っている」に近い気持ちで影を見ていたような気がします。

移る、移す

上の二文を少しだけいじってみます。

木の影が地面に移っている。

木の影が水面に移っている。

影が「映っている」ではなく、影が「移っている」にしました。「移る」というと、物の影や姿ではなく、本体が動くというイメージを普通はいただきますね。つまり移動です。

影が実体のように、つまり物として地面に、あるいは水面に移っているさまを思いえがいてみてください。

影が自立しているのです。本体の木とはべつに生きているのです。

*

もう少しいじます。

木が地面に移っている。

木が水面に移っている。

上の二文を見ていると、比喻のようにも感じられます。ただ、文字どおりに取って絵として頭に浮かようとすると、ちょっと戸惑います。すんなりとは視覚的なイメージにならないのです。

そこをうんと踏んばって、物としての実体が、地面に、あるいは水面に移っているさまを思いえがいてみてください。

なんだかシュールですね。不思議な世界、ファンタジーのような絵が目には浮かびます。

夢の光景のようでもあります。夢では何でも肯定されます。ありえないだけに、怪しげで妖しげでもあります。

とはいうものの、いったん、思いえがいてしまうと、不思議なもので、それもありかなという気分になります。当初の躊躇は消えて、いまでは難なくイメージできます。

慣れは恐ろしいものです。というか、想像力は大したものだと思います。想像力とは夢の片割れではないでしょうか。人の想像力は過剰で過激なのです。

撮る、撮す、写す

木の影が地面に映っている。

木の影が池に映っている。

上の二つの光景を絵に描いたらどうでしょう。写生です。

カメラで撮ったらどうでしょう。写真です。または映画とか動画です。

*

木の影が地面に移っているのを絵に描く。写す。写生する。

木の影が池に映っているさまをカメラで撮る。写す。撮影する。

これは「移っている」ではないでしょうか。影という実体のないものではなく、紙と鉛筆の粉、印画紙、フィルム、画素に形や模様として存在しているわけですから、「移った」という気がします。

気がするどころか、移った影は人の外にあって物として確認できるのですから、「移った」と言わざるをえません。しかも残るんです。

すごすぎます。こんなことをしているのは、この星でヒトだけです。人はとんでもないことをしているのです。

「写す」は「移す」であり「残る」。

何かに似ています。

写り（複製）、移り（拡散）、残る（保存）

分かりました。あれです。

後で触れることになるとと思いますが、文字に似ています。文字は、写り（複製）、移り（拡散）、残ります（保存）。

こんなものは地球上に文字以外にないのではないのでしょうか。人はこの時点でも、せつせつと写し、移し、残しています。

「なぞる」から、「写す」、「移す」、「残る」。ここまで出世した文字に感動しないではいられません。それにしても、なんでなのでしょう？　なんで、こんなことが起こっているのか、私にはさっぱり分かりません。

やっぱり「なぞる」は謎です。

影絵、幻影、「いる」

話を木に戻します。

木の影が壁に映っている。

これは影絵に近いですね。綺麗です。たしか、こんな景色を見たことがあります。長い塀に木々が映っているさまが目には浮かびます。記憶の中の風景なのでしょう。どこで見たのかは思い出せません。

木の影が障子に映っている。

この光景を見た記憶はありませんが、目に浮かびます。これも綺麗です。目に浮かぶというのは、勝手に「絵」を思いえがいている、つまり作っているのでしょうか。偽の

記憶みたいなものです。

壁や扉に映る木の影も、障子に映っている木の影も、影絵と似ています。同じではありません。影絵は、人が意識して作った影、つまり人工的なものです。

影絵、つまり人工の影の延長上に、写真や映画や動画があるとも言えそうです。

＊

人工の影は、「映った」よりも「映した」であり、要するに「写した」であり、さらには「移した」ではないでしょうか。

物を移動させるという意味ではなく、影をわざと作るという意味の「映す」、つまり「写す」は「移す」に思えてなりません。

「写す」と「移す」は人工であり人為であり、「映る」は自然界の現象だなんて、図式的にまとめたくなくなります。

人工の影は何を移すのでしょうか？ イメージ、意味、物語が考えられます。どれもが人の中にあって確認も検証もできないものである点に注目したいです。

でも、人はその確認も検証もできないものによって動きます。

これも確認も検証もできませんが、人工の影は心や魂も移すのではないのでしょうか？

あなたは、愛する人の写真を踏めますか？ 尊敬する人の動画がいたずらに修正や加工されて平気ですか？

人の想像力は想像を絶します。

＊

話を戻します。

影絵は自宅でも簡単に楽しめます。光源と手と指と壁があれば楽しめます。あと、必要なものは想像力でしょうか。

(さきほど述べたように、想像力は夢の片割れです。過剰で過激な想像力があるから、人は人なのです。人からこれを取ったら、何も残りません。)

手と指を動かして、壁に影を映してみる。いまちょっと居間でやってみましたが、わくわくします。懐かしさでいっぱいになりました。

まぼろしです。幻影です。影が動いているさまを目の当たりにすると、「移っている」を体感します。そのリアルさは「映っている」どころではないのです。

さらに言うなら、「移っている」どころか、そこに「ある」のであり、そこに「いる」のです。動いて「いる」のです。

言葉を編む、影を編む

言葉は事物の影

言葉は現実の影

言葉は幻実という影

言葉は事物の影であり、現実の影だと考えることができます。

事物も現実も容易にいじれないから、影である言葉を人はいじるわけです。言葉はある程度、簡単にいじれます。現実のままならさに比べれば、はるかに思いどおりになる気がします。

言うことを聞いてくれそうな影、それが言葉です。もちろん、人工の影です。

*

言葉をいじり、作文する。

作文では、書くというよりも編むのです。編んで模様や形や姿を作るのです。それが影です。

あくまでも言葉という影なのにもかかわらず、現実や事物の影に思えてきます。人には、とほうもない想像力があるからです。

表情、身振り、話し言葉、書き言葉のうち、書き言葉である文字こそが人の作った最強の影であり——絵や映画や動画なんて目じゃありません——、人の過剰で過激な想像力と相まって、この文明をここまで築きあげたのです。

上でも述べましたが、文字は、写り（複製）、移り（拡散）、残ります（保存）。最強の人工の影と言わざるをえません。

*

言葉をいじり、作文する。

文章を書くことは、影を編むのに似ている気がします。

いま、私は、うつるとうつすという言葉を使って影を編んでいます。いじれない自然界の影（現実）の代わりにいじれる人工的な影（言葉）を編んでいるのです。

空しくないとさえ嘘になります。影は空っぽなのですから。

その空っぽを満たすのが想像力です。人の想像力の過剰さと過激さを感じます。

幻灯、幻影、映写

話を木に戻します。

窓ガラス越しに見える木を指でなぞる。

窓ガラス越しに見える木をマーカーでなぞる。

指でなぞるくらいならいいでしょうが、ガラスにマーカーで線を描いたり、塗りつぶしたら、叱られるでしょうね。そんなお子さんがいても不思議ではありません。

これが車の窓だったら大変なことになりそうです。

*

ガラス越しに見える木を、いろいろな色のある水性のマーカーで描き写したとすれば、それはスライドではないでしょうか。適切な光源と、壁かスクリーンがあれば、立派なスライドであり、立派な幻灯になりそうです。

想像しただけでぞくぞくしてきました。小学生のころに、学年別の学習雑誌の付録で幻灯セットがあったのを思い出しました。スライドはセットに含まれて用意されていました。

説明の絵を読むのが待ちきれず、息をはずませながら、紙製の幻灯機を震える手と指で組み立てた記憶があります。たしか、懐中電灯を光源にするものでした。

昼間なのでカーテンを閉めて、白い壁をスクリーンにして幻灯を見たのです。なにか悪いことをするような、後ろめたい気持ちが湧いて、よけいにぞくぞくはらはらしたような気がします。

移っている

あのときのあれが、どんなスライドだったのかは忘れました。

色つきのかさかさぺらぺらした透明のセルロイドかプラスチックのようなものでした。その紙みたいなものが、壁にうつりました。思いだそうとしているのですが、スライドの絵はぜんぜん覚えていません。

気が遠くなりそうなぞくぞくした思いだけが、いまここによみがえっています。息が苦しいくらいです。

あれは「映っている」ではなく「移っている」だったといまになって思います。それが、いまここに「移っている」気がします。

ただ、いまここに移っているものが何かのはさっぱり分かりません。移っているという思いだけがあるのです。

この思いは心地よいです。官能的ですらあります。しばらく浸っていたい気分です。

これを言葉で影と呼ぶ気にはなれません。いたずらに手なずけたくないのです。名づけずに、そっとしておきたいのです。意味もストーリーも要りません。

#日本語 # 影 # 幻灯 # 写真 # 記憶 # 思い出 # 幻影 # 映写 # 文字

言葉と向きあう

＊

言葉と向きあう

星野廉

2022年4月13日 09:18

目次

日本語の言葉のイメージ

言葉のイメージ

「わかる」のイメージ

ローカルな言葉

普遍性、共通性、一方的な文化的影響の結果

母語の駄洒落を他言語で説明する

言語活動、駄洒落、掛け詞、比喩の根底には、こじつけがある

言葉と向きあう

日本語の言葉のイメージ

「うつる、移る、写る、映る、遷る」、「うつす、移す、写す、映す、撮す、遷す」。

こうやって眺めてみると、ずいぶんいろんなものが「うつる・うつす」に詰まっているなあ后感心します。とくに、「移る・移す」と、「写る、映る・写す、映す」の間に落差を感じます。

(拙文「綾にからまれる、綾をなでる」より引用)

こうしたイメージは日本語での話になります。「うつる・うつす」の普遍性を目指しているわけではありません。

「うつる・うつす」の普遍性を目指す——そもそも、これは矛盾です。日本語である「うつる・うつす」を対象とした時点でローカルなものを目指すことになるからです。

「愛とは何なのか?」「真理とは何ぞや?」「海とは何か?」も同様に、言葉を使う以上、その言語の枠の中での「話」、つまり言葉を使って作った話という意味での「フィクション」になります。お話なのです。

ある程度の検証が可能な数学や科学や技術という話——私に言わせると、これも言葉を使った物語であり「フィクション」です、言葉は言葉であり事物ではないからに他なりません——とは、話が違うのです。

言葉のイメージ

「うつる、移る、写る、映る、遷る」「うつす、移す、写す、映す、撮す、遷す」という日本語の言葉と向きあうとき、その言葉の音（おん）や文字という、人の外にあってある程度確認と検証可能な部分に注目するのは、わくわくする体験です。

なぜわくわくするのかと言えば、そうした人の外にある要素が、人の中にイメージを呼びさますからでしょう。

この場合のイメージとは、辞書に載っている語義（これはすべての人が知識として持っているわけではありません）の一部や、音と文字によって喚起される視覚的なイメージ（映像）の断片や、聴覚的なイメージ（音や声や振動）の断片や、触覚、嗅覚、味覚といった知覚的なイメージのことです。

こうしたイメージは各人が勝手にいただくものですから、人それぞれでしょう。確認や検証は、言葉による証言や絵に描くという形でしかありえません。つまり心もとないわけです。検証不能と言えるでしょう。もちろん、ハードルを低くすれば検証可能となるでしょうけど。

「わかる」のイメージ

以前に「わかる」という日本語の言葉を使って、ああでもないこうでもない、ああだ

こうだをやっていたことがあります。

そのときには、「わかる」に相当する、あるいは類似の英単語の語義や語源を見たり、日本手話やアメリカ手話における、類似の単語の身振りを調べたりしました。

「わかる」のイメージを探ろうとしていたわけですが、「うつる・うつす」でも同様のことをやれば、楽しいだろうと思います。とはいうものの、いまではそんな元気もありません。だいいち体力がついてきません。

いずれにせよ、こうした日本語以外の言語の類似表現を見る場合には、間違っても普遍性などという世迷い言の誘惑に乗らない慎重さが大切だと思います。

抽象という切り捨てをすればするほど、言葉の実相からは離れていくという意味です。絵空事になります。

ローカルな言葉

言葉はあくまでもローカルな（局所的な）ものなのです。ローカルな言葉を使う以上、普遍はありません。「世界史」があるローカルな（空間的にも時間的にも）視点に立ったものでしかありえないのと事情は同じです。

※「世界史」とは努力目標なのかもしれません。

また、普遍や真実を目指すためには、過去の人たちの証言（残っている資料やいわゆる古典だけでは絶対的に足りません）も必要ですから、タイムマシンが発明されるまで待たなければなりません。

超ローカルな視点である個人レベルでの言葉のイメージとたわむれることが、もっとも現実的な方法だと思います。

普遍性、共通性、一方的な文化的影響の結果

私にとって普遍性はとても重い言葉です。

たとえば、二国間あるいは複数の文化圏や地域レベルでの共通性を、普遍性と呼ぶのに躊躇します。

また日本のある芸術作品が（あるいは欧米のある芸術作品が）欧米において（あるいは日本において）評価された場合も、その共通性や評価の高さを理由に普遍性を語るのにも疑問を覚えます。

日本が欧米の影響をほとんど一方的に受けてきたという歴史的な背景があるからです。日本は欧米の植民地にはなりませんでしたが、アジア、アフリカ、中東、南北アメリカには、かつて植民地だった国や地域がたくさんありますね。

そうした地域の文化が欧米と似ている、あるいは共通しているのは、文化的侵略の結果であり（本来の文化は抹殺されたのです、抹殺された言語も数えきれないほど多くあります）、一方的な影響の結果であり、普遍とは言えないと思います。

以上の理由から、普遍性という言葉を使うさいにはハードルを高くしています。

ご理解いただければうれしいです。

母語の駄洒落を他言語で説明する

母語である日本語の駄洒落を、他言語を母語とする人に説明するさいの苦勞を想像してみてください。

私はかつて学生時代に、米国人とフランス人と中国人に、日本語の数語の単語の意味と語源、漢字の成り立ち（解字みたいなものです）を説明したことがありました。

ものすごく大変でした。私の力不足もあるのですが、私も相手もぐったりしまし

た。漢字の成り立ちでは、フランス人が大笑いをしました（解字を冗談だと思ったようです）。米国人は笑いをこらえていました。中国人は初耳だと言いました。

そのとき、私は日本語の駄洒落を説明している気持ちになり、はっとしました。あらゆる言葉の用法とありようは、その言語における「ギャグ」ではないかと思ったのです。だから、通じないのではないかと、と。

ローカルでしかありえない言語のローカルな現象を、やはりローカルな他言語を母語とする人に伝えるのは至難の業です。機会があるようでしたら、ぜひ試してみてください。体感するのがいちばんです。

言語活動、駄洒落、掛け詞、比喩の根底には、こじつけがある

よく考えれば無理はないのです。

ねこという発音と猫は似ていますか？ 猫という文字と猫は似ていますか？ cat と猫は似ていますか？ 似ても似つかぬもの同士を結びつける行為が言語の根っこにあります。

似てもいない、事物と音声と文字をつなぐ行為をこじつけと呼ばないで、何と呼べばいいのでしょうか？

必然はないのです。たまたまそうなっているだけです。言語学を持ちだすようなたいそうな話ではありません。単純明快な話なのです。

だから、別の言語のギャグは説明してもなかなか通じないのです。こじつけが通じたら、そのほうがよほど不思議です。

奇跡と言っていいでしょう。不思議すぎて超越者の存在を感じてしまいます。

*

似ても似つかぬもの同士を結びつけるというのは、駄洒落や掛け詞や比喩の根っこにあるものです。

凧と蛸と豚臍は似ていますか？ 猿と去るは似ていますか？ 川と皮は似ていますか？ どれも同音なんです。たまたまそうになっているだけです。

「それは「きて」じゃなくて、カイトって読むの。たこのことよ」「どのたこ？」「……」

……。

猿が逃げた。去る者は追わず。

なんちゃって。

「川にカワウソの皮が流れて行く！」「うそーっ！ かわいそう！」

なんちゃって。

大変失礼しました。

いまの萎えるほどくだらない駄洒落を英語に直せますか？

言葉と向きあう

言葉と向きあう。多くの人にとっては母語と向きあうことが日常的に体験できる言葉との付き合いだと思います。

その付き合いでは、ローカルな部分、つまり抽象ではなく、具体的に音や文字に接して、そこから呼びさまされるイメージや記憶と徹底的に付き合うことが、いちばん現実的な言葉との触れあいではないか。そんなふうに私は感じています。

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 母語 # イメージ # 駄洒落 # 掛け詞# 比喩

「そっくり」という、まぼろし

＊

「そっくり」という、まぼろし

星野廉

2022年4月6日 08:44

みなさん、猫を思いうかべてください。犬でもでもいいです。

思いうかべましたか？

今度は、「猫、ねこ、ネコ、neko」と「犬、いぬ、イヌ、inu」という文字をご覧ください。

次に、「ねこ」と「いぬ」を発音してみてください。

＊

「猫、ねこ、ネコ、neko」と「犬、いぬ、イヌ、inu」という文字は、あなたの思いえがいた猫と犬に、それぞれ似ていますか？ 文字は事物に似ていますか？

「ねこ」と「いぬ」という音声は、猫と犬にそれぞれ似ていますか？ 音声は事物に似ていますか？

今回はそういうお話をしたと思います。

＊

私は文字と音声が事物に似ているとは思いません。むしろ、ぜんぜん似ていないと思います。とはいえ、似ていると言う人がいても驚きません。世の中にはいろいろな人がいます。人それぞれです。

文字と音声は事物に似ていないという前提で話を進めます。

文字と音声は事物にぜんぜん似ていないにもかかわらず、文字と音声を使って人はコミュニケーションをしています。不思議です。不思議すぎて、腰を抜かしそうになります。

*

錯覚なのでしょうか？ 例の条件反射なのでしょうか？ いわゆる「学習の成果」でしょうか？

私たちは文字と音声に騙されているのでしょうか？ まぼろしなのでしょうか？ 何らかの学問的な説明があるのでしょうか？

この不思議を「錯覚」とか「条件反射」とか「学習の成果」と名づけて、手なづけようとしても、不思議さは残ります。「うちら、言葉に騙されてるんだ」と腹を立てて悪態をついたところで、不思議さは解消されません。

「まぼろし」という言葉で思考停止をしても、「神」や「神秘」を持ちだして判断停止をしても、「〇〇説」とか「〇〇現象」みたいに学問的な説明をされて「ちょろいもんだ」「解決済みなの」と思ったところで、不思議さは去りません。

不思議さに気休めは役に立たないのです。素直に不思議さを認めたいというのが、私の生き方です。

*

私は研究者でも探求者でもないのです、勝手に考えてみます。

身のまわりのもの、いまここにあるものを観察して、ああでもないこうでもない、ああだこうだをするのです。それがわくわくして楽しいからです。

話を戻します。

文字と音声は事物にぜんぜん似ていないにもかかわらず、文字と音声を使って人はコミュニケーションをしています。

たぶん、ぜんぜん「似ていないもの」が、「似ている」ものとか「そっくり」なものを喚起する、つまり誘いだすからだという気がします。

文字と音声は、まぼろしを誘いだすという意味です。

*

猫や犬という言葉で私たちが頭に浮かべるものは、猫や犬に「似ている」ものとか「そっくり」なもの、つまり印象なのです。印象ですから、検証はできません。

印象ですから、思いうかべているものは他人に伝えられません。「あれよ」「ああ、あれね」という感じなら伝えられるでしょう。人それぞれが頭の中で「あれ」を勝手に思いうかべるという意味です。

それが印象です。まぼろしとも言えるでしょう。自分を観察してみると、猫や犬という文字を見て、あるいは音声を聞いたり発音してみても浮かぶ、まぼろし、つまり印象は一定していません。

次々と姿と形を変えます。揺らぎ、ぶれます。ずれもします。

*

パソコンやスマホで「猫」や「犬」を検索するときに、「画像」を検索するといろいろ「猫」や「犬」の画像が出てきますが、あんな感じですか。あれほど多様で広範囲ではなく、あれの私家版とか自分版という感じです。

一定していないのです。すっきりもしていません。むしろ曖昧模糊としてとりとめがないのです。まぼろしであり、印象の特徴ではないでしょうか。

＊

不思議です。それにしても不思議です。

猫とか犬という言葉、つまり音声や文字で、まぼろしが浮かぶのです。そのまぼろしを各人がうかべながら、コミュニケーションをしているのです。

コミュニケーションには、コミュニケーションの失敗や誤解や錯誤や不全も含めるべきだと思います。それが正確なとらえ方ではないでしょうか。すべてがうまくいくわけがありません。

自分のまわりを観察すると、コミュニケーションというのは、綱渡りであり、努力目標の言葉だどつくづく感じます。私たちはコミュニケーションをするだけでなく、コミュニケーションし損なってもいるのです。

「ちょっと、あれはそれじゃないじゃない！」「え？ それってあれじゃなかったの？」「ちがうわよ、これはあれじゃないってっば」「ごめんごめん、これがあれだと思ってた」

まわりを見ていると、こんなことがしょっちゅう起きています。みなさんのまわりはどうですか？

＊

ところで、最近のはやり言葉はこれです。

「それはフェイクだ」、「フェイクニュース！」、「それはねつ造だ」、「現在は何でもどれだけでもねつ造できる時代です」

ますますコミュニケーションではなく、コミュニケーション不全が蔓延しています。

「言葉」と、「言葉」によって喚起される「まぼろし」との間の機能不全がピークに達し

ているようです。

*

話を戻します。

ぜんぜん「似ていないもの」が、「似ている」ものとか「そっくり」なものを喚起する、つまり誘いだす——。

ぜんぜん「似ていないもの」とは音声と文字という物です。震え（振動）をともなう空気、形をともなうインクの染みや画素の集まりという物です。つまり具象です。

同時に、音声も文字も意味やイメージという抽象をともなってもいます。その意味で、音声と文字は具象と抽象の両面を兼ねそなえていると言えるでしょう。

一方の「似ている」ものとか「そっくり」なものとは、印象でありイメージです。つまり、まぼろしであり、抽象です。

要するに、具象と抽象を兼ねそなえたものが、抽象であるまぼろしを誘いだしていると言えます。

不思議でたまりません。不思議すぎて、腰を抜かしても罰は当たらないのではないかと思うほどです。

言葉でまとめてみたものの、その不思議さはいっこうに去りません。

#日本語 # 文字 # 音声 # 錯覚 # 印象# コミュニケーション

樹影、言影、幻影

＊

樹影、言影、幻影

星野廉

2022年3月31日 08:09

目次

かげ、影、陰

言葉のかたち

記憶の風景、記憶のかたち

写生と描写

描写、なぞる

言葉の影、言葉というまぼろし

複写、複製、印影、拡散

外にある線をなぞる

かげ、影、陰

かげという言葉が好きです。「かげ、カゲ、影、陰、蔭、翳、景」という字面をみているだけで、気が遠くなりそうになります。

呼びさまされるイメージに圧倒されるのでしょうか、息が苦しくなり收拾がつかなくなるので、深呼吸をして心を静めます。

寝入り際に、かげについて思いをめぐらすことがあるのですが、そんなときには幸せな気分になります。

昨夜は、影と陰について考えていました。

大きな木の下を夢想しながら、かげについて考えていたのです。それを思いだしながら、文字にしてみます。

言葉のかたち

木の陰で木の影について思いをめぐらしていたのです。夢うつつの中での話です。

まず影と陰の違いを見てみましょう。影と陰の使い分けは、例文で見るのがいちばんです。以下の例文は私が作文したものです。

葉の落ちた地面に、木が影を落としている。

庭の池に木の影が映っている。

散歩の途中に木の陰で一休みした。

犬が木陰で身を横たえている。

影は光をさえぎってできる、あるいは水や鏡に映った形や姿です。一方の陰は、日の当たっていない場所です。

＊

かげが影と陰という言葉で分かれているというよりも、かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている気がします。

まず現実での体験があって、言葉は後という意味です。言葉から現実に入る人は、まずいないでしょう。

言葉、とりわけ文字は後付けです。理屈なのです。分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。

私は研究者でも探求者でもありません。ただ言葉が好きだけです。言葉の不思議さに取り憑かれているだけです。

こうやって言葉に付きあってもらっているだけで満足しています。

記憶の風景、記憶のかたち

昨夜の寝入り際の夢うつつの中で浮かんだ景色を、いま思いえがいています。

言葉にしてみます。

＊

草原を歩いていると、遠くに大きな木が見えた。近づいてみると、木のそばには池がある。草の生えた地面に木がくっきりとした影を落としている。

池には、その大きな木の先端の影が映っている。草で被われた地面に落ちている木の影が伸びて、水面に映る木の影につながっているように見えなくもない。

どうなっているのだろうと興味を覚え、歩を進めて木の陰の中に入った。地面に映った木の影が池に映った影と重なっている。

不思議な気持ちでそのさまに見入っていると、そばで何かが動いた気配がしてぎくりとした。

木の陰で身をひそめていたのか、猫がこちらを見ている。灰色っぽい毛の痩せた猫だ。

＊

この後に、寝入った記憶があります。昨夜と今朝の夢では影も陰も出てこなかった気がします。

写生と描写

以上の作文は、昨夜の寝際に浮かんだ風景を思いだしながら作ったものですが、読みかえてみると、その嘘っぽさに恥ずかしくなります。

記憶を頼りに何かを思いえがいたり、ましてやそれを言葉にすることの困難を実感しただけでなく、そこまでして言葉にしようとする自分の執念にたじろいでしまったのです。

影と陰について意識的になっているために取って付けたような作文になっています。いかにも作りものっぽいのです。

＊

文章を書くという行為は、ふつう室内でおこなわれます。私の場合には自宅の居間でパソコンを使って書くのが習慣になっています。

何かを、あるいは何らかの風景を見ながら、その場でノートやメモ帳にペンで書くとか、スマホに文字を入力して書くというのは想像しにくいです。

書くことを職業としている人なら、現場で取材メモを取るでしょう。いわば言葉によるデッサンでしょう。でも、清書するのは帰ってからの屋内だと思います。

俳句や短歌や短い詩の場合には、その場で言葉を口にして、何かに書きとめたりすることは十分に考えられます。俳句だとそのまま、作品になるのかもしれませんが。

写生という言葉が、明治になって俳句の関係者たちの間で口にされるようになったのは、分かりやすい展開だと言えるでしょう。

＊

絵画と文章を同列に扱うことはできませんが、デッサン、素描、写生、描写という共通の言葉で論じることは多いです。私もやっています。

文章の場合に話を限れば、その場で文字にして、以後手を加えないという写生は、きわめて稀な出来事だと思います。俳句くらいのものでしょうか。

デッサン、素描はあるでしょうが、後で清書することになります。さらには推敲もあるでしょう。

小説、エッセイ、新聞や雑誌の記事、ブログという形で、私たちが読む文章は、現場で撮られた写真とは異なり、現場から持ち帰ったメモや記憶を元にして描かれた絵に近いと言えます。

描写、なぞる

描写は、写す、映す、移す、撮すと言うより、事物や風景そのものではなく、その影をなぞっているのです。見て写す、つまり写生とは、次元が異なっているとも言えます。

描写は事物を描き写すのではなく、むしろ事物の影をなぞることではないでしょうか。見なくても描写できます。現場にいなくても描写は可能だし、じっさいにそういう創作がおこなわれています。

だから、見たことがない事物でも描写できるのです。

(意外に思われるかもしれませんが、『夢十夜』を書いたときの夏目漱石は、このことにきわめて意識的であった節があります。夢日記の形を取りながらも、あの作品が夢の再現では断じてないからです。細部に見られる優れた描写に目を注げば一目瞭然なのです。)

その意味で、なぞるという行為は、必ずしも対象を見ているわけではありません。

むしろ、影（言葉のことです）そのものの世界に入っているといともなみなのです。影には

影の文法があるようです。現実とは異なる文法にしたがって描かれるし書かれるのです。

絵を描いているとき、もはや対象から離れて、絵を成り立たせている素材と細部、そして絵を描くための道具の「論理」と「文法」にしたがって描かれるのと似ています。

影は自立しているとも言えます。

影には影の論理と文法があるのです。影をよく見てください。その現物とされているものとの類似は驚くほど少ないのです。「似ている」はあくまでも印象なのです。

類似や対応や関係性は、想像力と空想力の産物です。

言葉の影、言葉というまぼろし

木の影と似た言い方に樹影があります。木の影と木の陰だけでなく、木の姿という意味もあるようです。

樹齢二百年という、そのいちょうの樹影がピラミッドに見えた。

即席に作った文ですが、こんな使い方ができそうです。

＊

木という生き物、その木の姿である樹影、その木に日の光が当たって地面に移る影、その木にさえぎられてできる陰。そうした「かげ」たちは、木そのものではありません。

言葉は、それが指ししめしたり、名指す事物そのものではありません。その意味で、かげに似ている気がします。いわば言影です。勝手に作った言葉ですが、ことかげとか、ことえいとでも読みましょうか。

言葉には姿があります。文字のことです。文字は形であり姿ですが、文字には音（おん）も、語義も意味もイメージもあります。

音と意味とイメージは目に見えません。それなのに、音と意味とイメージには大きな存在感があります。

＊

音と意味とイメージは、まるで文字の影のようですが、そんなことはなく、むしろ音が先で、文字は後付けなのです。まず話し言葉があって、書き言葉が出てきたのはずっと後のことだと言われています。

それなのに、目に見える形としてある文字はいかにも偉そうに見えます。人は目に見えるものに信を置きます。一方で、目に見えないものに畏怖の念をいだくことがあります。

言葉は目に見えるものでありながら、目に見えないものでもあります。具象と抽象を兼ねそなえているという言い方もできるでしょう。

だから、人の外にあって、人の中に入ったり出たりできるのです。

不思議ですね。謎です。考えれば考えるほど不思議でなりません。

複写、複製、印影、拡散

まるでまぼろしのようです。幻影のようです。見ているようで見えていない。見えていないようで見える。

まぼろしは見るものではなく、なぞるものではないでしょうか。なぞるのであれば、目をつむってもできそうです。

なぞることなら、日向もなく陰もない、したがって影もない闇の中でもできそうです。

なぞることなら、生きていない物でもできるのです。

＊

見ていなくても、闇の中でも、描写はできます。無生物も、描写ができます。

まぼろしはまぼろしも描けるのです。まぼろしでまぼろしを描くこともできるのです。

まぼろしをなぞる。さらに言うなら、なぞるをなぞる。

これは、人の外にある出来事であって、人の中に入ったり出たりすることがあっても、つまり人がなぞることはあっても、外そのものなのです。

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

だから、機械やA Iにも文章が書けるのです。書いていると、書いているように見えるのさかいはないのです。さかいがあるのは人においてだけであり、さかいは外にはないのです。

たぶん、あらゆるさかいがそうなのでしょう。さかいは人が決めるものです。だから、線引きをめぐる争いが跡を絶ちません。

さかいはありません。少なくとも外にはありません。

外にある線をなぞる

人は自分で勝手に引いた線をなぞっているだけだとも言えそうです。自分が引いたはずの線が「外にある外である」のは皮肉ではないでしょうか。これは線が自立しているからに他なりません。

＊

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

これは、いま始まったことではありません。写本、写経、印刷の時代から起きている出来事なのです。

(人が文字をなぞり写すのは、線からなる文字が外にあるからです。内にあれば、わざわざ苦労して写しません。)

そして、複写。コピー (印影と呼びたいです)、複製。さらには、現在のコピーのコピー、複製=拡散が起きているのは、同じ理由でそうなっていると言えそうです。

いまや、「写す」と「なぞる」は人の手に負えないものになり、人は振りまわされています。いや、これもいま始まったことではないでしょう。

影が外にある外であるという話は、人が言葉を持ったときに始まったにちがいありません。

#影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 記憶 # 描写 # 写生 # デッサン # 文字 # 幻# 夏目漱石
複製 # 拡散 # AI

世界にシンクロする

＊

世界にシンクロする

星野廉

2022年3月26日 09:48

目次

動作と表情と言葉にシンクロする

真似ないで真似ている

言葉の具象と抽象、表情と身振りの具象と抽象

抽象、具象、生命

二つの横たわるのあいだで

届いていますか、通じていますか？

道具ではない、しもべや奴隷ではない

道具ではなく友だち

顔

動作と表情と言葉にシンクロする

寝る・横たわる、座る・座りこむ。

ところで、これまでにたくさんの人によって繰り返されてきた抗議の動作と行動は、届いたのでしょうか、通じたのでしょうか。

そもそも動作や身振りや表情は、届くのでしょうか、通じるのでしょうか？

(拙文「意思表示としての動作」より引用)

私たちは、知らず知らずのうちに、同じような動作や身振りや仕草や表情をしている気がします。

しかも世界中で太古から繰り返されてきた、動作や身振りや表情なのです。

＊

音声や動作や身振りや表情はヒトだけのものではありません。

あくびを考えてみてください。ワンコだってニャンコだってハムスターだってあくびをします。サルやゴリラだと、しかめっ面もします。

四つ足で立つ、四つ足で歩く、二つ足で立つ、二つ足で歩く、寄っかかる、座る、腰かける、走る、投げる、跳ぶ、泳ぐ、這い回る、体を掻く。

ヒトに特権的な動作に見える「立つ」に注目すると、鳥が二足歩行できることに気づきます。

言葉が通じる相手であれば、言葉と言葉以外の言葉——身振り、仕草、表情（目、眉、口、鼻、顎や顔の筋肉の動き）、音声（叫ぶ、泣く、うめくなど）——、言葉が通じない相手であれば、言葉以外の言葉。

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる、だく・だかれる。

（中略）

いやし、安らぎ、怒り、悲しみ、よろこび、楽しさ、いらいら、もどかしさ、ままならさ、苦しみ、しあわせ、安心感、ただいっしょにいるという充実感。言葉にならない感情。

半年だけいっしょに暮らした犬のことを思い出します。言葉ではない言葉のやり取りがたくさんたくさんありました。こちらが話し言葉で話しかけても、それが相手に言葉として伝わっている保証はありません。

それでもこっちは伝わっていると勝手に思うこともありました。後付けで考えると、言葉以外の言葉も、外にあって、外から来るものなのですね。自分の中に入るのかもしれませんが、それは必ずしも思いどおりにならないという意味では、外なんです。

(拙文「言葉ではない言葉」より引用)

*

生き物の最大の目的とされている生殖を考えてみましょう。子孫を残し殖やすために、鳴き、叫び、見つめ、耳を傾け、嗅ぎ、触れあい、動き、探し、獲り、食べ、飲み、戦い、競い……。

ヒトを含む生き物たちは互いに同期しているのではないのでしょうか。

私は詳しくないので立ち入れませんが、全生物が地理学的レベル、生物学的レベル、遺伝子的レベルで、シンクロし合っているような気がします。

生き物はこの星レベルで互いに同期している。地球レベルで互いにシンクロしている。そう言ってもいいのではないのでしょうか。

真似ないで真似ている

ヒトの目に見えるレベルで言えば、生き物たちは動作や身振りや姿勢や表情にシンクロしているのです。

まるでお互いに見て真似し合っているように見えますが、まさかそれはないでしょう。ありえません。

同族の同集団内なら、親やまわりを真似て学習するというのはありえますが、異族の異集団同士でそっくりなことをしているのは説明がつきそうにありません。

こういうことには、諸説ありという感じで、いろいろな分野の人がいろいろ言っているにちがひありませんが、私は私なりに考えてみたいのです。

＊

真似ないで真似ているとしか言えないのです。

このシンクロというか、模倣の反復というか、「似ている」の「増える」と「広がる」と「うつる」を動かしている、あるいは促し導いている「何か」を想定したくなります。

言葉の具象と抽象、表情と身振りの具象と抽象

話をヒトに限定します。

私たちは、お互いの動作や身振りや姿勢や表情にシンクロしているのです。覚えている場合もあるでしょうが、誰を真似たかはたいてい記憶になく不明でしょう。

その点では言葉に似ています。言葉の習得に似ています。言語や方言を限定すれば、言葉はそっくりなものです。文字であれば同一と言えます。

言葉は、誰もが生まれたときに、既に外にあって、外から人の中に入り、それが表現の手段という形で外に現れ出ます。必ずしも思いどおりにならないという意味ではつねに外なのです。

言葉が、思いどおりにならない外であるというのは、どっちつかずのニュートラルなものだからではないでしょうか。ひょっとすると、言葉は自立しているのです。

この点でも、身振りや表情は、言葉にそっくりです。

＊

そっくりなものをみんなで共有しているのですが、その意味やメッセージやイメージ

は、その時その時で変わり移ろいます。

うつろうとはどっちつかずという意味ですから、必ずしも思いどおりにならないのです。ぜんぜん当てになりません。頼りにもしくいです。

人によっても、場所によっても、場合によっても、その時の気分によっても変わるし異なるでしょう。変異し変移し偏移し変位するのです。

どっちつかず、どっちにも転ぶ。こうした性質はニュートラルであり非人称的であるとも言えるでしょう。

人から離れているのです。人の外にあるのです。

*

それでいて言葉も表情も身振りも、具象と抽象の両面を備えています。

文字で考えてみましょう。

文字はある意味で抽象ですから形だけでは存在できず、インクや墨や掻いた跡や画素の集まりという物質をともなうことによって、はじめて目に見えるのです。

電子的な複製の処理については知りませんが、文字として見る場合には、物質でもなければならぬと言えます。文字には抽象と物質の両面があるということですね。これが書き言葉つまり文字の二面性です。

話し言葉つまり音声も、声帯の振動、空気の振動、鼓膜の振動という形で伝わるわけですから、声帯、空気、鼓膜という物質と、振動や波という抽象の両面があると言えます。これが話し言葉つまり音声の二面性です。

表情と身振りは広義の視覚言語です。様子つまり形を目で見て認識します。

顔を含む身体という具象があり、その動きとしての形つまり抽象が視覚的に認識され

るわけです。

言葉においても、表情と身振りにおいても、意味とメッセージは、具象と抽象の織りなすからみ合いとして、人に立ちあらわれるのではないのでしょうか。

抽象、具象、生命

言葉と表情と身振りがヒトを含む生き物を離れていながらも、つまり生き物の外にありながら、人の中に入ったり出たりする。そして、人の思いどおりにならないニュートラルなものとしてある。

たぶん、それは具象と抽象の二面を備えた言葉と表情と身振りの抽象のなせるわざだという気がします。

だからシンクロの対象にもなるのであり、シンクロそのものでもあるのではないのでしょうか。

情報としての複製拡散と、生殖としての複製拡散も、その抽象の側面があって可能なのではないのでしょうか。

*

ヒトと生き物たちという、具象としての生命体が消えたとき、抽象もまた消えるのだろう。

言い換えると、抽象は具象を場として、形をあらわすのではないか。ただし、その具象という場は物であってはならず、生命でなければならない。

これは、生命という具象を遺伝子レベルでの情報という抽象に置き換えてみると分かりやすいかもしれません。

いまはそんなふうに考えています。

二つの横たわるのあいだで

ヒトは生まれ落ちて横たわり、やがて立ち、歩き、座り、再び横たわって亡くなる。

最初の横たわると最後の横たわるという動作のあいだに、さまざまな動作や表情があるはずです。無数の言葉があるはずです。

世界中で人びとが、それらの動作と表情と言葉にシンクロする。シンクロが時空をまたいで繰り返される。これが歴史です。

人はそれらを真似たり、無意識にしたり、それらに何かの意味やメッセージを込めたりするのでしょ

う。誰かの動作や表情を見て、何かを受け取ったり、その意味を考えたり、迷ったり、受け損ねたり、見過ごしたり、無視したりするのでしょ

届いていますか、通じていますか？

あなたの望み、願い、祈りは、届いているでしょうか？ 通じていますか？

というか、誰に届くのでしょうか？ 何に届いて通じることがあるのでしょうか？

あなたの言葉、表情、身振りや手振りは、届いているのでしょうか？ 通じていますか？

あなたは、誰かの送ってくれているものを受け取っていますか？ 受けとり損ねたり、そもそも見ていなかったり、無視したり、気づかなかったりしませんか？

あなたのしているその仕草はどういう意味なのでしょう。何となくですか？ 考えたこともない、ですか？ 「意味って何？」ですか？

道具ではない、しもべや奴隷ではない

それはそっくりです。みんながそっくりなことをしています。そっくりなものを口にしたり文字にしています。

それは誰もが生まれたときに、既に外にあって、外から人の中に入り、それが表現の手段という形で外に現れ出ます。必ずしも思いどおりにならないという意味ではつねに外なのです。

それが、思いどおりにならない外であるというのは、どっちつかずのニュートラルなものだからではないでしょうか。ひょっとすると、それは自立しているのです。

人の道具でも、しもべでも、ましてや奴隷でもない自立した存在なのではないでしょうか。

そっくりなものをみんなで共有しているのですが、その意味やメッセージやイメージは、その時その時で変わり移ろいます。

うつろうとはどっちつかずという意味ですから、必ずしも思いどおりにならないのです。ぜんぜん当てになりません。頼りにもしくいのです。

道具でも奴隷でもないからです。

道具ではなく友だち

そっくりなのです。でも、それが間近にあったり、自分の中にあるときには、そっくりには見えません。そっくりにも思えません。

見えたり見えなかったりする、そっくり。

自分の中にあったり、外にあったりする、そっくり。

そっくりは、いまもあなたの中にあるのです。たぶん、いるのです。これからもいるでしょう。

あなたのいちばん古い友だちです。私たちみんなの古くからの友だちです。

仲良くしましょう。さいごまでいてくれますよ。あなたのさいごまで、私たちのさいごまで。

*

最後に大好きな歌を紹介します。キャロル・キングの You've Got a Friend です。

(動画省略)

歌詞を知ったとき、そんな虫のいい話があるのかとか、そんなに軽々しく請け合っているものかとか、そんな素晴らしい友だちがいるだろうかと思ったのを覚えています。

いま改めて聞くと、これは話し言葉や書き言葉、そして身振りや表情という言葉のことではないかと思えてなりません。

顔

さいごの光景を想像します。

言葉、表情、身振りのある光景です。

その光景の中で、いまが消えていき、かなたがその領域を広げていく。同時に、かなたが消えていき、いまがその領域を広げていく。そこには物語も条理もないでしょう。

いまとかなたは言葉なのです。

人にとってもっともはかない意味とメッセージは、まっ先に消えてなくなる気がします。

話し言葉と書き言葉が失われ、音の記憶と、音としての声の記憶と、表情の記憶と、身振りの記憶の織りなす光景です。

ニュートラルな、つまりどっちつかずの音と形だけが、しつように、おそらく断片的に断続的に浮かんでいる。

あえて言うなら、それはおそらく顔ではないでしょうか。

*

とりとめのない、常軌を逸した、雲をつかむような話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#言葉# 話し言葉# 書き言葉# 視覚言語# 動作# 身振り# 表情# ニュートラル# 意味# メッセージ# キャロル・キング# 洋楽# 音楽# シンクロ# 顔

意味が立ちあらわれるとき

＊

意味が立ちあらわれるとき

星野廉

2022年3月22日 09:21

目次

赤ちゃん

ペット

言葉をいじる

赤ちゃん

赤ちゃんを見ていると意味と無意味について考えずにはいられません。赤ちゃんの表情や仕草や声が信号に感じられるからです。

信号というのは、前提として意味やメッセージを想定しているわけです。つまり、はらはらどきどきです。

しかも点滅してあおることもあります。

この泣き声はおむつを替えてほしいなのか、お乳がほしいなのか、どこかが痒いのか、痛いのか、暑いのか、それとも熱いのか？ こんなふうには解読ごっこになります。

初めてのお子さんだと心配でしょうね、不安でしょうね。解読地獄におちいる場合もありそうです。

＊

でも、赤ちゃんとお母さん、お父さん、その家族の人たちの様子を見てみると、赤ちゃんの発するあらゆる信号をつねに正しく受けようとしているわけではないのに気づきます。

受け流しているように見える場合がよくあります。ほほ笑みにほほ笑み返す、ほほ笑みにしかめっ面をしてみせる、ほほ笑みをただ眺めている。泣いても知らん顔。

それだけでいい。そこにいて笑みを浮かべているだけでいい。そこで泣いているだけでいい。そこにいるだけでいい。

信号は解読すべきものではなく、ただそこに「いる」という、おおらかでおおまかな印として、そこに「ある」かのように見えます。

*

ただ「いる」という信号として、ただ「ある」だけ。

意味はそこにあるというより、人の中にあるのでしょうか。世界が意味だらけなのではなく、人の中が意味だらけなのでしょう。

人は自分の中でたちさわぐ「意味の立ちあらわれ」を静める術を心得ているようです。

ペット

言葉は、話し言葉つまり音声と書き言葉つまり文字だけではない。表情、仕草、身振り、五感を用いた感覚もまた言葉だ。そう思っています。

ペットとの間での言葉は何でしょう？ ペットとのあいだだから、愛だ。なんて言いそうになりましたが、この駄洒落はなかなか言えている気がします。

言葉の通じない相手とのあいだにある愛は交流でなければなりません。一方通行で

あってほしくないわけです。

「ほしくない」のですから、願いです。願いでしかありません。

＊

自分が猫や犬と接するときを感じるのですが、擬人化は避けられないと思います。

ヒトとヒト以外の他者（生き物や物）との接し方の基本には擬人化がある気がします。ヒトは擬人という愛し方しかできないのかもしれないかもしれません。

愛用のカバンを思わず撫でたり、靴に話しかけている自分がいます。愛おしいのです。

＊

話し言葉や書き言葉が通じない相手とは、表情、仕草、身振り、五感を用いた感覚を動員して、触れあい、付きあうしかありません。

話し言葉が通じない相手との関係では、声は話し言葉ではなく、純粋な声や音声として立ちあらわれます。

犬や猫に話しかけた場合、相手は言葉ではなく音声としてとらえているにちがいありません。

抑揚、声の質、声の肌理、声の大きさ、声の色、声の長短。

まだ言葉を習得していない赤ちゃんとの間でも、そうでしょう。

＊

ある特定の音の並びがある特定の意味やメッセージを持つ場合もあるでしょう。その限りにおいて意味が立ちあらわれている気がします。

犬に対しての「待て」が「待て」であるかは、犬に聞いてみないと分からない気がします。聞けない以上分からない気がします。

その点、猫はマイペースです。こちらの信号をわざと逸らしているように見えることがしょっちゅうあります。

かまってちゃんの犬と超マイペースな猫のどちらも好きです。

ペットという他者との付き合いもまた、意味と無意味について考えさせてくれます。

意味とは働きかけなのだと思います。通じないかもしれない相手や対象に働きかけたとき、意味が立ちあらわれる気がします。通じないかもしれない——。その意味で賭けなのです。

言葉をいじる

世界の意味 意味の世界
世界の影 影の世界
言葉の夢 夢の言葉

私の記事のタイトルでは、上のようなパターンがありますが、もちろん故意にやっています。

故意に偶然をやっているのです。故意に偶然を招くのです。

いま書いた文に見られるレトリックもよく使います。撞着語法なのかもしれません。

レトリックを分類することには興味がないので、知りません。知りたいとも思いません。

*

言葉が疑似物である以上、言葉の矛盾と、その言葉が指す事物との矛盾は一致するわけがありませんから、言葉のうえで矛盾があるからと言ってそれを否定したり退ける気にはなれません。

この点に敏感で意識的だったのがニーチェ（果敢に矛盾を文章化しました）であり、ジル・ドゥルーズ（言葉の矛盾が論理の矛盾であるのかそれとも錯覚であるのかを丹念に探りました）であり、ルイス・キャロル（戯れに矛盾を文章化してみせました）であった気がします。

こうした問題で大切なのは、翻訳を引用したりまとめをするのではなく、自分自身の問題として母語で文章化することだと私は思います。あくまでも言葉の問題なのですから。

＊

シンクロにシンクロする。

これは同語反復（トートロジー）なのでしょうか。知りません。

同期に同期する。

こうすると、日本語では同期生にシンクロするという意味にも取れて、おもしろいです。

＊

なんでこういうことをやっているのかというと、おもしろいからです。意味が立ちあらわれる瞬間に立ちあった気がしてわくわくするのです（意味が立ちさわいでいるのは自分の中なのですけど）。

世界の意味 意味の世界

言葉を並べ替えたときに、ふいに見えてくるその姿に息を飲むと言え言過ぎかもしれませんが、はっとします。これが切っ掛けで記事の展開が決まります。

自分で書いた文字なのに、自分を離れて「何か」に見える、「何か」を発してくる、「何か」を放ってくる、「何か」を話しかけてくるのです。

それが、私にとっての「意味が立ちあらわれる」です。「現れる・表れる・顕れる・洗われる・あら、割れる」という感じ。

意味は印象やイメージと同じで、個人的なものだと思います。多者である他者と通じるかどうかは賭けなのです。

各人がいなく意味は、多数の他者と重なる部分もあれば、重ならない部分もあり、宙ぶらりんだという意味です。

#言葉#声#日本語#文字#赤ちゃん#意味#メッセージ#ペット#レトリック

私たちは同じではなく似ている

＊

私たちは同じではなく似ている

星野廉

2022年3月21日 09:49

目次

そっくりなところがそっくり

愛着と興味がないものには残酷になれる

疑似物、疑似世界、疑似体験

似たものとしての世界

個性とユニークさ

似ているから愛着をいただける

初めて見る「似ている」の世界

そっくりなところがそっくり

スマホを使っている人はスマホに似てくる。

人は自分に作るものに似てくる。人は自分が使っているものに似てくる。そっくりに似てくる。シンクロにシンクロする。同期に同期する。

(拙文「シンクロにシンクロする」より引用)

人の顔や姿がスマホに似てくるという意味ではありません。

大量生産されてどれも似ていたり同じに見えるスマホ。お店や工場ですらりと並んでいたスマホ。どれもそっくり。

そのスマホを覗きこむ、目を細めたり、目を見開いたり、ときには笑みを浮かべる、顔をしかめることもある、やや口を開けている人もいる。

指で画面をなぞる、スライドするのがもどかしいのか眉を寄せたり、舌打ちする人もいる。

やや前屈みに歩きながらスマホの画面に見入る、ときどき歩を緩めたり、立ち止る。

みんな、似たような仕草をしている。その仕草を繰り返している。真似し合っているように。そっくりなのです。

*

そっくりなところがそっくりなのです。そっくりな点がそっくりにそっくりなのです。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なるという意味です。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホを使っている人はスマホに似てくるというのは、それくらいの意味です。

スマホに限りません。車がそうです。自転車もそうです。三輪車もそうかもしれません。

ボールペン、消しゴム、ノート、お箸、絆創膏、腕時計、下着、靴下、眼鏡、シャワー、便器、ベッド、乳母車、棺。どれも大量生産されたそっくりさんたちですが、それを使うとき、人はそれぞれそっくりな仕草や表情をします。

ひとりひとりの顔も個性も違いますが、やることがそっくりなのです。

ある意味で、製品に合わせているのでしょう。人に便利なように、人の都合に合わせて、そして何よりも人の体や体の一部やその動きに合わせて、商品は作られているからでしょう。

人の体だけでなく、人の内にも合わせて作られているような気がします。内というのは、脳だったり、意識だったり、行動のパターンとか型だったり、ひょっとすると記憶

もそうかもしれません。

人が作ったものや、人が使っているものは、人に似ている気がするのです。

愛着と興味がないものには残酷になれる

私たちにはニワトリがそっくりに見えます。これは特別な思い出や愛着がないからでしょう。思い出や愛着がないものはそっくりに見えます。

ニワトリから見たら、ヒトはそっくりではないでしょうか。顔や姿ばかりでなく、仕草と表情、やることなすこと、そっくりではないでしょうか。

興味がないからです。

愛着や興味がないものには冷淡になれる。残酷にもなれるでしょう。もちろん、愛着と興味をいだけば、ペットにも家族にもなるでしょう。

※この部分は、ある特定の職業を批判するつもりで書いたわけではありません。どうかご理解をお願いします。

疑似物、疑似世界、疑似体験

私たちは世界や森羅万象と直接的に触れあい、対することができません。知覚や言葉という代理、そして似たものを通して触れるわけです。

私には言葉、とくに文字と世界が似ているとは思えないのですが、似たものとして私たちは使っています。不思議です。

言葉という疑似物を用いた疑似世界とか疑似体験という言い方が適切かもしれません。「言葉という偽物を用いた隔靴搔痒の遠隔操作」という言い回しよりは的確でしょう。

げんに私は言葉という疑似物をやり取りして人と交流し、言葉からなる文章を読んで疑似体験を楽しんでいます。これは学習の成果であり、想像力のおかげだと理解しています。

生まれたときから既に自分の外にあった言葉を真似て学びながら、同時に想像力を養った結果という意味です。

あっさりと書きましたが不思議でなりません。

＊

私たちひとりひとはそれぞれの疑似世界を持ち、疑似体験をしている。こう考えてみます。疑似（擬似）の「疑（擬）」が余分ですから、「似」にこだわりましょう。

私たちひとりひとはそれぞれの「似た世界」と「似た体験」をしている。同じではない。同一はありえないでしょう。似ているのです。似ているから通じ合えます。たぶん、ですけど。

似たものとしての世界

私たちは「似たものとしての世界」に生きている「似た者同士」ではないでしょうか。

あなたのいなく「似たもの」と私のいなく「似たもの」と、人の集まりである社会や集団がいなく（決めたということです）「似たもの」は似ているけど、異なるはず。ズレがあるのです。

それが個性ではないでしょうか。それがユニークさであり、掛け替えのなさではないでしょうか。

＊

話し言葉、書き言葉つまり文字、物語、フィクション、行動様式、表情、身振り、仕草、旋律、コード――。

こうしたものは各人、家族、集団、共同体、社会、国家、地域、文化によって異なりますが、似ています。だから伝達や伝承や翻訳や言い換えや解釈ができるのでしょう。

伝達や伝承や翻訳や言い換えや解釈は「うつす・うつる」です。移す、写す、映す、撮す、遷す。「うつす」には必ず何らかの誤差、ノイズ、エラー、変異がともなうそうです。

複製やコピーは同一を再生したり再現することではないようです。似せて作られるものは、当然のことながら、似ているもの、つまり「近似」なのです。

だから「疑似（擬似）」ともいうのでしょうか。百パーセントとか完全という言い方を避けているわけですね。

個性とユニークさ

そっくりに見えても、似たように見えても、似たり寄ったりであっても、そこには「異なる」個性があるのだと私は理解しています。

逆に「同じ」は不気味です。

「似ている」は印象ですから検証はできません。「同じ」や「同一」はヒトの知覚では確認できず、精度の高い機器や機械を用いてなら検証できるでしょう。

日常生活では「同じ」「同一」はありえないし、出会えないわけです。抽象であるとも言えます。その嘘くささが不気味さに通じるのかもしれませんが。個人的な思いです。

*

そっくりがそっくりしている、シンクロがシンクロしている、同期が同期している世

界。百年前、いや五十年前の人なら、目まいを覚えるのではないのでしょうか。

そんな目まいを覚える世界に徐々に入っていった私たち、そして生まれたときには既にそうであった世代の人たちは、もはや目まいを感じなくなっています。

逆に、太古の人たちがこの世界を見たらなんて想像すると、こちらが目まいに誘われますが、そうした想像力を大切にしたいと思っています。

当り前に見えるものは当り前ではないし、必然でも自然でもないという意味です。

とはいえ、私はこの「似たものとしての世界」つまり疑似世界に生まれ、生きていて十分に幸せです。満足もしています。

似ているから愛着をいだける

疑似物である言葉を持ち、さらには文字を持ってしまった人類は、疑似世界に生き、疑似体験を重ねてきたのでしょうか。

直接的に世界に触れているわけではない。これは確かでしょう。

仮想現実だなんて、何を今更という気もしますが、「似ている」と「そっくり」の精度と有効性は急速に高まりつつあるようです。

(私に言わせると、知覚機能と言語活動を介してとらえているこの現実こそが、既に「似たもの」つまり疑似物であり仮想物からなりたっているきわめて精巧でよくできた仮想現実なのです。)

それでも私たちひとりひとりのいだいている「似たもの」が異なるという事実は変わらない気がします。

つまり、「似ている」からこそ違いが生じ、個性があると言えます。「似ている」が個性を生むのです。

一方で、「同じ」は個性を消します。無視するだけでなく消すのです。

*

似ているものに、私たちは愛着を覚え、愛着をいただくことができます。

擬人化というのは、森羅万象に自分たち人間を見てしまうことです。

世界や森羅万象は私たちにとって直接触れあうことができない「何か」であるわけですが、名前を付け、自分たちと似た部分を見ることで親しいものに見えてきます。

自分たちと似ていると思いきみ、手なづけ飼いならしているのかもしれませんが。世界や森羅万象なんてチョロいとも思っているにちがいません。さもないと、科学技術はこんなに発展していないでしょう。

擬人化をとまなう想像によって、ただの物や景色や形が、人形や顔や絵に変わります。空の雲を思いうかべると分かりやすいと思います。

そうした想像力の結果が、映画であったり映像であったり、芸術であったり、おそらく音楽であったりするのでしょう。想像は創造であるという、例の駄洒落です。

*

生き物も人に似ていると感じることで愛着や愛の対象になります。物もそうです。自然にある物たち、そして人が作った物たち。

こう考えると、「似ている」が素晴らしい感覚に思えてきます。

一方で、「同じ」はどうでしょう。

「私たちは同じなんだ」「同じ人間なんだ」「地球に住む同じ生き物なのだ」「同じ〇〇国

民だから」「同じ〇年〇組なのですから」「同じ家族（会社、町内、病気、趣味、ファン、宗教、性、世代、出身地）なんだからさ」……

ちょっと待ってください。

「同じ」も素晴らしく聞こえ、美しくさえ響きますが、どこか嘘くさいのはやはり日常生活や体感から懸け離れている抽象だからではないでしょうか。妙にほのぼのとして美辞麗句っぽいのです。ほのぼの麗句。

さらに、「同じだから」という上の言葉に続けて言われがちなフレーズを想像してみてください。何らかの思惑や魂胆のあるフレーズが頭に浮かびませんか？

「私たちは同じ〇〇なんだから、△△するべきだ（△△して当然でしょう）」——こういう流れになります。

こうしたスローガンやプロパガンダが危険でもあるのは、歴史が教えてくれます。

私たちは同じではなく似ているのです。ひとりひとりが似ていながら違うのです。

＊

「同じ」という言葉が、特定の考えを説得するさいの方便や切り札として使われる場合がいかにも多いことか。

そう簡単に「同じ」だと括っていいもののでしょうか。

魂胆があるからです。言葉の錯覚を利用した心理操作かもしれません。レトリックのことです。

＊

これは個人的な思いなのですが、同じ姿や顔をしたものがずらりと並んでいると生きていくという感じがしません。平気で壊せる気がします。

生きていないと感じないのは、それらに人を感じないからかもしれません。

*

私たちは同じではなく似ているから、ひとりひとりが違うのです。

私たちを文字や数字に置き換えれば、同じどころか同一になるでしょう。

私たちは文字でも数字でもありません。私はそういう抽象には耐えられません。

ためらいもなく、人を文字や数字に置き換えて処理する、あるいは処分する人に強い嫌悪感を覚えます。その鈍感さと残酷さにです。そういう人は権力を持つてはならない、いや私たちが権力を委ねてはならないと思います。

あくまでも個人的な思いです。これだけ抽象にこだわるのは、性格や気質の問題かもしれません。

初めて見る「似ている」の世界

ずらりとそっくりに並んだものたちに掛け替えのなさを感じて、愛着を覚えるためには「似ている」が必要だという気がします。

この「似ている」の根っこには「人に似ている」があるように感じられます。

私は子を持ったことも、育てた経験もないのですが、近所で仲良くしている家族の赤ちゃんをよく目にします。かわいいし、愛おしささえ覚えます。

赤ちゃんを見るたびに、私はその目の動きと表情を観察します。残念ながら声は聞こえません。難聴が進行して高い音域が聞こえないのです。

＊

生まれたての赤ちゃんが目にした世界には「似ている」が立ち現われているのではないのでしょうか。それも「人に似ている」です。

その「似ている」に向かってほほ笑む、あるいは泣く。その「似ている」は必ずしも人でなくてもいい気がします。ガラガラやベビーマリーがそうですね。

物にでも赤ちゃんはほほ笑みかけ、泣いて見せる。それが赤ちゃんの想像力かもしれません。また、笑みと声が「届き」「達する」とも限りませんから、これは占いであり賭けだとも言えます。

さらに言うなら、赤ちゃんにとって、物と人のさかいはないのかもしれない。

物と人のさかいはない赤ちゃんが向きあっているのは、たぶん「顔」なのだと思います（この「顔」とは「意味の萌芽」の比喩と考えていただいてもかまいません）。

「顔」こそが、人にとっての最初の言葉であり文字だという気がします。

これも想像するしかありませんね。

「世界という本物」から永遠に切り離され、そこにたどり着くことができず、「世界という本物に似たもの」に囲まれて生きている以上、人は想像する以外に世界と触れあう手段はなさそうです。

「いま」「ここ」にいて「かなた・あなた」を想う。これで十分ではないでしょうか。

うつせみの あなたにいだく 夢の顔

#言葉# シンクロ # 文字 # 複製 # 模倣 # スマホ # 森羅万象 # 世界 # 愛着# 赤ちゃん
疑似世界 # 疑似体験 # 仮想現実 # 擬人化 # 想像力

世界の意味、意味の世界

＊

世界の意味、意味の世界

星野廉

2022年3月11日 13:59

目次

いったい何なのか？

ほのめかしとしての世界

「何か」に「何か」を見る

あらゆる物に何かの意味があるらしい

「何か」は「何か」のしるし

Aと書いてありながら、じつはBであったりする

振りをする世界

曖昧放置プレイ

世界は隠喩である、隠喩としての世界

いったい何なのか？

ある詩を読んだとします。涙が出たとします。

「それは AI が書いたんだよ」

＊

ある文章を読んだとします。わくわくどきどきしました。自分に宛てた手紙のように読めて、居ても立ってもいられない気持ちになったとします。

「その文章の各行の出だしの一文字だけを続けて読んでごらん」

ある意味のある言葉になるのです。

＊

この短歌の韻を説明せよ。

「意味あるの？」

＊

この俳句の隠喩を説明せよ。

「なんで？」

＊

「この詩の掛け詞について論じなさい」

「先生、掛け詞と駄洒落って、どう違うのですか？」

「別称と蔑称みたいなものと言えば、分かるかな？」

＊

おもしろく読んだ文章が、あるいは感心した文章が、アナグラムだったり、回文だったり、言葉遊びだったり、何かの暗号であったり、メッセージであったりする。

ずっと聴いていて大好きな音楽が、メッセージソングだと言われて、その意味や解釈を丁寧に解説される。

抽象画だと思ったのが、ゴリラの描いた絵だった。機械が描いたものだった。孫の描いたものだった。娘の描いたものだった。自分のこども時代に描いたものだと親に打ち明けられた。

＊

作品は作者から離れて存在するという考え方がどうも理解できない。まっとうな意見だと思えない。考えただけでむかむかする。

AIの創作と聞くと、なぜか感情的になって血圧が上がる。

回文とアナグラムからなる詩に涙した自分が許せない。

外国人の詠んだ俳句だと聞くと身構える自分がある。その人の母語が日本語だと聞いてほっとする自分もいる。

漢詩や西洋の詩の韻が駄洒落に思えてならない。

韻や掛け詞のある詩に抵抗がある。

創作における、でたらめと偶然と技巧と作為の違いって何だろう。そもそも違いなんてあるのか。

やっぱりレトリックはトリックだと思う。好きになれない。

短い定型詩にそっくりな作品や同一の作品が生まれるのは、確率の問題なのか、偶然の所産なのか、独創性の欠如なのか、無意識の引用なのか、無意識の剽窃なのか、気にすることなどないのか、作者が違うでしょとか背景と文脈が違うでしょと抗議すればいいのか。

友達が酔っ払って書いた詩が大賞を取った。自分の作った短歌が盗作だと言われた。尊敬しているとみんなに言っていた作家が不祥事を起こした。

＊

がっかり。屈辱。絶句。啞然。呆然。ぶ然。怒り。ふて寝。

「え!」、「ばかやろう!」、「うっそん」、「あらら」、「まいったな」、「……」、「むきーっ」、「そうなの? (無表情)」、「ふーん (平気な顔)」、「あんたさあ」

＊

意味はどうやって決まるのでしょうか？

決めるのでしょうか、決まるのでしょうか？

意味を人は決めることができるのでしょうか？

意味は自立しているのではないのでしょうか？ 意味は世界と同じように多であり、他
なのではないのでしょうか？ 他者であり多者なのではないのでしょうか？

ほのめかしとしての世界

世界はほのめかす

ほのめかす世界

ほのめかしとしての世界

世界はほのめかしに満ちている

以上のフレーズが並んでいる、あるいは並べられているさまを見ていると、それぞれ
にほのめかしを感じます。同時に、四つ並んでいること、あるいは並べられていること
にも、ほのめかしを感じないではいられません。

ほのめかしが気になるときりがありません。

*

世界がほのめかしに満ちていると感じるとすれば、それは苦しいでしょうね。何もかも
が意味ありげに思えてくるのです。こうなるとほのめかしではなく、謎ではないでしょ
うか。

意味、メッセージ、謎とその答え、正解。

謎めいている。意味ありげ。

この言い方の裏には、じつは謎などはないとか、意味があるようでないのではないか、

という疑いの念を感じます。まさにほのめかしですね。「〇〇めく」とか「〇〇げ」は疑いの素なのでしょうか。

「もっともらしい」にも通じますね。「もっともらしい」なんて口にすると批判、場合によっては罵倒あるいは悪態です。もっともらしいものが、いろいろな原因になるのはうなずけます。

＊

うちの娘が、さいきん、〇〇テレビの△△アナウンサーが自分に合図をしているって、しきりに言うんです。ネクタイの色が茶系だと何とかいうメッセージだとか、最後の挨拶に何通りかあって、それがこの間送ったメールの返事になっているとか。将来結婚する約束をしたとも真顔で言うんです。あ、夢で約束したらしいのですけど……。

＊

上の文章には意味がありません。隠れた意味もないはずです。たぶん、ですけど。いったん書いた文章は離れていきますので。読み手次第ということにもなります。

とにかく、いま即席で書いただけです。

メッセージなんてありません。隠喩でもありません。韻も踏んでいないはずです。何かの合図でもないです。アナグラムでも回文でも AI 作でもありません。

ほのめかすについて書いていると、ほのめかした書き方になってしまいます。うつるんです。

混乱させて申し訳ありません。

大丈夫ですよ。心配ありません。意味を取れなくなるほうが危ういそうです。

「何か」に「何か」を見る

「何か」に「何か」を見るとき、前者の「何か」と後者の「何か」は違うはずです。異なるはずです。別のはずです。

見るだけにとどまりません。

「何か」に「何か」を読む。「何か」に「何か」の匂いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の臭いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の手触りを感じる。「何か」に「何か」の味がした。「何か」に「何か」が聞こえた。「何か」に「何か」のたたずまいを感じた。「何か」に「何か」の気配を感じた。「何か」に「何か」がいた。「何か」が「何か」だった。

＊

意味禍、メッセージという悪夢、「正解があるにちがいない」という強迫観念。

意味は被害妄想に似ています。意味は怪談にもなります。

悲劇にも喜劇にもなるでしょう。あと、惨劇にも。意味は劇薬かもしれません。

意味はギャグにもなります。ちなみに、無意味には意味があります。辞書にも載っているくらいです。もちろん、ナンセンスにもちゃんとした意味があります。そう考えると安心する自分がいます。

あらゆる物に何かの意味があるらしい

だいぶ前のことですが、翻訳の仕事をしていたころ、交渉術についての本の訳出にかかわったことがあります。調べ物をしながら、ビジネス、外交、政治、裁判の現場だけでなく、日常生活においても、人は交渉しているのだなあと感じました。

で、いまでも覚えているのは、外交における交渉の場では、遅刻したかしないか、どちら側が早く来たか、相手の仕草、姿勢、発声の仕方、視線、服装、テーブルに置かれた物の位置……、こうしたありとあらゆるものやことが、何らかの意味を持っているという話です。

疑心暗鬼という言葉を連想しました。なにもかもが意味を持っていて、その意味を解

読しなければならないとしたら、苦しくないですか。被害妄想や強迫観念の世界です。

ほのめかしの面倒くさは、かまってちゃんに似ています。世界がかまってちゃんに満ちている状況を想像してください。面倒くさいどころか、発狂しますよ、きっと。

*

外交や国際政治や地政学といった領域では、ありとあらゆるものが意味やメッセージがあるものとして扱われます。

あの軍事練習はどういうシグナルを送っているのか。あの演習のおこなわれた日時と場所と、他の国際情勢とのタイミングから、指導者が危機的な心理状態にあると考えられる。あの演習の直前にあったパレードでの、指導者の顔色が悪く、視線が泳いでいたのは、健康状態に異変があるからではないか。

そういえば、敵が報道した映像での捕虜のまばたきがモールス信号だったという話を思い出しました。たしか「torture（拷問）」という言葉だったとか。

*

こうした意見や感想や印象が、マスコミで飛びかいます。いろんな人がいろんなことを言います。かまってちゃんに振りまわされているドMちゃんみたい。なにしろ、とてもうれしそうなのです。

間諜（久しぶりにつかう言葉です）、つまりスパイは国際政治の末端で働くひとたちです。スパイの本家である英国のスパイ小説は、じつに具体的な細部に満ち、丁寧に書かれていてぞくぞくします。

intelligence に防諜、諜報、諜報機関、諜報部員の意味があるのは、興味深いです。知能だけではないということです。AI の I であり、CIA の I でもあるわけですが、こういうのを目の当たりにすると、意味ありげに見えてきて、こうした符合を符号に感じてしまいます。

「何か」は「何か」のしるし

「何か」が「何か」のしるしである。

これは占いの構造かもしれません。

〇〇占い。

*

しるし、印、標、徴、証、記。

サイン、シーニュ、シグナル。

sign、signe、signal。

レヴィ＝ストロース、リーバイス、リーバイ・ストラウス。

Lévi-Strauss、Levi's、Levi Strauss。

記号、符号、象徴、表象、暗号。

合言葉、符牒、符帳、符丁、隠語、パスワード。

*

解読、解釈、理解。

悟り、開眼、覚醒。

発見、靈感。

洞察、直観。

*

錯覚、知覚、まぼろし、幻、幻想、幻覚。

空想、想像、推測、憶測、妄想。

＊

要するに、丁寧な文面だけど、このメールはあなたの最近の態度に怒っているわけね。

つまり、この記事は、あなたへの当てこすり。たぶん、ね。

たくさん書いてあるけど、けっきょく、「だめ」って返事よ。

あの帽子はね、「さようなら」というメッセージだと思うの。

この記事のメッセージはただ一言、「かまちよ」だと思えば、腹も立たないでしょ？

この花の花言葉って何だっけ？

あ、これね……。一言で言うと「ちょめちょめ」よ。

隠喩の代わりに暗喩って書いてあるでしょ。これ、換喩よ。

ここはアリュージョンというよりイリュージョンです。

駄洒落を文字どおりに取ったり、真に受けちゃ駄目です。

Aと書いてありながら、じつはBであったりする

英国のスパイ小説で思いましたが、伝統的な英国の小説は、ほのめかしと当てこすりに満ちています。それが読みにくさにつながっているといえそうです。

Aと書いてありながら、じつはBであったり、ひょっとするとCであったりするのです。

私は、わりとこういう書き方が好きです。自分に似ているからかもしれません。

＊

ここで一つ指摘しておかなければならないのは、『日の名残り』と『わたしを離さないで』に限らず、イシグロの小説では事実や思いを遠回しに語ったり、真実を曲げて語る話者が目立つということです。話者ではなくも、ストレートにものを言わない登場人物が多い気がします。

それが英国の小説っぽさなのかもしれません。さっと読んで意味を取ろうとしても、一筋縄ではいかないのです。英国製の小説を読んでいて、ある箇所で詰まってしまい、考えこむことが私にはよくあります。いったい何を言いたいのだろうと裏の意味を考えているのです。

(拙文「素晴らしき敬体小説」より引用)

振りをする世界

世界は符号である。

世界は一つの大きなクエスチョンマークである。

世界は無数の謎の記号からなる大きな疑問符である。

でまかせに即席でつくったフレーズですが、なんだか謎めいて意味ありげに思えてしまいます。

全部が全部とは言いませんが、大半のほのめかしには実体がないのかもしれません。もちろん、意味もメッセージもないという意味です。

ふりがあるだけ。身振りの「ふり」です。

ふりをなぞる。なぞをなぞる。

世界は空疎なほのめかしである。

「ほのめかす」などじつはなく、この世にあるのは「ほのめかされる」ばかりである。

森羅万象とはパントマイムをする身体のない大道芸人の笑いである。

曖昧放置プレイ

両義性や多義性と同じく、ほのめかしは、曖昧とほぼ同義です。

訳の分からないほのめし方をされると、曖昧なままに放置された気がします。

詩や哲学というジャンルでは、この曖昧放置がプレイとして用いられます。ここでのプレイは、まさに多義的であり、遊戯・遊技・演劇・演技・競技といった意味あいを持ちます。

面倒くさいですね。こんなんで放置されたくないですね。

＊

マラルメもニーチェも結果的に曖昧放置プレイがうまい人だったという印象があります。ニーチェはがむしゃらに矛盾と逆説を具現し、マラルメは徹底してほのめかすという手法で読む者を曖昧に放置しました。

禅の公案、世阿弥、芭蕉、そして腹芸という具合に、曖昧放置プレイがお家芸ではないかと思われるこの国にも、マラルメ、ニーチェ、ドゥルーズの信者が多いのは注目すべき現象ではないでしょうか。

今挙げた固有名詞たち——曖昧放置プレイの名人——に共通するのは、真理とか事実とか悟りとか覚醒という言葉が世迷い言だと看破し、概念とか観念とか学術用語とかいう言葉が対応を欠く空虚な記号である、と生真面目に受け止めてしまったという点ではないでしょうか。

(拙文「曖昧放置プレイの名手たち」より引用)

世界は隠喩である、隠喩としての世界

以心伝心、腹芸、顔芸。

シュール、不条理、わけがわからない。

比喩、隱喩、暗喩、たとえ、寓意、象徴的。

寓意とか隱喩と言えば、文学作品のほかに、黙示録やノストラダムスのラテン語で書いた文章を思い出します。

*

におわす、暗示する。それとなく言う。当てこすり。言外の意味。行間を読む。余白を読む。オブラートに包む。裏読み。

連想。推理。靈視。邪推。解釈。理解。こじつけ。論理。

忖度。憶測。共同幻想。妄想、幻想。

指示、指令、合図。

*

難解、晦渋。

曖昧、謎、不可解。

こうした言葉がある種の魅力をもち、ある種の人たちを惹きつけてやまないのは事実のようです。

訳の分からないものに魅力を感じる人もいます。感心する人もいます。

有り難く頂戴し、その前で身もだえしながらひれ伏すのです。

へそ天的というか、マゾッホ的状況だと思います。宙づり＝サスペンスは気持ちのいいものです。私も大好きです。

*

世界は外にあって自立した「何か」なのかもしれません。

私たちは、それを知覚と言葉と気配をとおして、ながめるだけ。

それが何なのかは、賭けるしかない。そんな気がします。掛けられ、宙づりにされているのは私たちなのです。

そう考えると、やはり「何か」は私たちの思惑とは無関係に自立した「何か」なようです。

＊

大きな劇場にたったひとりで椅子に縛られて身動きできない状態で、スクリーンに向かって視線を動かすだけ。

隔靴搔痒の遠隔操作。

夢に似ています。夢は強制的に見せられる映画。自分が参加することも、操ることもできないとりとめのない映画。

その映画の意味は「何か」とひとりずつぶやくしかなさそうです。

＊

その映画はいつ終わるかもわからない。ただ飽きることはなさそうです。

夢はあれよあれよ。すべてが肯定される世界。異議なんてない。

夢がつまらないと感じたことがありますか？

楽しみましょう。夢かもしれないこの夢を。

夢だと思えば、あくびも堪えられます。

＊

おやすみなさい。

Sweet dreams.

#夢 # 意味 # メッセージ # 隠喩 # 寓意# ほのめかす # メッセージ # 詩 # 文章 # レトリック

「たったひとつ」感、「たったひとり」感

＊

「たったひとつ」感、「たったひとり」感

星野廉

2022年3月11日 10:00

目次

無文字という選択

決まり

「それだけ」感

多なのに一

決まりに逆らう、一に抗う

抽象と具象を兼ねそなえた言葉

錯覚は最大の武器

無文字という選択

本来なら、人は本なんて読みたくないのです。読む義理もないのです。

よく考えてください。話すものである言葉を、わざわざ文字にして、それを見るのではなく、読むのですよ（じっさいには「見る」ことは至難の業であり、しかも読めていません）。それを理解したなんて言っているのですよ。かなり不自然で、妙ちくりんなことを、人は発明して毎日やっているのです。

よろしいでしょうか。文字はあくまでも後付けなのです。無文字社会もあったといえます。視覚言語は文字だけではありません。表情、手振り、身振りがあります。

人類にとって、無文字でいくという選択肢もあったはずですが。文字社会でいく必然などないという意味です。

それがいつかどこかでズレてしまったのです。言語の獲得（もともとの無文字の話です）と同じくらいの生物学的逸脱かもしれません。

決まり

言葉は決めるのではなく、決まるのです。これで決まり。

「決まる」は絶対なのかもしれません。絶対王政の絶対です。絶対は絶大なのです。絶倫かもしれません。

「決まる」は人知を超え、「決める」は人為。

＊

言葉は決まる。言葉は決まり。言葉で決めれば、決まったことになる。人はあらゆることを言葉として処理する。言葉にならないものは、この世には存在しないという意味。

だから、人は言葉にひれ伏す。

というふうに短絡してみましょう。

シンプルであることが言葉の最大の利点です。真実はシンプルでなければならない。

というふうにも短絡してみましょう。

＊

言葉の中でも書き言葉、つまり文字はシンプルに見えます。

愛

は愛なのです。

揺るぎない。ぶれない。不動。永遠。不変。普遍。不偏。不返。

愛の両義性どころか、多様性や多層性が見えなくなるとも言えます。

＊

文字は無限に複製し拡散できます。

どんなに数が増えても、愛は愛なのです。

愛がたったひとつの文字であることに注目しましょう。これは、愛の意味がたったひとつであり、その価値もったひとつであり、それゆえに普遍であるというイメージをいだかせます。

＊

愛は一字ですが、もう少し長くしましょう。

世界はひとつだ。

こう書くと、世界はひとつに思えてきます。そう思わない人も、この文字列を見た瞬間は「愛はひとつだ」と思います。思わないと読めません。信じないと読めないのです。

思って読んだ後に、「やっぱ、違うわ」と判断するのです。

世界の多元性を思う人もいるという意味です。

＊

とはいうものの、一度でも思わせ、信じさせたもの勝ちです。

脳は次の「読み、信じる」という処理作業に移らなければならないからです。判断なんてしている暇はないのです。

このようにして、文字を読んで、そう思った、そう信じただけが、残ります。

読むの基本は信じることなのです。

「それだけ」感

文字はシンプルで、「それだけ」感が強いのです。「それだけ」感とは、「感」ですから印象でありイメージです。検証ができません。

「それだけ」っぽい。「それだけ」がぶんぶんにおう。なんとなく「それだけ」という感じがして、「それだけ」という気分になるとも言えます。

*

「それだけ」の対極にあるのが、「ああでもないこうでもない」「ああだこうだ」「ああでもありこうでもある」「ああだとも言えるしこうだとも言える」「こうかもしれないし、ああかもしれない」という感じですか。

これじゃ困るのです。訳が分からない。とりとめがない。曖昧だ。曖昧模糊としている。両義的どころか、多義的、多層的、多元的。

そんなんじゃ使えないのです。容量が重すぎて動かせません。面倒くさくもあります。

*

文字はシンプルに見える。いくらでも複製・拡散可能。

決まったものはシンプルであることに越したことはないのです。持ち運びやすく、さくさくと読めなければなりません。

多なのに一

目で見える「たったひとつ」「たったひとり」が文字です。

「山」とあれば、山というものがあると錯覚する。単一な山を想定してしまう。「人」とあれば、人というものがあると思ひこみ、人の多様性を無視して、人一般を思いうかべてしまう。

抽象です。抽象とは、切り捨てることです。一本化の代償とも言えるでしょう。

とくに固有名詞。中でも人名の「たったひとつ」感と「たったひとり」感は強いです。ある特定の人物の多様性を忘れさせ、ある人物が多数、無数の人物や事物と結んだ関係性という絡みを一本の短い線に変えてしまう。

他人とは多人なのです。こう書いてもむなし。「たったひとり」感は絶大なのです。

多なのの一に見える仕組み、それが文字です。

世界をシンプルに見たい人には、文字は最適の錯覚製造装置なのです。

決まりに逆らう、一に抗う

話は飛びますが、二十世紀の一時期にフランスあたりで文化的な革命に似た運動の機運がありました。

「フランス現代思想」なんて言葉で検索すれば、たくさんの人名や作品名が出てくるはずです。私もそれに熱中したことがありました。

いまになって思いかえすと、あの運動は決まりに逆らうという言葉と、言葉の身振りに満ちたものでした。

「たったひとつ」という決まりに反抗しまくった人たちがたくさん出たという感じ。

読みの多層性、権力の構造の多元性、解釈と意味の多様性、文字と文字列（アルファベットです）の多義性と多層性、歴史の無数性、知に無数の穴があること（つまりまだらでまばらですかすかであること）、に注目した人たちがいました。なぜか、みんな比較的短命に終わりました。

一への反抗。多への賞賛。

背後に、一神教がある、ロゴスがある、なんていう予定調和的な言い方をすれば、なるほどと思われる方もいらっしゃるにちがいません。

※ロラン・バルト（64歳没）、ミシェル・フーコー（57歳没）、ジル・ドゥルーズ（70歳没）、ジャック・デリダ（74歳没）。瞑目合掌。

*

簡単に言うと、次のようなイメージです。

訳が分からない。とりとめがない。曖昧だ。曖昧模糊としている。両義的どころか、多義的、多層的、多元的。

心当たりがありませんか？ そんな感じでしたよね。

「たったひとつ」を目の敵にして、複数性だの多数性だのを武器にして、反抗しまくったのです。

いまは下火ですね。残党はいるにはいますが、どっちかという「たったひとつ」的な方法で、「たったひとつへの抵抗」をながめているという倒錯におちいっている感があります。「感」ですから印象です。

*

フランス以外の欧州や、アメリカや、はるばると離れた日本でも、似たようなレジスタンス運動が見られました。

日本でも、欧州のローカルな問題をまるで普遍的な自分の問題であるかのように錯覚するという倒錯がはやり、いまもその残滓があるみたいです。詳しいことは知りません。

ちょっとだけイメージを言いますと、フランス語やドイツ語や、はたまたラテン語や

ギリシャ語の駄洒落や言葉の綾を、まるで自分の問題のようにありがたくいただいて翻訳語あるいはカタカナ語で議論しているのです。

*

原文でやればいいことを翻訳でやっている。自分の問題、自分の生まれ育った環境での問題として考えていない。

母語を失念し、ないがしろにした議論だという意味です。いっそ、原語で議論したほうが真摯な態度だと思います。いずれにせよ、普遍信仰です。「たったひとつ」を指向しています。

「たったひとつ」への反抗を対象に「たったひとつ」を目指している倒錯感があります。固有名詞にひれ伏し、作者を信じ、テキストの一義的な解釈を指向しているように見えるという意味です。あくまでも印象です。

抽象と具象を兼ねそなえた言葉

言葉は誰もが生まれた時から、自分の外にあって、それを真似て学び、自分の中に入ります。

これは言葉がこと（言・事）であり物でもあるからです。抽象と具象を兼ねそなえているとも言えるでしょう。

中にいるのに、外にいる気がしてならない。中にいるけど、いまでも外にもいるわけだし、多数の他人の中にもいるのだから、言葉は自分の思いどおりになるわけがない。そんな側面もあります。

他人は多人であり、他者は多者であるからです。

その結果として、言葉は外なのです。外だと言えます。

＊

外にある言葉を遠隔操作するなら——正確には外にある事物を、やはり外にある言葉という代理を使って遠隔操作するなら——、軽量でさくさく動かしたほうがいいに決まっています。

話し言葉はもたもたしています。時間がかかります。それに対し、書き言葉である文字は軽量でコンパクトでさくさく動かします。

抽象と具象と兼ねそなえていますから、人の中に入ったり出たりもできます。

こんなものがほかにありますか？

錯覚は最大の武器

抽象化、コンパクト化、見える化、さくさく軽量化。これらを実現したのが文字です。

何を「〇〇化」したのかといえば、世界、宇宙、森羅万象でしょう。一本化、一つに絞る、これが抽象です。多を一だと錯覚し、チョロいもんだと見なすわけです。

さくさく軽量化すれば、無限に複製し拡散することが可能です。げんにそうなります。ますます拍車がかかるでしょう。

言葉は知識から情報へと出世魚のように名を変えたのです。正確に言えば、言葉というより文字です。

＊

話し言葉は相変わらず重いです。もたもたしています。話すにしろ、再生するにしろ時間を要します。

「話す」は時間の持続と経過の中にあるからです。しかも瞬時に消えるという最大の特徴

(弱点でもいいです) をかかえています。

*

現物の代わりに似たものを使う。代理を使う。代理である偽物をいじって、本物を操っている気分になる。

錯覚は人にとって最大の武器だと思います。ここまで来ることができたのは、錯覚のおかげでしょう。

武器ですから、自分に向くこともあることを忘れたくないですね。

言葉 # 日本語 # 文字 # 錯覚 # 話し言葉 # 書き言葉 # 情報 # 抽象 # 具象 # 複製

学習の成果

＊

学習の成果

星野廉

2022年3月2日 09:15

なんで「カフカ」を例の作家の名前として読んでしまうのでしょうか。

カタカナのかが、漢字の力（ちから）であるのにです。

マカロニ、マカロン、マクロン、ロカントンも、知っている言葉として読んでしまうにちがいありません。

インクの染みや画素の集まりを文字として錯覚したうえで認識するのは別のレベルの錯覚の話をしています。

漢字の口とカタカナの口、漢字の夕とカタカナの夕も区別しにくいというか、区別しろというのが無理なのです。どだい無理なんだい！ 無理難題。

脳トレとたわごとはさておき、どうして知っている言葉や名前として読んでしまうのでしょうか。

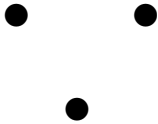
＊

読まれた、見られた言葉や名前に罪も責任もないと思われます。書いた側、読んだ側の問題でしょう。この場合にかいたのはアホです。

書いたアホも、たまたま読んでしまわれた方々も、人です。おそらくヒトだから、正確には日本語の読み書きができる人から、読んでしまっているのです。

良い悪いの問題ではなく、人はそういうふうに行っているのです。そう読んでしまわないほうが危ういと言えます。人でなくなります。

*



これが顔に見えてしまうとすれば、それは人である証拠だと言えます。天井トイレの壁の染みや模様を見て、いろいろな形や顔や表情を見てしまうのも同じです。

私なんか、車や電車を見ていると顔に見えて仕方ありません。

*

そもそも、私たちは言葉を、その言葉が名指しているもの、こと、ありよう、できごとだと思って見えています、読んでいます。

言葉は物ではないのです。

また、「○○の作品を読んだ」(○○には固有名詞が入ります)と言われると、「そうか」とか「それはすごい」と一瞬思ってしまう。

言葉を聞くとか読むというのは一瞬信じないと聞けないし読めないからです。とくに固有名詞の力は強い。たいてい、相手はころりと信じます。「読んだ」を文字どおり取って信じます。

たいてい、信じたままで終わります。面倒くさいからでしょう。日常生活を営むためには細かいことにかかわることができません。誰もがやるのがたくさんあって忙しいのです。

(ひょっとすると、「読んだ」は「ちゃんと読んだ」であって「読めない」とか「そこそこ読んでいる」ではないという、共有されている幻を壊されたくないからかもしれません。夢や希望を壊されたい人はまずいないと思います。)

*

このようにして、一瞬信じたことが人の現実になります。

そのようにできているのでしょうか。というか、人の中に生まれ立つことで、そういうふう学習していくのだと考えられます。

学習の成果です。

おさるさんやオオカミに育てられたとしたら、言葉を現実と混同することはないでしょう。

*

「カフカ」を例の作家の名前として読んでしまうのは、日本語をきちんと学んだと証拠と言えます。

学習の成果です。

例の作家本人も、見知らぬ文字で表記された言葉を目にして、まさかそれが自分の名前だとは考えられないでしょう。「こんなの私ではない」、と。

それが当然です。良くも悪くもありません。可もなく不可もなし。可不可。

「カフカ」という、中国語の表記を見ても分からないはずで、世界レベルで「見る」固有名詞とはそういうものです。

ご自分の名前がアラビア語の文字で書かれているのを想像してみてください。ロシア語で使われているアルファベットよりも衝撃的だと思います。

そう見えないのです。つまり、自分には（自分として）見えない。

また訛りやアクセントの違いがありますから、そう聞こえないのです。自分には（自分として）聞こえない。

*

ちなみに、例の作家の名前でこの駄文を note 内検索しても、たぶんヒットしないと思われる。

「例の作家」「例の作家」と書いて申し訳ありません。固有名詞が苦手なのです。できるだけ、なしで済ませたいのです。性格とか気質の問題だと諦めています。

で、例の作家の名前ですが、あれで検索してこの駄文がヒットしたらどうでしょう？
このアホの書き換えが機械に見やぶられたとするなら……。A | 恐るべしということでしょうね。

もし見やぶったとすれば、ヒトの間違いや錯覚や混同のパターンを学習したことになりますから、怖いという意味です。学習の成果です。

言葉 # 日本語 # 名前 # 固有名詞 # 名詞 # 学習 # 錯覚

実物のない複製の複製、起源のない引用の引用 PART II

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
